スペイン語味覚形容詞の認知言語学的研究

―日本語との対照を通して―

丸岡　真紀穂

目次

第１章　序論.....3
1.1.　本研究の目的.....3
1.2.　本研究の方法.....4
1.3.　本研究の構成.....4
第２章　先行研究.....7
2.1.　味覚に関する生理学的研究.....7
2.2.　先住民語における味覚語彙体系.....7
2.3.　味覚語彙に関する認知言語学的研究.....11
2.4.　スペイン語の味覚形容詞.....12
2.4.1.　スペイン語の形容詞の種類.....12
2.4.2.　スペイン語形容詞の語順.....14
2.4.3.　スペイン語の味覚形容詞に関する研究.....16
2.5.　日本語の味覚形容詞.....17
2.5.1.　語彙分析に関する研究.....17
2.5.2.　認知言語学的観点からの研究.....21
2.5.3.　外国語との対照研究.....23
2.6.　本章のまとめ.....28
第３章　スペイン語の味覚形容詞の意味拡張について.....29
3.1.　共感覚的比喩.....29
3.1.1.　共感覚比喩表現の一方向性仮説.....30
3.1.2.　一方向性仮説への反例.....34
3.2.　スペイン語の味覚形容詞の基本義と拡張義.....37
3.2.1.　dulce.....37
3.2.2.　salado.....55
3.2.3.　amargo.....64
3.2.4.　ácido.....76
3.2.5.　agrio.....85

3.2.6.　本章のまとめ.....94
第４章　スペイン語味覚形容詞の統語的特徴と意味の関係.....96
4.1.　スペイン語形容詞の限定用法における語順.....97
4.2.　スペイン語味覚形容詞の限定用法.....99
4.2.1.　dulce の位置と意味の関係.....100
4.3.　スペイン語の味覚形容詞 dulce の叙述用法.....103
4.3.1.　構文と主観性.....104
4.3.2.　スペイン語の味覚形容詞の叙述用法.....106
4.4.　本章のまとめ.....109
第５章　基本味の日西対照―プロトタイプ的観点から―.....114
5.1.　甘味.....115
5.2.　鹹味.....120
5.3.　苦味.....121
5.4.　酸味.....124
5.5.　旨味.....129
5.5.1.　ワインと日本酒.....129
5.5.2.　スペイン人のおいしさを表す表現.....135
5.6.　本章のまとめ.....138
第６章　結論と今後の展望.....143
用例出典.....146
参考文献.....151

第 1 章

序論

1.1.　本研究の目的

人間にとって、食べることは生命維持のために必要不可欠なものである。また、原始の世界においては、味覚は、それが有害であるか否かを判断するのに、非常に重要な役割を果たしていた。その意味で、人間の五感の中でも味覚は、最も基本的で重要な感覚の一つであるといえるだろう。そしてまた、味覚を表す言葉も言語表現の中で重要な位置を占めているといえる。

味覚は、甘味、鹹(かん)味、苦味、酸味、旨味の 5 つの基本的な味に分類される。本研究では、主にスペイン語の甘味、鹹味、苦味、酸味の 4 つの味覚を表す形容詞を取り上げ、その用法について分析する。

味覚表現は近年まで解明されていない部分の多い分野であったため、言語学的にも味覚表現はあまり注目されてこなかった。しかし、結果が物理的数値に現れやすい視覚を中心とした感覚表現の研究が進むにつれ、それらの表現が他の感覚に意味拡張していることが明らかになり、味覚表現にも関心が寄せられるようになった。

その一方で、研究の対象は動詞が中心となり、形容詞については、それらの研究の一部にわずかに取り上げられるのみであった。近年、日本語の味覚形容詞については、その多義構造に注目し、個々の形容詞の構造を分析した研究が数多くなされている。また、日本語と英語やタイ語、中国語との比較対照研究も盛んになっている。しかし、いずれも個々の言語における味覚形容詞の意味の相違点を並べるに止まっており、それらの相違が生じる要因を明らかにしているものは、管見の限りみられない。

本研究の目的は、第 1 にスペイン語の味覚形容詞の意味拡張の範囲を明らかにし、その意味拡張がどのような比喩に基づいているのかを、日本語との比較を通して明らかにすることである。第 2 にプロトタイプ的観点から、スペイン人と日本人の味覚表現の相違点と類似点を考察することである。

1.2.　本研究の方法

これまでスペイン語の形容詞については、統語的側面からの研究がほとんどであった。特に限定用法における名詞との位置関係は、スペイン語に特有の言語現象であり、数多くの研究が為されてきた。一方で、スペイン語の味覚形容詞の意味を体系的に考察した研究は、管見の限り見られない。しかし、人間の認知能力の１つである味覚を表わす形容詞については、認知言語学的観点からの考察が不可欠であると思われる。

認知言語学では、言語の機能はコンテクストから切り離すことができないと考えられており、実際の用例に基づいた研究が重要である。本研究においても、実際の用例を中心に考察した。スペイン語の用例については、主に CREA (Corpus de Referencia del Español Actual) に依った。CREA に含まれるのは 1975 年から 2008 年までの言語資料で、それ以前の資料については必要に応じて CORDE (Corpus Diacrónico del Español) も参照した。

ただし、コーパスから採取された用例が、必ずしも一般に定着している表現であるとは限らない。山梨 (1988: 63)では、比喩表現について「生き生きした言葉の伝達には、新しい感覚の組み合わせが不可欠であり、このような新しい感覚の組み合わせによって創造的な意味の伝達が可能になる。」と述べているが、特に小説や詩などの文学作品や広告においては、読者を引き付けるために奇をてらった新しい表現が多く用いられる傾向にある。このような表現が、一般の会話でも広くみられるものであるかどうかを検証するため、スペイン在住のスペイン語母語話者[1]を対象にインフォーマントチェックを行った。

1.3.　本研究の構成

本研究の構成は次の通りである。

第１章では、本研究の目的と方法を述べる。

---

[1] スペイン語はスペインのみならず、中南米諸国でも広く話されている言語であるので、本来ならば、それら全てについて検証すべきところである。しかし、中南米諸国におけるスペイン語は地域によって差が大きく、全てをとりまとめるのは困難である。従って、本研究ではスペインの標準的なスペイン語のみを扱うこととし、スペイン以外の地域で話されているスペイン語については、今後の研究の課題としたい。

第２章では、味覚形容詞についての先行研究を概観する。味覚は人間の感覚を直接表現することから、味覚の生理学的役割を考慮する必要があると思われる。従って、生理学的研究についても言及した。その上で、スペイン語と日本語の味覚形容詞に関する研究を検討する。また、認知言語学の分野における味覚形容詞や形容詞の意味拡張に関する研究を概観する。

次に、第３章ではスペイン語の基本味を表す味覚形容詞について考察する。味覚形容詞の意味拡張については、これまで共感覚表現を取り上げた研究が多くなされている。共感覚比喩とは、一つの感覚を表す語が別の感覚を表す現象である。また、共感覚比喩表現については、低次の感覚から高次の感覚に意味拡張が起きるとする「一方向性仮説」が提示されている （Ullmann: 1959, Williams: 1976, 山梨: 1988）。しかし、スペイン語の味覚形容詞の中には、特に味覚より低次の触覚への意味拡張において “*dulce* pelaje” （甘い毛並み）のように、明らかにその説に反すると思われる例がみられる。本章では、各味覚形容詞の基本義を同定し、その意味拡張の範囲を用例に基づいて確認しながら、スペイン語の基本味を表す形容詞の多義構造を示す。

第４章では、スペイン語味覚形容詞の統語的特徴と意味の関係について考察する。スペイン語の形容詞が限定用法で用いられる場合、名詞に後置されるのが無標の語順であるが、前置される場合もあり、これまでにその規則性を明らかにしようとする研究が数多く行われてきた。本研究では、スペイン語の味覚形容詞が、名詞に前置される場合と後置される場合とで、どのような意味の相違を生じるのかを検討する。

さらに、スペイン語の味覚形容詞が叙述用法で用いられる場合、“Todo **me** es dulce.” のように感覚の受容者が間接目的語で現れる文の統語構造をとることがある。本章では、 “me es＋味覚形容詞” のような構文と、感覚受容者が前置詞によって導かれる “**Para mí** todo es dulce.” のような構文との意味の違いを、＜主観性＞という観点から考察する。

第５章では、スペイン語話者と日本語話者の味覚に対する捉え方の違いを、プロトタイプ的観点から考察する。近年では、味覚の生理学的研究において、これまで「甘味」「鹹味」「苦味」「酸味」の４つであるとされてきた基本味の分類に、新たに「旨味」が独立した味として存在することが生理学的な研究から証明されている。日本では、生理学における味覚成分の発見より以前に、伝統的に「旨味」が他の味覚と区別されてきたと言われる。しかし、欧米を初めとする国々では、「旨味」は基本四味が合わさ

ってできた複合的な味であると捉えられてきたため、「旨味」という語が存在しなかった。しかし、現在では第５の味として「旨味」が生理学の分野において確立され、“umami” として知られている。

本章では、スペイン人を対象に基本味のプロトタイプの食品がどのようなものであるのかを調査し、スペイン人と日本人の五味の捉え方にどのような類似点と相違点が見られるのかを考察する。さらに、生理学の分野で近年発見された「旨味」がスペイン語ではどのように表現されているのかを考察する。本研究では、スペイン人と日本人の「旨味」すなわち「おいしさ」を表す表現方法を両言語の食文化の観点から考察し、「おいしさ」を表す表現方法の違いを対照する。

最後に第６章では、結論と今後の展望を論じた。

第２章

先行研究

2.1.　味覚に関する生理学的研究

五感に関する生理学的研究の中でも、視覚表現にあたる色彩語に関しては、早くから多くの研究者が注目し、研究が行われていた。1940 年代ごろになると、マカクという類人猿を対象に、視覚と脳との関係についての経験的な研究が行われるようになった (Glees & Le Gros Clark:1941, De Valois:1960, etc.)。これらの研究では、視覚刺激の種類によって、脳のどの部分に反応がみられるのかなどを調べ、視覚刺激を脳科学的に分析している。このようにして、物理的な数値で表される視覚は、数字で表すことが難しい味覚よりも、研究が進められていったと考えられる （橋本: 1972） 。

また、食物を口にした時、その食感や香りも同時に感じられることから、味覚だけが他の感覚からはっきり区別されることがあまりなかった (Lehrer: 1978, Magee: 2009) ことも、味覚に関する研究が後れをとっている要因であると思われる。

近年では、味覚の生理学的研究において、これまで「甘味」「鹹味」「苦味」「酸味」の四つであるとされてきた基本味の分類に、新たに「旨味」が独立した味として存在することが証明された。「旨味」は、日本語では古くから他の基本四味とは独立した味として存在していたが、欧米では「旨味」は基本四味から構成される複合的な味であると考えられてきた。したがって、欧米には「旨味」を個別に表す表現がなく、新たに証明された「旨味」はアルファベットで “umami” と表記される。現在では、前述の四味に「旨味」を加えた五味が基本味であるとされている。

2.2.　先住民語における味覚語彙体系

次に、先住民語を対象にして味覚語彙について考察した研究をみてみよう。Chamberlain (1903) や Myers (1904) は、先住民語における味覚語体系を調査したものであるが、それまであまり注目されていなかった味覚語を、個別の研究対象として取り上げた画期的な研究と言える。Chamberlain (1903) は、比較心理学の立場から、特に

北アメリカ先住民の言語における味覚語の体系について、英語と比較して考察した。

彼は、英語の bitter, peppermint, pungent, rancid, salty, sour, sweet にあたる語について、その語源や意味、派生語などの体系を明らかにし、以下のような特徴を挙げている。

① 北アメリカのアルゴンキン族の言語の中で一般的に、「良い味 (good taste) 」と「悪い味 (bad taste) 」とを区別する語が存在する。

例）uri, miyo, wuli ‘good’

matsi, mangi, matchi ‘bad’

② 英語の味覚語に対応するような語が存在するが、中には複数の味覚刺激を表す語もある。

例）wishko ‘sweet’

wisa ‘bitter’, ‘disagreeable’

wingi ‘excellent’

siwisiw ‘it is acid, sweet, salt’

siw ‘acid, sweet, salt, sour, sharp’

また、Myers (1904) はトレス諸島先住民語の味覚語体系を調査し、結果を以下のようにまとめている。

① トレス諸島では甘味を表す語は「おいしい (tasting good)」が一般に用いられる。

② 同じ表現が鹹味表現にも用いられ得る。

③ 鹹味を表す際に最もよく用いられる語は「海水 (sea-water)」から派生した語である。

④ 鹹味と酸味を表す語はよく混同される。

⑤ 苦味を表す語は存在しない。

(Myers 1904: 119) (日本語訳は筆者による)

さらに、印欧語やその他の言語の味覚語が、これらの結果にどのように対応するかについても調査している。

① ギリシャ語やラテン語、英語の甘味を表す形容詞の語源となっているサンスクリット語の suad は ‘tasting pleasantly’ を表す語であった。このことから、味覚語としての意味は後になって得られたものであり、最初は「味が良い」ことのみを表す語であった。

② 先住民語では鹹味はポジティブなものとして評価されてきた。サンスクリット語の lavana (salty) も、後に「光彩」「優雅さ」「美しさ」を表すようになった。また、多くの言語において甘味と鹹味を同じ語が表すことがある。

③ 鹹味を表す語は、ヨーロッパの言語においても語源は「海水」‘sea-water’ である。ただし、ヨーロッパの言語には他の感覚を表す語から味覚語になったものも多く、ラテン語の acidus やサンスクリット語の tikta（いずれも「鋭さ」を表していた）などのような例も多くみられる。一方で、先住民語の中には甘味や鹹味を単に「味がする」‘there is a flavor’ と表す言語もある。

④ ヨーロッパの言語においても、鹹味と酸味はしばしば混同される。ポリネシアの多くの言語においてキニーネの味を複数の語で表現することがある。特に酸味や鹹味と混同される。また、言語によっては酸味と苦味を「不快な」「渋い」「痛みを伴う」味の概念をまとめて表現する語が存在する。

（日本語訳は筆者による）

これらの調査から Myers は、先住民語における味覚語彙体系は、英語などの言語に比べて味覚があまり区別されていないこと、また基本的には「おいしい」か「まずい」かが区別の基準となることを明らかにした。さらに、原始的な語で色彩語の青と黒が区別されないことや、サンスクリット語やギリシャ語など、現在の英語やスペイン語の基となる言語において、トレス諸島での実験結果と類似する現象がみられることから、原初的な言語では英語のような言語と比べて、感覚の区別がなされていないことを指摘した。

Lehrer (1978)では、感覚語彙の構造と意味拡張の研究の中で、英語の味覚形容詞を取り上げて分析している。ここでは基本味を表す語を sweet, dry, sour, tart, bitter, salty であると定義し、それらが 1. Taste, 2. Evaluative (pleasant – unpleasant), 3. Personality, 4. Humor / wit, 5. Other (a) Spoiled (b) Saline (c) Sound (d) not wet の意味領域のうち、どこ

に標準的な意味を持つのかがまとめられている。

Domain	sweet	dry	sour	tart	bitter	salty
1. Taste	×	× 'not sweet'	×	×	×	×
2. Evaluative pleasant-unpleasant	×		×		× *bitter experience*	
3. Personality	×		× 'cross' *sourpuss*		× 'marked by resentment'	
4. Humor, wit		× 'sarcastic' *dry wit*				×
5. Other						
(a) Spoiled	× 'not spoiled, fresh'		× *sour milk*			
(b) Saline	× 'fresh' *sweet butter*					×
(c) Sound, esp. music	× in jazz adherence to melodic line		× *sour note*			
(d)		'not wet'				

表１　味を表す語　(Lehrer 1978: 99)[2]

この調査結果から Lehrer は以下のように指摘している。

① 全ての味覚形容詞が他の感覚に意味拡張されるわけではない。

② sweet は、それぞれ異なる意味領域において、他の全ての語と対照をなす。

③ 味覚形容詞は互いに対称をなすが、温度を表す形容詞のように単純に置き換えることができるわけではない。但し、 sweet-tart-sour の間では、語を相互に置き換えることができる。

[2] 表１において、×はその概念で基本的な意味を持つことを示している。

2.3. 味覚語彙に関する認知言語学的研究

Dirven (1985) は、メタファーを語の意味拡張の基本的な方法であるとし、英語の sweet を例に挙げて、sweet の意味拡張においてメタファーがどのように作用しているかを分析し sweet の意味拡張にはメタファーと共感覚的意味拡張が、大きく関わることを指摘した。また、sweet の多義構造について以下のような表にまとめ、それぞれの意味拡張がどのような比喩に基づくのかを分析している。

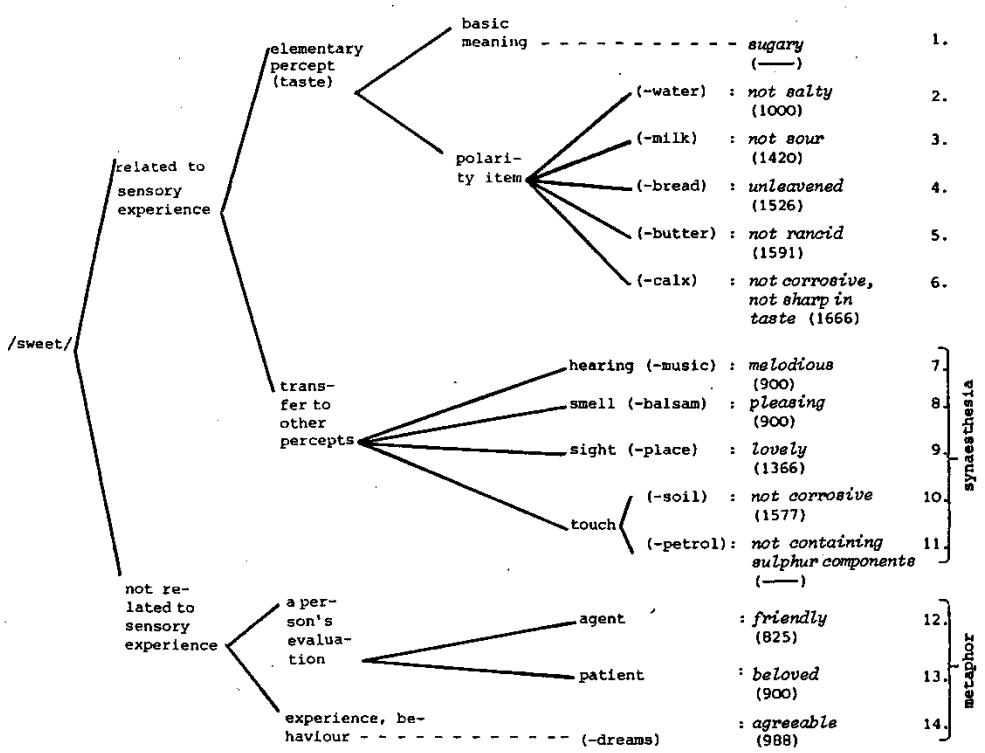


表２　sweet の意味拡張のプロセス　　(Dirven 1985: 105)

一方、Moiseeva (1999)は、日本語や印欧諸語を含む 75 の言語における甘味を表す形容詞を考察し、それらの語の意味が pleasantness と flattery の二つの方向に拡張することを示した。甘味は過剰摂取しても味蕾への刺激が他の味覚よりも少なく、また甘い食物は有毒であることも危険であることもほとんどない。このことが、pleasantness への意味拡張の動機であるとしている。一方で、特に sweet が人間や人間の行為につい

て用いられる場合、ネガティブな概念を表す場合があることを示した。そのうちドイツ語などでは、flattery を意味することを指摘した。甘いものは有毒であることは少ないが、過剰摂取は健康被害をもたらしたり、飽満を招いたりする。このことを‘excessiveness（過度）’と呼び、sweet と flattery はこの‘excessiveness’の概念によって繋がっていると考えた。

これらの研究では、味覚語、特に甘味を表す語に関する分析が行われ、その多義構造が明らかにされた。また、意味拡張の観点から、その方向性や拡張の動機を明らかにしようとする研究も行われた。しかし、これらのほとんどが英語や、英語と他の言語との対照を中心としており、個別の言語についての研究はあまり為されていない。また、Moiseeva (1999)のように多言語にわたる研究においても、それぞれの言語の味覚語の意味を全て検討していない場合があり、例えば日本語の「甘い」が人物に対して「厳しさが足りない」意味や、ネジなどの「締まりが悪い」意味で用いられることについては‘excessiveness’では説明がつかない。

人間に備わっている感覚受容体は共通のものであり、与えられる刺激を感知する能力に大きな差異はない。したがって、一つの感覚に対して多言語にわたって共通の語が存在することは、ごく自然なことと考えられる。一方で、感覚を表す語の意味が言語によって異なることがあるのは、話者の味覚刺激に対する概念が、話者の持つ食に関する文化的背景や習慣によって異なるからであろう。次節では、特にスペイン語と日本語の味覚形容詞についての先行研究を挙げ、これまでに指摘されている問題を検討したい。

2.4. スペイン語の味覚形容詞

日本語の形容詞は、限定用法において常に名詞に前置されるが、スペイン語の形容詞は、前置も後置も可能であるという統語的特徴がある。

2.4.1. スペイン語の形容詞の種類

スペイン王立アカデミー発行の Nueva gramática de la lengua española (Real Academia Española: 2010) は、スペイン語の形容詞 (adjetivo) について以下のように定義している。

“El adjetivo es una clase de palabras que modifica al sustantivo o se predica de él aportando muy variados significados. En un gran número de casos, el adjetivo denota propiedades o cualidades. […] El término adjetivo se suele usar en un sentido laxo y en otro restrictivo. El primero, más frecuente en los estudios tradicionales, es el resultado de privilegiar los dos criterios formales que caracterizan a esta clase de palabras: la CONCORDANCIA con el sustantivo y su función como MODIFICADOR de este. […] Las voces que se recogen en esta relación se agrupan tradicionalmente en dos clases: la de los ADJETIVOS CALIFICATIVOS, que designan cualidades, y la de los ADJETIVOS DETERMINATIVOS, que introducen el grupo nominal y delimitan su denotación especificando a cuántas y cuáles de las entidades designadas por el nombre hace referencia el hablante.”

（形容詞は名詞を限定する、或いは多様な意味をもたらしつつ名詞について叙述する品詞である。かなり多くの場合、形容詞は属性または品質を示す。[…] 形容詞という用語は広い意味と制限された意味とで用いられる傾向がある。まず、伝統的な研究において最も頻繁なのは、この品詞を特徴づけている二つの形式的な基準を優遇した結果である：名詞との「一致」と名詞の「修飾語」としての働きである。[…] この関係に当てはまる語は伝統的に二つに分類される：「品質形容詞」は名詞句を導き、「限定形容詞」は、名詞によって示されたもののうち、話者がどの、またどれだけのものに言及しているのかを具体化しながら、その明示的意味の範囲を限定する。）

（日本語訳は筆者による）

上記の記述から、スペイン語の形容詞は名詞を修飾し、名詞について叙述するという点においては日本語の形容詞とほぼ同じ役割を担っているといえる。しかし、日本語の形容詞が名詞に前置されるのみであるのに対し、スペイン語の形容詞は前置も後置も可能であるという統語的特徴がみられる。

2.4.2. スペイン語形容詞の語順

スペイン語の形容詞において特徴的なことは、限定用法における名詞との位置関係である。スペイン語の形容詞は、限定用法の場合、名詞に後置されるのが無標である。この際、形容詞は次のように名詞を類別している。

(1) manzana *dulce* (甘いりんご)

(2) camisa *negra* (黒いシャツ)

しかし反対に、以下のように形容詞が必ず前置される場合がある。

(3) En toda la ciudad vemos *enormes* muñecos de cartón.
（町全体に巨大なボール紙の人形が見えます。） （説明）
（上田 2008: 2）

(4) Él tiene *mal* carácter. （評価）
（彼は性格が悪い。）

(5) Tengo *varios* amigos. （数量）
（私は何人か友人がいる。）

(6) *blanca* nieve （属性）
（白い雪）

また、前置と後置で意味が変わるものもある。

(7) casa *nueva* （新築の家）

(8) *nueva* casa （新居）

さらに、前置も後置も可能で、意味が(9)や(10)のように変わらないものもある。

(9) Quiero una manzana *dulce*. （私は甘いリンゴが欲しい。）

(10) Prueba este *dulce* melón. （この甘いメロンを食べてごらん。）

このように、名詞に必ず前置されたり、前置も後置も可能であるような場合も含めた、スペイン語の形容詞の語順の規則性について、これまでに以下のような説が主張されてきた。

Bello (1847)

“Lo más común en castellano es anteponer al sustantivo los epítetos cortos y posponerle los adjetivos especificantes, como se ve en mansas ovejas y animales mansos, pero este orden se invierte a menudo, principalmente en verso.”

（カスティーリャ語において最も一般的なのは短い特徴形容詞 (epítetos) を名詞の前に置き、特殊化形容詞 (especificantes) は後ろに置かれる、例えば *mansas* ovejas と animales *mansos* のような場合である、しかしこの語順は主に詩句においてしばしば逆転する。）

Hanssen (1913)

“En terminología más sencilla, podemos decir que el adjetivo pospuesto tiene carácter objetivo y el adjetivo antepuesto tiene carácter subjetivo.”

（もっと易しい用語では、後置形容詞は客観的性質を表し、前置形容詞は主観的性質を持つと言えるだろう。）

Lenz (1925)

"El adjetivo antepuesto tiene valor subjetivo y encierra una determinación o apreciación afectiva (moral y estética) del sustantivo; el pospuesto tiene valor objetivo y encierra una especificación lógica del sustantivo."

（前置形容詞は主観的意味を持ち、名詞の情動的な評価や限定を内包する; 後置は客観的意味を持ち、名詞の論理的明示 (especificación lógica) を含む。）

しかし結局のところ、これらのいずれにも確実な規則性というものはなく、単なる傾向でしかないとされてきた。現在 RAE (2010: 255) ではこれまでの主張をまとめ、形容詞の位置についての項目で以下のように説明されている。

“La posición posnominal es la NO MARCADA, ya que es la más natural en la mayor parte de los registros y con varias clases de adjetivos. Ocupan la posición posnominal los adjetivos RESTRICTIVOS, sean calificativos, relacionales o descriptivos; en la antepuesta suelen ubicarse los no restrictivos, sean epítetos o adverbiales, así como los que se asimilan a los determinantes y cuantificadores.”

（名詞後置は無標の位置である。それは大部分の言語使用域と様々な種類の形容詞に最も自然な位置だからである。制限的形容詞は品質形容詞であれ、関係形容詞であれ、記述形容詞であれ名詞に後置される。一方、非制限的形容詞は、特徴形容詞であれ、副詞的形容詞であれ、限定形容詞、数量形容詞とされるものと同様、常に前置される。）

（筆者訳）

以上に挙げた先行研究の主張だけでは、(9)や(10)の例に挙げたような、前置も後置も可能であるような形容詞のふるまいを説明することができない。本研究では、(9)や (10) で示したようなスペイン語の形容詞の統語的特徴について第 4 章において検討する。

2.4.3. スペイン語の味覚形容詞に関する研究

スペイン語については、統語的・意味的観点からも、認知言語学的観点からも、味覚形容詞に関する研究が活発であるとは言えない。また、日本語との対照研究も管見の限りほとんどみられない。このことの要因としては、前節で述べたように、味覚が長い間言語学的研究の対象とされてこなかった背景が考えられる。

Barcelona (2001) では、英語とスペイン語の概念メタファーの仕組みを分析する中で “LOVE IS SWEET, TENDER, OR APPETIZING FOOD” という概念メタファーを示し、英語の sweet とスペイン語の dulce の用法について認知言語学的観点から考察している。また、sweet は呼びかけでも使われるが、dulce は呼びかけとしては使えないことなどを挙げ、双方の共通点、相違点を明らかにしている。

また、英語との対照研究に O’ Mahony & Manzano (1980) がある。これは、メキシコにおいてスペイン語のみを話すメキシコ人、英語のみを話すアメリカ人（カリフォ

ルニア在住）と英語とスペイン語の二ヶ国語話者を対象とし、味覚語の使用にどのような違いがあるかを調べたものである。調査の結果、以下の事を指摘している。

① 英語で sour / bitter が混同されるが、同じようにスペイン語でも ácido / amargo が混同される。
② メキシコ人の英語、スペイン語の二ヶ国語話者は、英語で話す際に sour よりも acid を多用する。このことは、母語が第二言語の語彙選択に関わりうることを表している。
③ スペイン語の味覚表現の方法には、英語との味覚分析に利用され得るような特徴はみられなかった。

このように、スペイン語の味覚形容詞についての個別の研究は数少なく、その意味構造に関する体系的な研究が必要であると思われる。本研究では、第２章でスペイン語の味覚形容詞の基本義、拡張義、また意味拡張の方向について考察する。次節では、日本語の味覚形容詞に関する先行研究をみてみよう。

2.5. 日本語の味覚形容詞

2.5.1. 語彙分析に関する研究

日本語の味覚形容詞については、特にその多義構造を分析した研究が多く為されている。

山田 (1972) は、東京方言と現代宮古方言のそれぞれにおける味覚名称を比較対照し、その体系を考察している。山田は、宮古方言の基本味を表す形容詞を、東京方言の基本味形容詞と比較し、以下の表のようにまとめた。

あ　ま　い	
azima	ama

すっぱい	
sou	sowe

からい	しょっぱい
kara	sokara

し　ぶ　い
sitakupal

に　が　い
ŋgja

表３　宮古方言と東京方言の味覚名称の対応関係

このうち、“sou”（よく熟していない果物の味）、“sitakupal”（舌がこわばる感じ）、“ngja”（粉薬の味、胡瓜の味）、“sokara”（食塩の味）には、甘味を表す“azima”との対立が認められるとし、宮古方言における味覚名称の対立関係を次の図で示した。

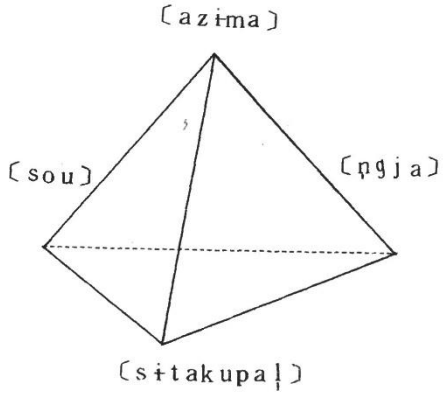


図１　宮古方言の味覚名称の対立関係

一方で、東京方言の味覚名称には「あまい」、「しょっぱい」、「すっぱい（すい）」、

「しぶい」、「からい」が認められるとし、相互の対立関係が認められるかどうかをその基準とした。また、「にがい」については「にがいビール」に対して「あまいビール」が言えないことから、「あまい」との対立関係が成立しないため、「にがい」は言葉の上では直接的にこれら 5 つの味覚語に関与しないものとした。しかし、化学的には「にがい」が基本味の 1 つであること考慮し、味覚名称の体系において他の名称から最も遠い距離にあると位置づけて、次のような味覚名称の体系を示した。

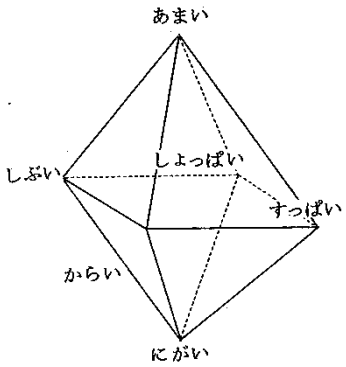


図２　東京方言の味覚名称の体系　　（山田 1972: 35）

国広 (1982) は、語彙構造が言語外の要因によって規定される例のうち、味覚形容詞を「生理的に規定された構造」として取り上げ、山田 (1972) の東京方言の味覚形容詞体系の図を用いて、山口方言の味覚形容詞体系を新たに示した。

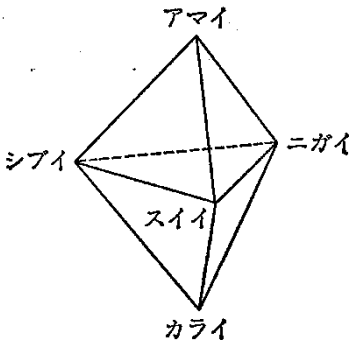


図３　山口方言の味覚形容詞の体系　　（国広 1982: 153）

この図では、「アマイ」と「カライ」を基本的な対立関係にあるとし、その他の「シブイ」「スイイ（酸っぱい)」「ニガイ」はいずれも好ましくない味として同一平面上に並べている。

西尾 (1983) では、日本語の味覚形容詞について、用例を詳細に分析し、味覚形容詞の体系を示している。最も基本的な味覚形容詞を、単純語である「あまい」「からい」「すい」「すっぱい」「しぶい」「しょっぱい」であるとし、中でも地理的分布が広く、副次的意味領域を持ち、さらに味覚以外の転義が広いことから、「あまい」と「からい」が基本の味覚形容詞であると結論付けている。

青谷 (2001) では、「甘い」を取り上げ、「甘い」という語が与えられた時に、想起される語を分析し、語の想起のされ方に一定の傾向があることを明らかにした。また、連想されやすい語の意味は定着度が高いとし、基本義（味覚)、厳格さの不足、心理的快感が、形容詞「甘い」の意味のうち、定着度の高いものとして挙げられている。また、これらの分析から形容詞「甘い」の意味拡張ネットワークを、以下の図のようにまとめている。

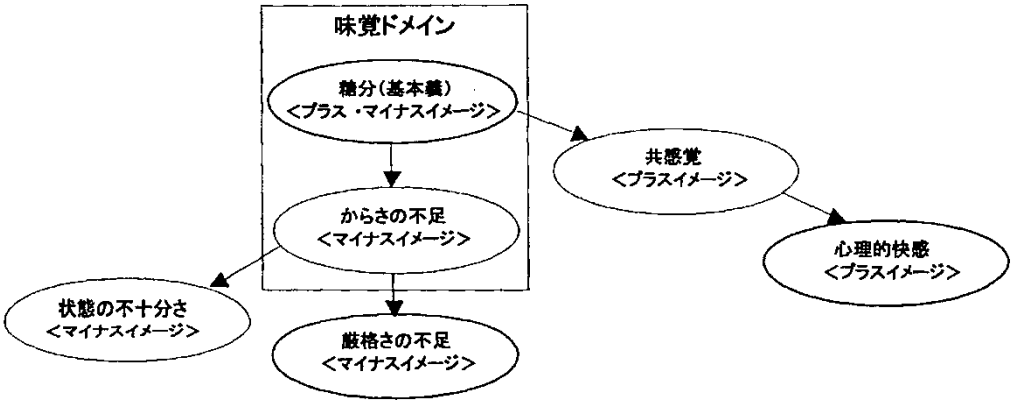


図４　「甘い」の意味拡張ネットワーク　　（青谷 2001: 158）

これらの研究の中で特に注目すべき点は、国広 (1982) や西尾 (1983) において日本語の基本的な味覚は「甘い」と「辛い」であると指摘されていることである。1.2. 節で北米の先住民語における原初的な味覚語彙についての研究に触れたが、これらの

言語では味覚の最も基本的な対立は「おいしい」と「まずい」であったことを考慮すると、日本語はそれらの言語とは異なる体系を持つと推測される。

2.5.2. 認知言語学的観点からの研究

2.3.節で述べたように、味覚形容詞の語彙構造が明らかにされると、味覚形容詞の他の感覚への意味拡張が注目されるようになった。

特に認知言語学では、意味は derives from the experience of functioning as a being of a certain sort in an environment of a certain sort（ある種の環境の中で、ある種の存在として生きていく経験から生じる） (Lakoff 1987: 292) と考えられており、言語は人間の認知能力の反映と捉えられている。このような立場から、味覚形容詞の多義性について、意味拡張の動機づけを明らかにしようとする研究が行われてきた。

武藤 (2001a) では、語の多義的別義は比喩に基づくという立場から味覚形容詞「甘い」と「辛い」の意味を分析し、それぞれの多義構造を示している。また、「酸っぱい」については武藤 (2002) 、「苦い」については武藤 (2000) で意味分析を行い、それぞれ以下の図のような多義構造を持つことを明らかにした。

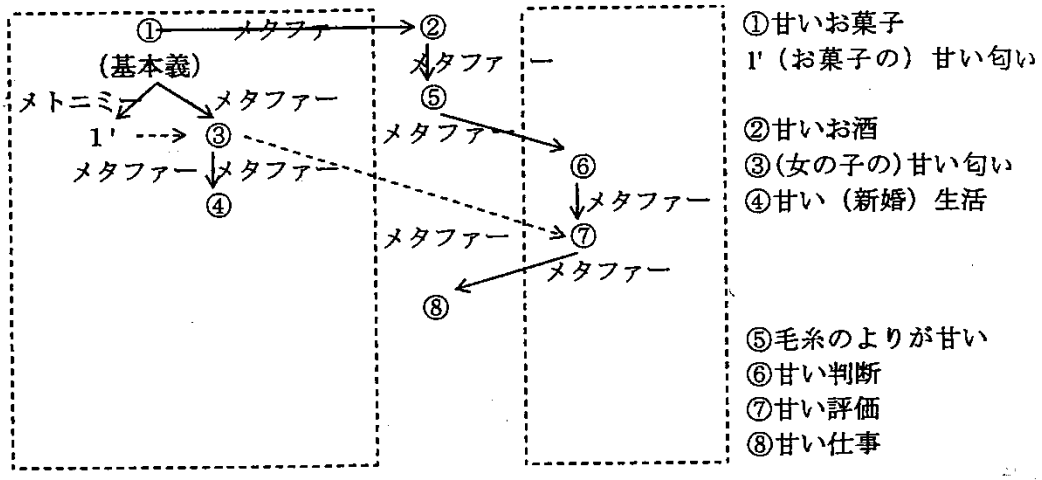


図５　「甘い」の多義構造　　（武藤 2001a: 48）

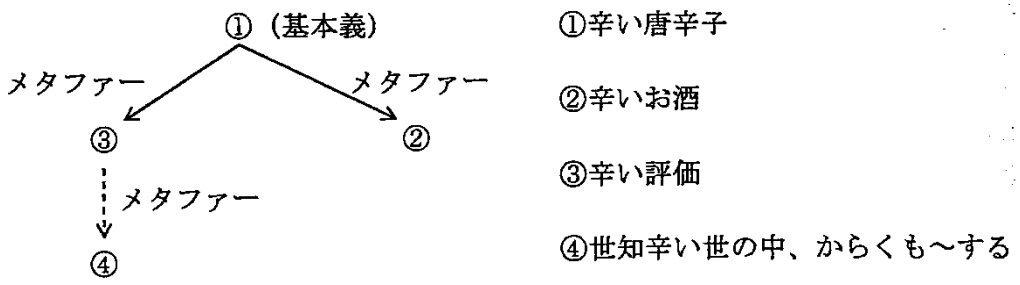


図６　「辛い」の多義構造　　（武藤 2001a: 50）

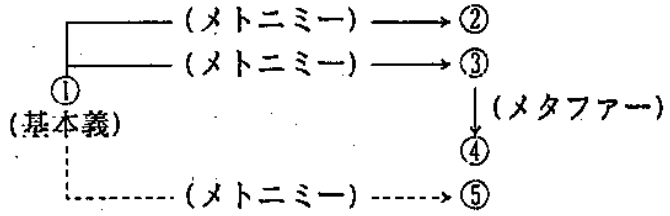


図７　「酸っぱい」の多義構造　　（武藤 2002: 86）

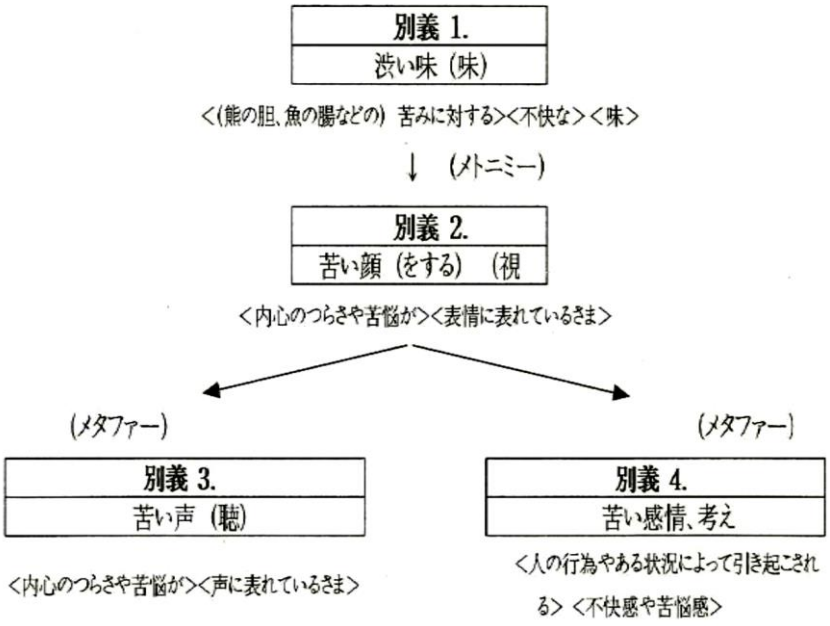


図８　「苦い」の多義構造　　（武藤 2000: 263）

さらに、意味拡張は比喩によるとの観点から、籾山 (2001) の提唱した多義語の意

味を統括するモデルに従い、「メタファー」「メトニミー」「シネクドキー」の三つの原理に基づいて多義派生の動機付けを説明している。

瀬戸 (2003) では、味覚表現についての考察において、「共感覚表現」に触れ、味覚表現は基本語が乏しいにも拘らず、「甘い」や「苦い」については、それらが極めて重要な基本語であることから、共感覚以外の抽象的な意味まで広範囲に意味拡張していることを指摘した。

さらに武藤 (2004) では、瀬戸 (2003) の一方向性仮説に従う例と従わない例の表を基に、一方向性仮説に従う例と従わない例を項目ごとに整理した。また、従来共感覚比喩表現の成立に関わる比喩としてメタファーが取り上げられるが、共感覚比喩に関わるメトニミーの分析により、共感覚比喩にはメタファーだけでなくメトニミーが多く関わることを指摘した。

2.5.3. 外国語との対照研究

日本語の味覚形容詞の研究で最も注目されるのは、「甘い」が他の言語の甘味を表す形容詞にはみられない否定的意味を持つことである。このことから、英語を始めとして中国語やドイツ語などとの対照研究が行われてきた。

Backhouse (1994) は、日本語の味覚形容詞を含めた味覚語彙について意味論的研究を行った。この中で味覚形容詞の意味拡張について、「甘い」の意味が「心地よい感覚」と「厳しさ・締め・鋭さ・現実性 (strictness/ tightness/ sharpness/ hard-headedness) の欠如」の二つの方向に拡張することを示した。

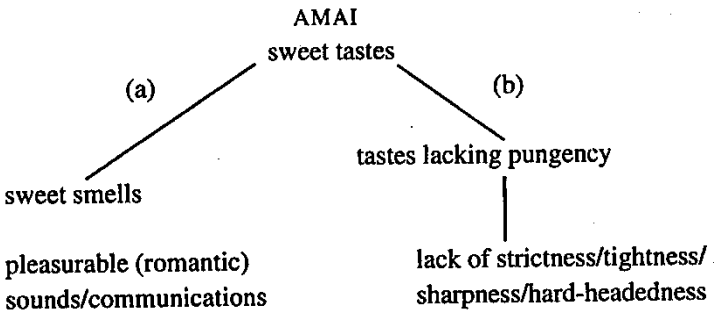


図９　「甘い」の拡張義　(Backhouse 1994: 155)

また、「甘い」が「厳しさ・締め・鋭さ・現実性の欠如」に意味拡張するのは、「塩分が足りない」意味を持つことから、何かが不足している感覚による意味拡張であると説明している。

さらに、英語では sweet と bitter が基本的な対義関係にあるが、日本語では「甘い」と「辛い」が対義関係にあることを指摘し、「甘い」と「辛い」の対義関係が、「厳しさ・締め・鋭さ・現実性の欠如」という、他の欧米の言語にはみられない意味拡張をもたらしたと述べている。

最上 (2002) では、ドイツ語のメタファー表現について日本語と対比させながら考察している。最上は、ドイツ語の味覚形容詞のメタファーを「転義用法としてのメタファー」と「慣用句としてのメタファー」の２つに分けた。その上で、salzig（塩辛い）以外の全て（süβ<甘い>、bitter<苦い>、sauer<すっぱい>）の基本味覚形容詞に転義用法が存在することを、コーパスを利用した調査により明らかにした。

また、味覚形容詞が味覚としての意味を保持したまま、慣用句の中で用いられることを「慣用句としてのメタファー」と呼び、「転義用法としてのメタファー」と区別している。「慣用句としてのメタファー」においては、味覚形容詞は原義を保っており、慣用句全体として初めてメタファー的意味をなす。したがって、「慣用句としてのメタファー」は、形容詞自体の多義性によるメタファーではなく、句全体が文脈の中に置かれて初めてメタファー的意味が得られることから、「転義用法としてのメタファー」とは区別されている。

さらに、sauer が日本語の「すっぱい」にはみられない「不機嫌な」を意味することから、sauer を対象に「慣用句としてのメタファー」と「転義用法としてのメタファー」の実例を分析している。

Jantra (1999) は、タイ語の waăn（甘い）を日本語の「あまい」と英語の sweet の意味拡張のプロセスについて次のような考察を行った。

まず、日本語の味覚形容詞では「あまい」と「からい」が対義関係にあることを挙げ、これらが対義語化される段階を「独立の段階」、「対等な対義関係の段階」、「一元化の段階」の３つに分けた。

まず、他の味覚形容詞と対義関係をなしていない段階を「独立の段階（段階 A）」

と呼んでいる。例えば「このケーキはあまい。」のような文において、ケーキがあまくないことを指して「*このケーキはからい。」とは言えない。このことを、以下のような図で表している。

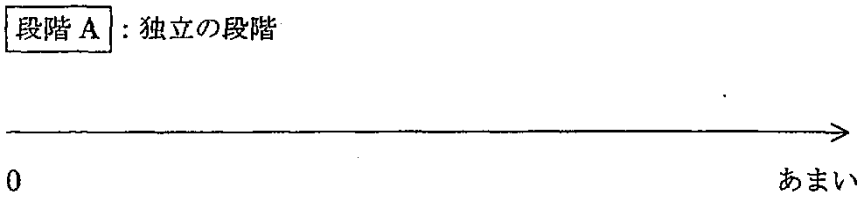


図１０　対義語化の段階 A　(Jantra 1999: 145)

次に、「このカレーはあまい。しかし、あのカレーよりはからい。」のように、「あまい」が他の味覚形容詞と対義関係をなしていて、さらにその関係が対等である場合を「対等な対義関係の段階（段階 B)」としている。この時の「あまい」とその他の味覚形容詞の関係を以下の図で表している。

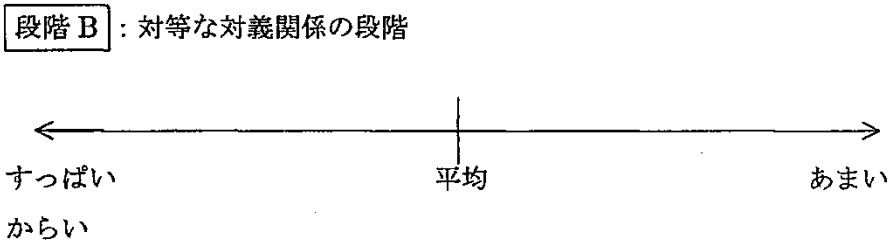


図１１　対義語化の段階 B　(Jantra 1999: 146)

最後に、「あまい」が極ではなく、他の味覚形容詞の軸状を移動する相対的な評価となる場合を「一元化の段階（段階 C)」と呼んでいる。例えば、「カレーはからいものだ。」とは言えるが、「*カレーはあまいものだ。」とは言えない。段階 B では同じカレーについて「あまい」と「からい」が対義関係をなしていたが、段階 C で対義語とならないのは、段階 C においては「からい」が基準となっており、「あまい」はその基準軸上を移動する評価であるという。

段階 C：一元化の段階

図１２　対義語化の段階 C　(Jantra 1999: 147)

また、これらの段階を英語とタイ語の「あまい」にあたる語と対照し、段階 B においてタイ語と英語では、日本語のような対等な対義関係をなしていないことを指摘している。例えば、「このみかんはあまい。しかし、あのみかんよりはすっぱい。」が日本語では問題なく言えるが、英語で “*This one is sweet. But it’s sourer than that one.” や、タイ語で “*som luk nii wǎan tae priaw kwaa luuk nan （このみかんはあまい。しかし、あのみかんよりはすっぱい。）” とは言えない。これは、日本語の「あまい—すっぱい」の対義関係が連続した相対的な評価であるのに対して、英語の “sweet-sour” やタイ語の “wǎan-priaw（あまい—すっぱい）” は、それぞれ独立した領域を持ちながら対義関係をなしているからであるという。このような対義関係の段階を Jantra は「二極化（段階 B’）」と呼び、この後一元化されることなく、段階 C には広がらないとしている。

段階 B′

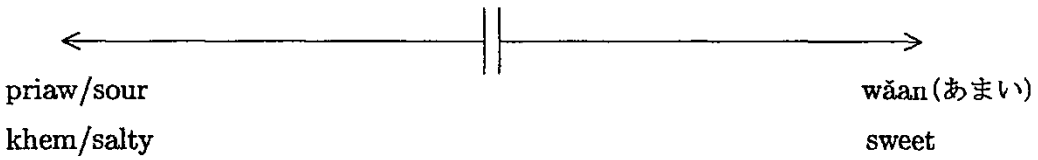


図１３　対義語化の段階 B’　(Jantra 1999: 164)

そして、この一元化の段階が、日本語の「あまい」が否定的な意味に拡張していることに深く関係しているという。つまり、「からい」の軸上で移動する「あまい」が、「からい」の拡張義である「(評価が）からい」や「きびしい」、「(守りが）かたい」などの対義語にもなったことで、「あまい」が他の言語にはない否定的な意味を持つに至ったと説明している。

崔＆馬場 (2010) は、日本語の「甘い」「辛い」を中国語の「甜（甘い)」と「辣（辛い)」の多義性について詳細に分析し、日本語と中国語における相違点を明らかにした。まず「甘い」と「甜」はいずれも味覚が原義であるが、「甘い」は二次的表現として「(塩分やアルコール度数など）刺激の度合いが弱い、緩い」という意味を持っているのに対し、「甜」の二次的表現の対象は「水、お茶」の二つに限られ、「塩分のない、苦くない」という意味で用いられるという。また、「甘い」はその二次的表現から「マイナスイメージを持つ言葉」に意味拡張しているが、「甜」にはそのような用法はなく、「時間」や「眠る様子」を表すと説明している。

さらに、「辛い」と「辣」については、「辛い」が「唐辛子のような痛覚、刺激の強い味」と「塩分による刺激が強い」ことの二つの基本義を持つのに対し、「辣」は「唐辛子やにんにくのようなすべての刺激の強い味」のみが基本義であると述べている。また、「辣」には「辛い」が持つ「甘さを欠いている、足りない」意味もないという。一方で、「辛い」の意味が「他者に対する評価」にのみ派生しているのに対し、「辣」は「共感覚比喩表現」や「心的事象」、「外界の事象」など広く意味が派生していることを指摘している。

		甘い（日本語）	甜（中国語）	辛い（日本語）	辣（中国語）
味覚	基本義	○	○	○	○
	二次的表現	○	○	○	−
他感覚（嗅覚，聴覚，視覚）		○	○	−	○
体の感覚		−	−	−	○
心的事象	「甘い」という心的感覚を起こす事象	○	○	−	−
	心理感覚	○	○	−	−
	男女関係における感情	○	○	−	−
	感情の動き	−	−	−	○
	女性の性格	−	−	−	○
外界の事象	他者に対する態度・姿勢	○	−	−	−
	物事に対する姿勢	○	−	−	−
	他者に対する評価	○	−	○	−
	外界の事物の状態	○	−	−	−
	時間に関するもの	−	○	−	−
	眠る様子	−	○	−	−
	仕事ぶり	−	−	−	○
	言葉，文章の特徴	−	−	−	○
	芸術作品の特徴	−	−	−	○
	手口，やり方	−	−	−	○

表４　「甘い」「辛い」の意味派生の比較　　（崔＆馬場 2010: 77）

張 (2010) は、日本語の「甘い」、「辛い」と中国語の「甜（甘い)」、「辛・辣（辛い)」を対照し、メタファーを用いて分析している。張によれば、中国語の「辛い」にあたる語は「辛」と「辣」の二つあり、「辣」は「辛」が「刃物・針」の意味から味覚の「辛い」の意味に拡張した後に作られた語であるという。「辛」の方は、元々の「刃物・針」から「刺す」を意味し、「苦労・悲痛」のようなマイナスの意味にのみ拡張したが、日本語の「辛い」と「辣」は「刺激のある味」から、プラスにもマイナスにも意味が広がっていることを明らかにした。

また、「辛」は「刺す」という原義から、「ひりひりする」などの触覚表現、「辛そうな色、見た目」や「セクシーで魅力的な（女性)」のような視覚表現への共感覚的意味拡張がみられることを明らかにし、日本語の「辛い」が、特に「セクシーで魅力的」の意味に拡張していないことから、原義の意味拡張への関連を指摘した。

2.6. 本章のまとめ

以上の先行研究から、近年、生理学的にも言語学的にも味覚に関する研究が注目され始めていることが分かる。特に、味覚形容詞については、日本語や英語、中国語などにおいて盛んに研究が進められている。しかし、これらの研究成果は、味覚形容詞の多義性や多義構造について明らかにしているものの、そのメカニズムについては、明確な説明が示されていないようである。

また、スペイン語の味覚形容詞についての研究がほとんどみられないことから、本研究では、スペイン語の味覚形容詞についての詳細な分析を行い、その統語構造と意味の関係を考察する。さらに、スペイン語と日本語との対照を通して、味覚表現と文化的背景との関わりについて考えてみたい。

第３章

スペイン語の味覚形容詞の意味拡張について

本章では、スペイン語の甘味、鹹味、苦味、酸味の基本四味を表す dulce, salado, amargo, ácido, agrio について、各語の由来、変遷を考察しつつ、辞書の記述やコーパスの例文を分析して意味区分を行う。その上で、スペイン語味覚形容詞の多義構造を分析し、その認知的動機付け (cognitive motivation) を明らかにしたいと思う。これまでの味覚形容詞の意味拡張についての研究では、共感覚表現に焦点を当てたものが多かった。また、共感覚比喩には一定の方向性が認められることが指摘されている。（Williams:1976、山梨:1988、国広:1989）。最初に、共感覚比喩と一方向性仮説がどのようなものであるかをみてみよう。

3.1. 共感覚的比喩

スペイン語では、以下の例のように、味覚以外の五感について dulce を用いる共感覚比喩に基づく用法がみられる。

(11) a. olor *dulce* （甘い匂い）

b. voz *dulce* （甘い声）

c. rostro *dulce*（甘い表情）

共感覚比喩表現については、池上 (1999[8]) において、「人間の異なる種類の感覚器官を通じての知覚の間に認められるある種の平行性に基づいて、本来ある種の感覚について用いられた表現が他の種類の感覚について用いられるという現象である」と述べている (池上 1999[8]: 241)。池上は、例として英語の soft voice が、聴覚に関して用いられる voice＜声＞に、soft＜柔い＞という本来触覚に関する語が結び付けられていることを挙げて、共感覚比喩表現を説明している。

また、共感覚比喩には一定の拡張の方向性がみられることが従来から指摘されている（Williams: 1976, 山梨: 1988, 国広: 1989）。これは、共感覚比喩表現の「一方向性仮説」と呼ばれている。次節では、共感覚比喩表現の「一方向性仮説」とはどのようなものなのかをみてみよう。

3.1.1. 共感覚比喩表現の一方向性仮説

共感覚比喩表現は、ある感覚を他の感覚を表す語で表現する比喩であるが、その意味拡張には五感の間で一定の方向性が存在することが従来から指摘されてきた。

Ullmann (1959) は、19 世紀の詩人の作品における共感覚表現を調査し、意味転移の方向性を指摘した。Ullmann は、熱、触覚、味覚、嗅覚、聴覚、視覚の感覚間における転義の傾向を作家ごとに分析し、比較検討した結果、次の 3 つの点を指摘した。

１．体系的分布 (Hierarchical distribution)

数字的証左が圧倒的に動き方の一般傾向を示していることから、意味の転移は感覚中枢の下域から上域へ、あまり分化していない感覚から一層分化しているものへ昇ってゆく傾向があって、その逆ではない。

２．優位の出自 (Predominant source)

感覚中枢脳の最下水準である触覚が意味転移の主要供給者である。なお、熱の領域は触覚の領域と極めて密接に関連していて、その関わりは匂いと味との関わりと同様であり、両領域の融合により規則はより強固なものになる。

３．優位の目的点 (Predominant distination)

聴覚の領域は意味の転移の主要な受容者である。視覚は最上位の感覚に位置づけられるが、視覚用語の豊かさから聴覚語への下降隠喩が認められる。

また、時代による芸術観やその表現なども共感覚表現に関わるとして、共感覚の意味転移の法則を見出すには、それらの複雑な背景をも考慮する必要があると述べている。

Williams (1976) は共感覚形容詞の通時的意味変化における規則性を考察した実証的研究であるが、その中で、調査の対象とした 65 の英語共感覚形容詞について、Ullmann (1959) が示した共感覚比喩表現の規則性を確認した。Ullmann では、感覚を「触覚」「熱」「味」

「匂」「音」「視覚」の 6 つに分類したが、Williams は「熱」を削除し、視覚を「色覚」と空間認知の「次元」とに分け、その意味転移の方向性を以下の図のように表した。

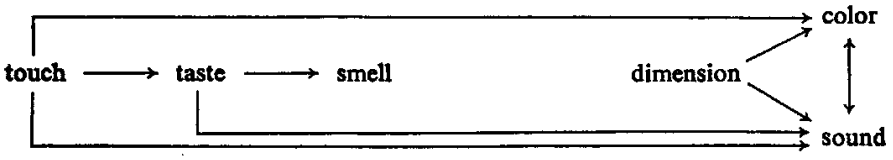


図１４　．Williams (1976) の五感の修飾関係　(Williams 1976: 463)

この図から、Williams は以下の点を指摘している。

1) If a touch-word transfers, it may transfer to taste (sharp tastes), to color (dull colors), or to sound (soft sounds). With one exception (sharp angles), tactile words do not shift to visual dimension or directly to smell.
2) Taste-words do not transfer back to tactile experience or forward to dimension or color, but only to smell (sour smells) and sounds (dulcet music).
3) There are no primary olfactory words in English (i.e. none historically originating in the area) that have shifted to other senses.
4) Dimension lexemes transfer to color (flat color) or to sound (deep sounds). Thin and flat, as in thin/flat tastes, are exceptions. High in high temperature is not a sensory word, but rather a degree-word (as in high number or high weight).
5) Color-words may shift only to sound (bright sounds).
6) Sound-words may transfer only to color (quiet colors).

（Williams 1976: 464）

Williams の指摘の中で本研究に関して重要な点は、2)の味覚語は触覚や次元 (dimension) や色彩感覚には意味拡張せず､嗅覚と聴覚にのみ意味拡張すると指摘していることである。

さらに、Williams は英語を対象とした上述の結果が、印欧諸語を特徴づけ得る文化的規範の影響を受けていない言語においても有効であることを明らかにするため、日本語の形容詞を研究対象として､「広辞苑」の記述と用例を分析し、日本語インフォーマント調査を実施した。その結果、対象とした日本語の形容詞の 91%が「一方向性仮説」に当てはまる

とし、英語を含む印欧諸語以外にもこの仮説が適用される可能性を示した。

その後、Williams の指摘を受けて、日本人研究者の間でも、日本語の共感覚表現における一方向性仮説の検証が行われた。

山梨 (1988)では、共感覚比喩表現には、以下のような一定の制約がみられるとしている。

・触覚は、味覚、嗅覚、聴覚のいずれの原感覚に対しても共感覚となり得る。
・味覚は、嗅覚、視覚、聴覚のいずれの原感覚に対しても共感覚となり得るが、触覚の共感覚にはなり得ない。
・嗅覚は、視覚、聴覚のいずれの原感覚に対しても共感覚となり得るが、触覚、味覚の共感覚にはなり得ない。
・視覚は、聴覚の共感覚となり得るが、他の感覚の共感覚とはなり得ない。
・聴覚は、他の感覚の共感覚とはなり得ない。

（山梨 1988: 59）

さらに、日本語の事実に基づいた調査から、Williams の図における「次元」を「視覚」にまとめ、次のように表した。

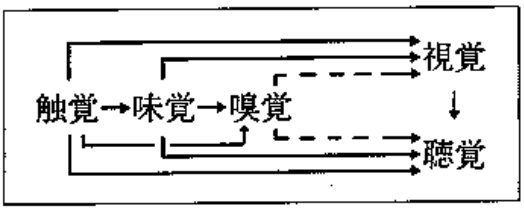


図１５　五感の修飾･被修飾関係　（山梨 1989: 60）

山梨は、Ullmann や Williams が行った英語の共感覚比喩における五感の修飾関係の一方向性が、基本的なところでは日本語の共感覚比喩表現とかなり一致すると述べている。

さらに、共感覚比喩表現という共時的な意味拡張の一方向性と、通時的、歴史的にみた五感の発達過程との関わりを指摘している。

また、この種の比喩表現で興味深いのは、共時的にみた共感覚→原感覚の修飾の

方向性と通時的、歴史的な観点からみた五感の発達過程に、ある一定の相関関係が認められるという点である。五感の発達過程においては、一般に触覚がもっとも低次の原初的な感覚であり、視覚、聴覚は、相対的にみて後期により高次の感覚として発達したものと考えられるが、この発生順序は、以上の基本的な五感の修飾の方向性に反映されている。

（山梨 1988: 60）

以上の指摘から、共感覚比喩における五感の修飾関係には、五感の生成過程による裏付けが与えられ、共時的な感覚の修飾関係と通時的な感覚の発達過程との間に相関関係があると述べている。

国広 (1989) は、一部に例外が見られるものの、大体の傾向として Williams の「一方向性仮説」は認められるとしている。国広は Williams の示した体系図に、日本語の用例に基づいて「味覚→視覚」と「触覚→臭覚」を補足として加えた図を示した。

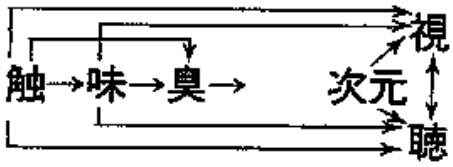


図１６　共感覚的比喩の体系　（国広 1989: 28）

さらにこの図から、次の 2 つの点が読み取れるとする。第 1 に、比喩の方向が左から右への一方向であること、第 2 に、視覚と聴覚は最右端に位置している上に、相互間で比喩がなされること、さらに、視覚と聴覚は次元的比喩がなされる点で他の感覚分野とは性質が異なることを指摘している。

また、共感覚比喩に一定の方向性がみられる理由として、日本語には視聴覚本来の形容詞が未発達であるためであると述べている。視聴覚は感覚心理学では「遠隔感覚」、認知科学では「外界投射」と呼ばれる現象によって、通常その働きが意識されない。そのため、視聴覚本来の表現は未発達であり、結果として共感覚比喩に頼ることになったと述べている。そして最後に、共感覚的比喩というのは、「接触感覚→遠隔感覚」という図式に単純化できるとしている。

3.1.2. 一方向性仮説への反例

前節でみたように、Williams の一方向性仮説については、これまでにさまざまな修正が加えられてきたが、概ね仮説は正しいものと考えられてきた。一方で、一方向性仮説への反証も多く挙げられている。

瀬戸 (2003) は、一方向性仮説には反例が多く存在すると主張する。一方向性に反する例として、「丸い味」や「深い味」のような視覚から味覚への拡張例を挙げ、一方向性仮説の維持は極めて難しいとする。また、実際の用例を調査し、一方向性仮説に従う例と従わない例とを、次のように分類した。

修飾方向	一方向性の仮説に従う例
触覚→味覚	重い味，ずっしりとした味，どっしりとした味，ずしんとくる味，軽い味，軽い口あたり，軽い飲み口，押しの強い味，舌を刺す味，突き刺すような味，刺激的な味，尖った味，味が尖っている，味が突き抜ける，あたたかい味，あつあつの味，冷たい味，冷やっこい味，パリッとした味，乾いた味，ドライな味，湿っぽい味，しけた味，しっとりした味わい，粘りのある食感，粘っこい味，ねっとりした味，ねばねばした味，柔らかい食感，ソフトな味，固い味，サラリとした味，なめらかな味，きめの細かい味，舌をなでる爽やかな味，舌にまとわりつくような味，モチッとした味，フワッとした味，ざらついた味，粗い味，さっぱりした味，清清しい味，涼味
触覚→嗅覚	湿っぽい匂い，乾いた匂い，鼻を突く匂い，ツンとした匂い，鼻を刺すにおい，鼻につくようなにおい，ざらついた匂い，軽い匂い，（洗濯物の）柔らかい匂い，豊潤な香り，爽やかな吟醸香，ふくよかな香り，暖かい香り，しっとりとした匂い，尖った香り，さわやかな匂い，味醂をくすぐる香ばしさ
触覚→視覚	暖色，暖かい色，暖かい眼差し，暖かい光景，ほのぼのとした光景，暑っ苦しい色，寒色，冷たい色，冷たい光，冷たい眼差し，柔らかい陽射し，硬い表情，軽い色，軽いタッチの絵画，重い色づかい，どっしりとした光，重厚な画面，画面のざらつき，なめらかな色調，濡れたような黒，ぬめりとした色
触覚→聴覚	硬い音，軟らかい音，軟弱な音，暖かい音，暖かい曲，冷たい音，刺々しい音，尖った音，ざらついた音，滑らかな音，軽い音，軽やかな口笛，軽快な音楽，重い音，重低音，圧迫感のある音，ずしりとくる音，さわやかな声，乾いた声，湿った音，湿っぽい曲，つるつるした柔らかな声，粘っこい音，ねちねちした言い方，刺激的なサウンド
味覚→嗅覚	甘い香り，甘い匂い，おいしい匂い，甘酸っぱい芳香，酸っぱい臭い，デリシャスな香り，渋い香り，苦い臭い，辛そうな香り
味覚→視覚	甘い光景，甘い風景，甘い色，苦い光景，甘い唇，口が酸っぱくなる光景，えぐい色，渋い色，しょっぱい顔，味のある絵，苦みばしったいい顔，渋い柄，渋い色調
味覚→聴覚	甘い声，甘いメロディー，甘い響き，甘いささやき，渋い音，渋い声，しょっぱい声
嗅覚→視覚	香しい色づかい，生臭い光景，田舎臭い光景
嗅覚→聴覚	香しい響き，バタ臭い響き，香り立つ演奏，馥郁たるショパンの演奏
視覚→聴覚	大声，大きな音，小さな音，明るい声，明るい音楽，暗い声，暗い音楽，高い音，低い音，きらきら輝く音，輝く響き，きらびやかな音，丸い声，丸みのある音，深い響き，奥行きのある音，音の広がり，薄っぺらな音，分厚い音，野太い音，春の霞のような高音，透明な低音，透明なこだま，濁った響き，艶やかな音，艶っぽい声，きれいな音，音色，声色，音のまとまり，はっきりした音，音の輪郭，鋭い音，鈍い音，シャープな響き，黄色い声

表５　一方向性仮説に従う例　（瀬戸 2003: 70）

修飾方向	一方向性の仮説に従わない例
聴覚→視覚	うるさい絵，うるさい色，騒々しい色，やかましい柄，ざわついた絵柄，静かな色，静かな光沢，物静かな裸絵
聴覚→嗅覚	静かな香り，静かな吟醸香，にぎやかな香り，香りのハーモニー
聴覚→味覚	うるさい味，静かな味，静かな味のシンフォニー，（心に）響く味，にぎやかな味，ざわついた味，味の余韻，余韻が残る味，味音痴，味覚音痴，味のハーモニー，キーンとする味，ガツンとくる味，味のささやき，味を聞く，聞き酒
聴覚→触覚	静かな痛み，静かな暖かさ，（頭が）ガンガン痛い
視覚→嗅覚	明るい香り，濃い香り，濃厚な香り，薄い香り，澄んだ香り，深みのある香り，奥深い香り，（バニラなどの）幅のある香り，厚みのある香り，まるみのある香り，香りに丸みがある，華やかな吟醸香，青臭い緑の香り，清らかな香り，はっきりした香り，伸びやかな香り，香りがたなびく，香りが漂う，香りの輪郭
視覚→味覚	丸い味，まろやかな味わい，味がまるくなる，まるみのある味，大味，小味，ボリューム感のある味，ごっつい味，薄味，薄甘い，淡い甘味，濃い味，濃厚な味わい，味は濃密，淡い味，淡泊な味，青臭い味，青味がかった味，色とりどりの味を楽しむ，艶のある味，澄んだ味，透明な味，透明感のある旨味，濁りのない味，すっきりした味わい，濁った味，どんよりした味，明るい味，暗い味，キラキラした味，鮮やかな味，平板な味，薄っぺらな味，表面的な味，のっぺりとした味，厚みのある味，重層的な味，味の層，味の重なり，隠し味，味の幅，味の広がり，深い味，深みのある味，沈んだ味，浅い味，味の奥行き，奥深い味，細やかな味わい，華やかな味わい，ふくらみのある味，雑味のない味，目で美味しいネタ，淡麗辛口，シャープな酸味，ゆったりとした味，骨太な印象のある味，芯の通った味，腰のある味，ふくよかな旨味，ふっくらとした味わい，ふくらみのある味わい，縮こまった味，美味，綺麗な味，生き生きした味，味見，味を見る，はっきりした味，鮮明な味，クリアな味，味の輪郭，キレのいい味，切れ味，まとまった味，まっすぐな味，ストレートな味，ぼやけた味，ぼんやりとした味，バラバラな味，味が立っている
視覚→触覚	深い痛み，薄っぺらな手触り，鈍い痛み，鋭い痛み，濃いねばり，薄いとろみ，暗い重さ，じんわりと広がる暖かさ，すっきりした冷たさ，冷気が漂う，まろやかな口当たり
嗅覚→味覚	香ばしい味，臭い味，香味，芳しい味，香ばしく旨い，香ばしい甘味，芳醇な味，臭みのある味，つんとくる味，こげ味，生臭い味
嗅覚→触覚	
味覚→触覚	甘い抱擁，甘噛み，甘い口づけ，（真珠の）甘い質感，手触りを味わう，質感を味わう，（ペンの）書き味

表６　一方向性仮説に従わない例　　（瀬戸 2003: 71）

この表によれば、少なくとも日本語の共感覚比喩表現においては、一方向性仮説に従わない例が山のように存在することになる。瀬戸は、一方向性仮説を捨てて、言語事実を救うことが重要であり、言語事実に基づいて共感覚表現の仕組みを一から考え直すことが必要であると主張している（瀬戸 2003: 69）。

武藤 (2000) では、従来「共感覚比喩」が比喩の一種として扱われてきたことに対し、共感覚表現は感覚間の意味転用という現象に対するラベルづけと捉え直す方が適切であると主張する。武藤は、感覚間の意味転用を様々な観点から分析し、感覚を表す語の意味転用にはメタファー以外にメトニミーなどさまざまな比喩が関わることを指摘した。その上で、感覚間の意味転用は、ある語の持つ多義性全体の中で、その一部を取り出したものにすぎないと述べている。

また、武藤 (2001a) は日本語の「五感を表す語彙」全般において、嗅覚から触覚への方向性を除く全ての五感で意味転用が行われ、日本語には一方向性仮説は当てはまらないと主張する。また、英語の共感覚比喩表現における研究成果と異なり、日本語では視覚からの意味転用が多いという事実を提示し、インドネシア語、ロシア語、タイ語、韓国語、中国語を対象とした調査から、「視覚の優位性」は日本語の五感語彙の意味転用にのみ認められる可能性があることを指摘した。

さらに武藤 (2004) においては、日本語の共感覚的比喩表現を意味拡張の動機づけにより分類した上で、一方向性仮説に沿う例と沿わない例とを網羅した表を示しているが、「嗅覚→触覚」以外、一方向性仮説に反する転移方向全てについての例が詳細に挙げられている。

また山口 (2003) では、「丸い味」「四角い味」「青い味」「赤い味」の四つの味について考察し、これらの表現を可能にする転義のパタンを次のように示している。

①（触覚になぞらえて味覚を理解・表現する）身体感覚のメタファー
②（触覚的体験を味覚体験にすり替える）感覚器の隣接によるメトニミー
③（「味は人である」というような）概念メタファーの介在
④（食材が赤いから味も赤いという）共時的なメトニミー
⑤（まん丸なあの子を思い出させるから味もまん丸という）連想的なメトニミー

これらのパタンから山口は、一方向性仮説のような一元的な原理は成立しがたいとの考えを示した。さらに、5 つのパタンの関連性について、コンテクストへの依存度を尺度に取り、コンテクストへの依存度が減ると共感覚はより自然に感じられるようになると説明している。5 つのパタンのうち①と②のような身体感覚に基づく表現は、話し手と聞き手

が共有する身体感覚を共通基盤とするため、コンテクストへの依存度は低く、共感覚比喩としての容認度も高くなる。このことから、共感覚的な味覚表現の中心は、身体に深く関わる表現によって占められると結論付けている。

山口の示したパタンは、他感覚から味覚への共感覚表現に関する考察であり、そのパタンを直接スペイン語の味覚形容詞の意味拡張の分類に当てはめることは難しいが、共感覚表現を「共感覚比喩」という比喩の一つと捉えるのではなく、共感覚表現に様々な比喩が関わるとする考えは理に適っているように思われる。

山口の研究を受けて、武藤 (2004) では山口の分類に、(二つの性質の)「同時性」に基づくメトニミーと（二つの事項の)「時間的隣接」に基づくメトニミーの 2 つの項目を加えて、日本語の共感覚表現の動機付けについて広く考察している。

以上の先行研究は、いずれも日本語の共感覚比喩表現に関するものであったが、スペイン語の味覚形容詞においても、*dulce* pelaje（甘い毛並み）のような一方向性仮説の反例と思われる例がみられる。次節では、スペイン語と日本語の味覚形容詞の意味拡張における共通点と相違点を明らかにするため、スペイン語の味覚形容詞 dulce, salado, amargo, ácido, agrio の基本義と拡張義を日本語と対照しつつ考察していく。

3.2. スペイン語の味覚形容詞の基本義と拡張義

本節では、スペイン語の味覚形容詞の基本義と拡張義について、辞書の意味記述と実際の用例を基に考察し、各形容詞の意味拡張の方向性を日本語の形容詞と対照しながら考察する。

3.2.1. dulce

dulce は甘味を表す形容詞である。Corominas & Pascual (1992)（以下、Crítico） や Corominas (2011)（以下、Corominas） では、語源はラテン語の dŭlcis であるとし、dulce とほぼ同義で使われていたという。Crítico では、dŭlcis の派生語や複合語については詳細に述べられているが、具体的にどのような意味で用いられていたのかについては触れられていない。さらに、dŭlcis の語源については、印欧祖語の dlkw-i-（甘い）に由来するとされるが、Cejador y Franca (1941) （以下、Cejador）によれば、サンスクリット語の gul-a（砂糖）の形容詞型*gul-ko の g が d へと転換した語だという。いずれにしても、糖分を感じた時の味覚が語源となっている。

従ってスペイン語の dulce は日本語の「甘い」と同様、「甘さ」を描写する最も基本的な形容詞であるといえるだろう。

3.2.1.1.　辞書における意味記述

本節では、スペイン語の辞書において dulce の意味がどのように記述されているのかをみる。参考にした辞書は、日本で発行されている西和辞典 2 冊と、スペインで発行されている西西辞典 2 冊である。初めに、西和辞典における記述からみてみよう。

A.　現代スペイン語辞典（山田編：1999）

『現代スペイン語辞典』(1999) は、初版が 1990 年に発行され、我が国を代表する西和辞典の一つとされている。収録語数は 4 万 6 千語で、厳選された訳語と豊富な用例が特徴で、具体的な用例により意味を把握できるよう工夫されている。以下に示すのは、『現代スペイン語辞典』による形容詞としての dulce の記述である。

dulce

［英 sweet］（形）

①甘い〖↔amargo〗

Esta bebida es *dulce*.

この飲み物は甘い

②［ワインが］甘口の〖↔seco〗

③心地よい；穏やかな，温和な

música *dulce* 快い音楽．voz *dulce* 柔らかい（甘い）声．　luz *dulce* 柔らかい光.

④［人・性格が］優しい，気立てのよい

①と②は味覚に関する表現で、①は糖分の味を表している。③は、音楽や声、光が心地よいこと、④は人物評価である。②の「甘口の」がワインの味に限定されているところが興味深い。

以上の考察から、『現代スペイン語辞典』における dulce の定義は以下のようにまとめられる。

1) 甘味

2) 甘味以外の味覚

3) 心地よさ

4) 人物の性質（穏やかさ）

B. 西和中辞典（高垣監修：2007）

『西和中辞典』（2007）は 1990 年に初版が発行され、2007 年に発行された第 2 版では新語なども加わり、8 万語の見出し語が収録されている。日本で発行されている西和辞典としては、最も収録語数が多い本格的な辞典の 1 つである（堀田：2011）。dulce の記述をみてみよう。

dulce（形）

①《＋名詞/名詞＋》《ser＋/estar＋》甘い，甘味の．un pastel ~ 甘いケーキ．Este melón está muy ~. このメロンはとても甘い。

②《名詞＋》甘口の；塩分［苦味，酸味］のない．vino ~ 甘口ワイン（▸「辛口ワイン」は vino seco）．pimentón ~ （香辛料の）パプリカ．agua ~ 淡水，真水（▸「海水」は agua del mar）．

③《＋名詞/名詞＋》《ser+ / estar+》心地よい，快い，楽しい，甘美な．voz ~ やさしい声．~ hogar スイートホーム．

④《名詞＋》〈性格などが〉優しい，穏やかな．Tiene un carácter muy ~. 彼［彼女］は大変柔和な性格の持ち主だ．

⑤ 幸運な．momento ~ 幸せの絶頂期．

①と②では dulce が味覚を表す用法を挙げており、いずれも日本語の「甘い」にもみられる用法である。③では dulce が「心地よさ」を表すとし、voz（声）や hogar（家庭）と共起する例を挙げている。④は、人物の性質が穏やかであることを表している。最後に⑤では「幸運な」として momento（時）を例に挙げている。これも、③と同様、dulce が「心地よさ」を表すことから派生したと考えられる。

C. Diccionario de la lengua española (Real Academia Española: 2001)

Diccionario de la lengua española (2001) は、スペイン王立学士院 (Real Academia Española) が発行する最も代表的な西西辞典の一つである。1726 年から 1739 年にかけて同学士院から刊行された 6 巻本の *Diccionario de autoridades* を始めとして、現在最新の第 22 版（2001 年発行）まで改訂を重ねてきた伝統ある辞典とされている。以下は dulce に関する記述である。

dulce (Del lat. dulcis).

（ラテン語の dulcis より。）

1. Que causa cierta sensación suave y agradable al paladar, como la miel, el azúcar, etc.

（蜂蜜や砂糖などのように、柔らかく心地よい感覚を口蓋に起こさせる。）

2. Que no es agrio o salobre, comparado con otras cosas de la misma especie.

（同じ種類の他のものと比べて、酸っぱくないもの、苦くないこと。）

3. Dicho de un alimento: Que está insulso, falto de sal.

（食物の表現：味気がない、塩味が足りない。）

4. Grato, gustoso y apacible.

（心地よい、楽しい、穏やかな。）

5. Naturalmente afable, complaciente, dócil.

（生まれつき優しい、愛想の良い、素直な。）

6. Dicho de un metal, y especialmente del hierro: Libre de impurezas.

（金属の表現で、特に鉄を表す：不純物のない。）

7. Pint. Que tiene cierta suavidad y blandura en el dibujo.

（絵画用語。絵に特定のなめらかさや柔らかさがあること。）

8. Pint. Que tiene grato y hermoso colorido.

（絵画用語。心地よく美しい色調であること。）

Diccionario de la lengua española では、1~3 で dulce の基本味を表す用法が挙げられている。特に 1 の記述において、蜂蜜や砂糖などが sensación suave y agradable（柔らかく心地よい感覚）を引き起こすものであると述べられていることに注目したい。

4 は dulce が本来持っている「柔らかさ」「心地よさ」という基本義から派生した拡張義

であると考えられる。

5 は人物の性質を表す用法である。「優しい」「愛想の良い」「素直な」のような表現から、人物に対するプラス評価であると考えられる。

6~8 は金属や絵画を修飾している。このような dulce の用法は、一般に広く普及した用法とは言い難い上、定型表現となってしまっている。従って本研究では、金属や絵画を修飾する dulce の用法は対象としないこととする。

D. Diccionario de uso del español (Moliner: 2007)

Diccionario de uso del español (2007) は、実用的な辞書を目指して編纂されているため、語義解説が丁寧で、用例も豊富に挙げられていることが特徴である。それまでの辞典は、正しいスペイン語の規範を示すことが目的であったために、実際の慣用とかけ離れた記述も多くみられた。 *Diccionario de Uso del Español* は、正確な語義だけでなく用法が詳説された辞書として高く評価されており、西西辞典の中でも重要な位置を占めている。以下に、dulce の記述を用例に注目してみてみよう。

dulce (del lat. *dulcis*)

（ラテン語の dulcis より）

1. *(a)* De *sabor como el del azúcar: ‘Dulce al paladar’.

（前置詞 “a” を伴って。砂糖のような味：「口に甘い。」）

2. (partitivo) *Fruta cocida con azúcar formando una masa compacta o fluida; como la carne de membrillo, la jalea o la mermelada: ‘Un recipiente para servir el dulce’.

（（部分詞）砂糖と一緒に煮込まれた果物でできた固形、もしくは液状のペースト；例えば花梨の実やゼリーまたはジャム：「ジャムを入れる容器」）

Aplicado a sensaciones y a las cosas que las producen, *suave y agradable: ‘Una voz dulce’. ⇒ Flauteado. ⊙Aplicado a emociones o a las cosas que las producen, apaciblemente grato o alegre: ‘Una música dulce. La dulce emoción de la vuelta al hogar’. ⊙ Aplicado a personas y, correspondientemente, a sus gestos, palabras, *carácter, etc. , inclinado a sentir y mostrar *cariño y buscar el de otras personas. ⇒*Afectuoso. *Amable. *Cordial. *Suave. *Zalamería.

（柔らかで心地よい感覚やその感覚を引き起こすもの：「甘い声。」⇒フルートのような。穏やかで心地よく陽気な感情やその感情を引き起こすもの：「甘い音楽。帰郷の甘い感

動。」人やそれに対応して表情、言葉、性格などについて、愛情を感じたり表したり、他人のそれを探そうとすること。⇒情愛の深い、優しい。人当たりの良い。柔和な。へつらい。）

3. Se aplica a las cosas no saladas, *amargas o *ácidas: ‘Agua dulce. Almendras dulces’.
（塩辛くないもの、苦くないもの、酸っぱくないものを指す :「真水。甘扁桃（アーモンド)。」）

以上の記述で、1 は「甘味」、2 は「柔らかさ」の感覚、3 は鹹味、苦味、酸味が少ないことである。このうち 5 の記述について、 *Diccionario de la lengua española* では、「心地よさ」と「人物評価」を分けて記述しているが、 *Diccionario de uso del español* では共通の感覚によるものとして一つの項目にまとめられている点に注目したい。

これまでの考察から、西西辞典における dulce の意味記述も、西和辞典と同様、甘味・鹹味・苦味・酸味が少ないこと、心地よさ、人物の穏やかな性格であり、これらが dulce の主な意味を構成していると考えられる。以上、西和辞典、西西辞典における記述をみてきた。次に、実際の用例を基に dulce の意味拡張の方向性を考察していく。

3.2.1.2. dulce の基本義

最初に、dulce が基本義である味覚を表す例をみてみよう。dulce が味覚を表すのは、糖分を表す場合と、甘味・鹹味・苦味・酸味が少ない場合とがある。次節では、糖分を表す例をみてみよう。

3.2.1.2.1. 糖分の感覚を表す場合

dulce の基本義は、甘味を表す味覚である。次に dulce が糖分の味を表している例をみてみよう。

(12) El melón cantaloup es un melón característico por tener la carne de color naranja. Este melón es muy *dulce* y al igual que todos los melones las semillas son claras.
（カンタループメロンはオレンジ色の果肉を持つことが特徴的なメロンである。このメロンはとても甘く、他のメロンと同じように種は明るい色をしている。）

(http://www.elmeurebostonline.cat/index.php?idioma=2&arxiu=fitxa_producte&id_familia=3107&id_subfamilia=8173&id=141958)

(13) Melocotón embolsado de la variedad Catherine, cuya maduración tiene lugar a finales de julio. … … Este melocotón es *dulce* y sabroso, de piel anaranjada y de carne dura.
（キャサリン種の有袋栽培の桃で、その成熟期は 7 月末である。〈略〉この桃は、皮は橙色、固い実で、甘くておいしい。）
(http://www.saboresdeteruel.es/component/virtuemart/ofertas/melocoton-embolsado-bajo-aragon-1392012-06-10-15-39-59-detail)

(14) No recuerdo el nombre pero este pastel es muy *dulce* y bueno. Es solo pan con azúcar pero es muy fácil de comer y muy bueno para el desayuno.
（名前は覚えていないが、このお菓子はとても甘くておいしい。ただの砂糖がついたパンだが、とても食べやすくて朝食にとても良い。）
(http://annieandmatteatspain.wordpress.com/)

(15) El helado es muy *dulce* y cremoso; Se deshace en la boca. La galleta también está muy rica, crujiente y en su parte interna está bañada en chocolate.
（アイスクリームはとても甘くてクリーミー；口の中で溶けてしまう。クッキーもとてもおいしく、サクサクしていて、内側がチョコレートでコーティングされている。）
(http://www.ciao.es/Opiniones/Dia_conos_de_nata_y_chocolate__423060)

(16) El flan es *dulce*, suave y si comes mucho llega a ser algo empalagoso.
（そのプリンは甘くてなめらかで、もしたくさん食べたら多少うんざりする。）
(http://www.ciao.es/Flan_de_Huevo_Danet__Opinion_1795200)

(12)～(16)のいずれの例においても、果物やお菓子、アイスクリームなどに含まれる糖分の味を「甘い」と感じた時に dulce で表していることが分かる。

3.2.1.2.2.　甘味を表さない場合

dulce は元々塩味があるものについて、「塩味が足りない」意味を表す。

(17)　pipas *dulces*（甘い（塩味のない）ヒマワリの種）[3]

(18)　mantequillas *dulces*（甘い（無塩）バター）

(19)　aceitunas *dulces*（甘いオリーブ）

(20)　agua *dulce*（甘い水（淡水））

(17)～(19)の例は、塩味が強い食品の塩分が少ないことを表す。また、(20)の例では、海水 (agua salada) に対して、塩分のない淡水が agua *dulce* とされている。

また dulce は、柑橘類などのように、酸味を含む食品の「酸味が足りない」という意味を持つ。

(21)　limón *dulce*（甘い（酸っぱくない）レモン）

(22)　lima *dulce*（甘い（酸っぱくない）ライム）

(21)～(22)はいずれも酸味が特徴の果物について、その「酸味が少ない」という意味で dulce が用いられている例である。

さらに、苦味を特徴とする食品に dulce が用いられる場合、苦味が少ない意味を表す。

(23)　almendra *dulce*（甘扁桃（→アーモンド））

(24)　alcachofa *dulce*（甘いアーティーチョーク）

(23)のアーモンドは、苦味が特徴の almendra amarga（苦扁桃）に対して、苦味がないものを almendra dulce と表している。また、(24)の alcachofa も、通常は苦い野菜であるが、

---

[3] (17)～(26)の例は、便宜上 dulce と、dulce と共起する名詞のみを取り出しているが、実際には例えば(20)の agua dulce では次のような用例がみられた。

(20’)　La mejor fuente de agua *dulce* son la lluvia y la nieve.

（淡水（甘い水）の最も大きな供給源は雨と雪である。）

(http://wwf.panda.org/es/nuestro_trabajo/agua_dulce/)

苦味の少ないものについて dulce を用いている。また、dulce は辛い食品の辛味が少ないことを表す。

(25)　pimentón *dulce*（甘い唐辛子（→パプリカパウダー））

(26)　curry *dulce*（甘いカレー）

(25)では、pimentón picante（カイエンペッパー）にみられるような舌への刺激が感じられないことを dulce で表している。また、(26)の curry についても同様に、“no picante”（辛くない）の意味で dulce が用いられている。

Jantima (1999) では、日本語の味覚形容詞「あまい」の意味拡張について、他の味覚形容詞と対等な対義関係をなす意味拡張の段階があることを挙げている。(21)～(26)の例のような dulce の用法から、スペイン語の dulce にも日本語の「甘い」と同様に、他の味覚形容詞との対等な対義関係への意味拡張が認められると言えるだろう。

3.2.1.2.3.　まとめ

これらの用例からも明らかなように、スペイン語の dulce は基本義として味覚を表す場合、第 1 に糖分を口にしたときの感覚、第 2 に鹹味、苦味、酸味、辛味が少ないことを表すことが明らかになった。これらの基本義は、日本語の「甘い」の基本義と同様であると言えるだろう。

次に、dulce の共感覚的用法をみていこう。

3.2.1.3.　dulce の共感覚的用法

dulce の共感覚的用法には嗅覚、聴覚、視覚、触覚に関するものがある。以下に各用法の例を考察する。

3.2.1.3.1.　嗅覚

最初に、dulce が嗅覚表現に用いられている例を考察する。嗅覚は、鼻と口が繋がっていることから、食物を口にしたときに味覚とほぼ同時に感じられる。そのため、味覚表現

の嗅覚への意味拡張の例は非常に多く、味覚と嗅覚は密接に関係していると考えられる。以下に、dulce が嗅覚表現として用いられている例を挙げる。

(27) La piña fresca debe tener un olor *dulce* y no ser blanda ni hundirse al acto.
（新鮮なパイナップルは、甘い香りがし、触っても柔らかかったりへこんだりするものではない。）

(*La botica natural del padre Santiago*)

(28) Sobre el aljibe revolotean zumbando abejorros y metálicas y luminosas libélulas. Naranjos y limoneros lo llenan todo de perfume *dulce* y sensual. Es un mundo para amar.
（マルハナバチやメタリックな色で光っているトンボがブンブン飛んでいる中、タンクに投げ入れていく。オレンジやレモンの木がタンクを全て甘く官能的な香りで満たす。愛すべき世界だ。）

(*El sabor de España*)

(29) Es la mejor colonia de coco que he probado hasta ahora. Tiene un olor *dulce* a coco y no empalaga si lo aplicas con mesura.
（今までに私が試したココナッツの香りのコロンの中で一番だ。ココナッツの甘い香りがして、適度につければ甘すぎることもない。）

(http://www.yves-rocher.es/control/perfumes/perfumes-afrutados/edt-de-toilette-de-nuez-de-coco-de-malasia-100-ml/)

(27)～(29)の例では、パイナップルやオレンジ、ココナッツなど糖分を含む果実の匂いを dulce と表している。話者は実際に糖分の味を感じているわけではないが、食べる時に同時に匂いも感じられるため、その果実の匂いを dulce と表している。山口 (2003) や武藤 (2004) にも指摘されるように、このような味覚から嗅覚への意味拡張には、味覚と嗅覚の同時性に基づくメトニミーが関わっていると言えるだろう。

一方で、dulce が嗅覚を表す場合、必ずしも食べられるものの匂いを表しているとは限らない。

(30) Yo de diario tengo una colonia *dulce* pero suave, y cuando quiero salir y eso uso una que se llama "fragancia mora" de natural spray.

（私はいつも甘いけれど優しいコロンを持っていて、出かけたりしたい時には Natural Spray の “fragancia mora” というコロンを使っています。）

(http://www.trendenciasbelleza.com/respuestas/que-colonia-o-perfume-es-el-que-utilizas-cuando-quieres-impresionar-a-alguien)

(31) Es una perfume *dulce* y duradera a la vez.

（これは甘く長持ちする香水です。）

(http://www.solostocks.com/venta-productos/fragancias-desodorantes/perfumes/armand-basi-in-red-edp-vapo-30-ml-7729256)

(30)や(31)は、直接口にして「甘い」と感じられない香りを dulce で表している例である。このような dulce の用法は、まるで甘いものを口にしたときのような「心地よい」感覚を感じさせる香りに由来するものであると推測される。従って、香水など食べ物以外の香りについては、身体感覚に基づくメタファーが関わると考えられる。

3.2.1.3.2. 聴覚

次に、dulce が聴覚表現に用いられる例をみてみよう。

(32) Virginia tiene la voz *dulce*, melosa y, al parecer, nada escasa.

（ビルヒニアは甘くて柔らかい声をしていて、一見したところ、非の打ちどころがない。）

(*ABC*, 28/12/1983)

(33) Y porque lo que ya comienza rápido a tocar con un dedo es la *dulce* melodía de "El vals de las olas"

（そして一本の指で素早く弾き始めたのは「波のワルツ」の甘いメロディーだからである。）

(*El vodevil de la pálida, pálida, pálida, pálida rosa*)

(34) Casi al final de la película, por unos momentos suena una música *dulce* y dos niñas aparecen en la escena bailando al son de un acordeón entre las calles vacías y rotas de su ciudad. Es la esperanza que quiere comunicar el director.

（映画のほぼ終わり頃に、数分間甘い（→優しい）音楽が流れ、二人の女の子たちが、破壊された空虚な通りを、アコーディオンの快い音に合わせて踊るシーンに現れる。これが監督が伝えたがっている希望である。）

(*El Mundo*, 16/07/1994)

(32)～(34)では、メロディーや声、音楽を dulce であると表現している。この時、味覚の「甘い」という感覚は失われており、甘いものを食べた時のような「心地よさ」を感じさせることを表している。従って、dulce という味覚になぞらえて聴覚を表現していると考えられ、意味拡張には身体感覚に基づくメタファーが関わっていると言えるだろう。

3.2.1.3.3. 視覚

dulce は、次の例のように、視覚にも意味を拡張させている。

(35) Jamie Lee Curtis es un buen ejemplo, con su rostro *dulce* y su inequívoco aspecto de mujer.

（ジェイミー・リー・カーティスは良い例で、甘い表情と紛うことない女性らしい様子をしている。）

(*La deuda de Eva. Del pecado de ser feas y el deber de ser hermosas*)

(36) Cristian recordó vívidamente en ese momento la figura *dulce* de su madre. La vio inclinada sobre el fogón preparando la comida y se vio así mismo regresando de la escuela y entrando a la cocina donde ella lo recibía con un beso.

（クリスティアンはその瞬間に、母親の甘い（→優しい）姿をはっきりと思い出した。彼女がコンロに体をかがめて食事の準備をしているのが見え、同じように自分自身は学校から帰って来て、いつも母親がキスをして出迎えてくれた台所に入るのが見えた。） (*La caricia rota*)

(35)では女性の rostro（表情）を dulce と表現しており、女性らしい優しい表情を示していると思われる。(36)の figura（姿）を表す例でも、学校から帰った子を出迎える母親の優しい様子を dulce で表していると考えられる。

(37) En su vertiente merece visitar el conjunto de molinos de agua de Fornelos y en su campiña los abundantes cruceros. Pero lo más atractivo es su *dulce* paisaje y sus exquisitos frutos.

（川の流域にあるフォルネロスの水車の集まりや、平原の石の十字架群は訪れる価値がある。しかし、最も魅力的なのはその甘い（→美しい）景色とそのおいしい果物である。）

(http://www.camaratui.com/index.php?option=com_content&view=article&id=58&Itemid=60&lang=es)

(37)では、水車や平原などの自然の美しい景色を dulce と表している。このウェブページは英語版も公開されており、英語版の同じページでは、次のように書かれている。

(38) Near the coast you may visit the group of water mills of Fornelo, and in the countryside you may admire the numerous stone crosses. But the biggest attraction is the *beautiful* countryside and the delicious fruits it produces.

（川岸の近くでは、フォルネロスの水車群を訪れることができ、山里では多くの石の十字架に見とれるだろう。しかし最も大きな魅力は美しい田舎の風景とそこで生産されるおいしい果物である。）

(http://www.camaratui.com/index.php?option=com_content&view=article&id=58&Itemid=60&lang=en)

(38)では dulce にあたる語を beautiful と表しており、(37)における dulce が景色の美しさを形容することが分かる。しかし、スペイン語版では他に bonito や bello など美しさを表す形容詞があるにも拘らず、敢えて味覚形容詞の dulce を用いていることに注目したい。この場合の dulce は、話者が得も言われぬ美しい田舎の景色を見た時に、糖分を口にした

ときのような「心地よさ」を感じていると考えられる。以上の考察より、dulce の視覚への意味拡張には身体感覚のメタファーが関わると言えるだろう。

3.2.1.3.4.　触覚

dulce には、3.1.1.節で言及した一方向性仮説に反して触覚への転用例がみられた。以下にその例をみてみよう。

(39)　Pues no, no está enferma –respondo en alta voz recreándome en el cuerpo de Darío. Y mi mano sigue peinando su bello, *dulce* pelaje-.

（いや、彼女は病気じゃない―私はダリオの体を撫でながら大きな声で答える。そして私の手は、その美しく甘い（→柔らかい）毛並みを梳かし続ける。）

(*El canario desnudo*)

(40)　Los pueblos son pequeños, compactos, apiñados, con tristes casas en ruinas y decrépitos ancianos que aprovechan la *dulce* caricia del Sol.

（村々は小さくて、悲しい廃屋や、太陽の甘い（→優しい）日差しにあたる老いさらばえた老人たちでぎゅうぎゅうだった。）

(*España en fiestas*)

(41)　Para ello Siona ha utilizado unos tejidos que, tal como en colecciones anteriores, vuelven a ser un lujo para los sentidos y una unión perfecta entre tradición y modernidad.

……　Los colores de la colección la envuelven en tonos marfil, rosa, verdes agua, visón, marrón, caqui, arena, blanco y negro y su tacto es *dulce*, fluido, cálido y sedoso.

（そのためにシオナはこれまでのコレクション同様に、再びぜいたくで伝統と近代精神の完璧な融合となる生地を使用した。〈略〉コレクションの色彩は象牙色、ピンク、アクアマリン、ミンク色、茶色、柿色、黄土色、白と黒でまとめられており、感触は甘くて（→柔らかくて）なめらかで、暖かく絹のようにすべすべしている。）

(http://www.moda-barcelona.com/es/pasarela_edicionsanteriors_07_garcia07_tendencia.asp)

(39)は動物の毛並み、(40)は肌にあたる日差しの感覚、(41)は衣服に使う布地を dulce で表している例である。これに対し、日本語では「毛並み」「日差し」「感触」を、形容詞「甘い」で修飾することは、あまり一般的な表現とは言えない。しかし、スペイン語においては、味覚形容詞 dulce が共感覚表現として触覚に拡張することは珍しくない。この場合、日本語では「柔らかい」のような触覚を表す形容詞が充てられる。しかし、dulce が表す意味は対象の柔らかさよりも触った時の「心地よい」感覚に焦点が当てられているものと考えられ、視覚や聴覚への転用の場合と同様に、触覚への転用も身体感覚のメタファーによる拡張と考えられる。

3.2.1.3.5. まとめ

以上の共感覚比喩表現の考察から、以下のことが分かった。

1) 嗅覚への拡張には、味覚と嗅覚の同時性に基づくメトニミーが関わる。
2) 嗅覚への拡張には、甘いものを口にした時に感じられるような「心地よい」という身体感覚のメタファーが関わる。
3) スペイン語の味覚形容詞 dulce は一方向性仮説に反して触覚へ意味拡張している。
4) 視覚、聴覚、触覚への拡張には身体感覚のメタファーが関わる。

次に、dulce が共感覚比喩とは関係しないと思われる例をみてみよう。

3.2.1.4. 人物評価

次の例は、話者がある人物に対して複数の形容詞を使って評価している例である。

(42) Años después él se casó con una pintora muy *dulce* y atractiva y se fueron a vivir a Ibiza.
（何年かして彼は甘く（→優しく）魅力的な画家と結婚してイビサに移り住んだ。） (*Telva*, 03/1998)

(43) — Cálmate -dijo él-. ¿Por qué te comportas así? Normalmente eres una chica *dulce* y obediente...

— ¡No quiero ser una chica *dulce* y obediente, a la mierda con las chicas *dulces* y obedientes, ¿te enteras?!

（－落ち着いて—彼は言った—。どうしてそんな態度をとるんだ。普段は甘くて（→穏やかで）従順な女の子なのに…。

－甘くて（→穏やかで）従順な女の子に何てなりたくないわ、甘くて（→穏やかで）従順な女の子なんてくそくらえよ！分かる？）

(*El embrujo de Shangai*)

(44) Cuando le conocí era un joven *dulce*, tierno y detallista. Ese tipo de hombre que cualquier mujer busca como amigo.

（私が彼と知り合った時、彼は穏やかで、甘く（→優しい）、よく気の付く人でした。どんな女性でも友達にしたいと思うようなそんなタイプの男性でした。）

(*Escuela de mujeres*)

(42)～(44)の例では、dulce が人物の性質を表しているが、いずれも日本語の「甘い」という表現を直接当てはめるのが不自然であることが分かる。日本語の「甘い」が人物を評価する場合、武藤 (2001b) や崔＆馬場 (2010) にも指摘されるように、「他者に対して厳しさが欠如している」ことを表している。このような意味への拡張プロセスを武藤 (2001b)では、「甘い」が持つ「厳密さが欠如したさま」との類義性に基づく意味拡張であるとしながらも、主体が接する他者にとっては、主体は「優しく好意的」に映るとして、「好ましく快い」という「甘い」が持つ意義特徴との連続性がみられると述べている。

一方で、(42)～(44)で現れるスペイン語の dulce は、人物の「優しさ」や「穏やかさ」を表しており、日本語の「甘い」の持つ「厳しさの欠如」への意味転用はみられない。このような dulce の人物評価への意味拡張は、dulce の持つ「糖分を口にしたときの心地よい感覚」という身体感覚に基づくメタファーが関わると言えるだろう。

3.2.1.5. 抽象的な物事を修飾する場合

次に、dulce が抽象的な物事を修飾している例をみてみよう。

(45) Aunque para una persona que diríamos que exiliada, no hay régimen más *dulce* que el de estar en la Madre Patria.

（たとえ亡命者と呼ばれる人であっても、母国に居られるより甘い（→心地よい）社会情勢はないのである。）

(ABC, 01/05/1989)

(46) Acaban de cumplirse tres años de aquel momento *dulce* de la coyuntura -marzo de 2000- en que todo parecía posible.

（全てが可能であるかのように思えていた経済情勢—2000 年 3 月—の甘い（→楽しい）時から 3 年目を迎えたばかりだ。）

(*El País*, 17/03/2003)

(47) Pero a la chica casadera de postguerra no se le permitía tener una visión complicada de la vida, tenía la obligación de ofrecer una imagen *dulce*, estable y sonriente.

（しかし、戦後の結婚適齢期の女性には人生の複雑な展望を持つことは許されておらず、甘く（→楽しく）、安定した、にこやかなイメージを持たせなければならなかった。）

(*Usos amorosos de la posguerra española*)

(45)～(47)の例では、régimen（状況）、momento（時間）、imagen（イメージ）などの抽象的な事柄に対して dulce が使われている。この場合の dulce は、状況や時間、イメージなどが話者に与える「心地よい」或いは「楽しい」感覚を表している。したがって、この dulce の意味拡張にも、やはり糖分を口にしたときのような「心地よさ」を感じさせる身体感覚のメタファーが関わっていると言えるだろう。

一方、以下の例にみられるような抽象名詞についても dulce が用いられている。用例をみてみよう。

(48) Pienso en tu figura, recortada en la ventana contra el sol mientras rezabas, y en esa *dulce* agonía de respetar tus espacios y no abalanzarme a poseerte.

（祈りを捧げている間、太陽に面した窓に映った君の姿を、そして君の空間を尊重して君に飛びつこうとしない、その甘い苦悩を思う。）

(http://webalia.com/chistes/de-frente-manteca/gmx-niv61-con12559.htm)

(49) De alguna forma se elige el *dulce* sufrimiento de ocultar el amor a tratar de convertirlo en realidad por temor a fracaso, lo cual significaría la muerte súbita de esas ilusiones y esperanzas.

（失敗を恐れて何らかの形で愛を現実のものにすることより、それを隠す甘い苦しみが選ばれるのは、それが幻想や夢の突然の死を意味するからである。）

(http://paraellas.net/index.php/amistad-amor-amigos-enamorados/)

(50) Yo soy un simple cicloturista con su trabajo, sus ocupaciones diarias, con el tiempo escaso la mayor parte del año; ……Pero al menos esta vez estoy satisfecho y reventado a la vez. *Dulce* dolor de piernas con el que ahora estoy escribiendo.

（私は、仕事や日々の活動があって、一年うちの大半において時間が不足しているただのサイクリング愛好者である; 〈略〉しかし少なくとも今回は私は満足すると同時にとても疲れ果てている。今、脚の甘い痛みとともにこれを書いている。）

(http://39x28altimetrias.com/rugeelleon.html)

(48)～(50)の例は、dulce が agonía（苦悩）や sufrimiento（苦しみ）、dolor（痛み）など、ネガティブな心的感覚を表す語について用いられている例である。(48)では相手に飛びつきたい気持ちを抑え、愛する人との距離をとることは、苦しくも心地よい気持ちであることを dulce と表現している。(49)の場合も、恋愛感情自体を dulce と感じながらも、それを告白せず隠していることを苦しいと感じている。(50)は、サイクリングを趣味とする人が、サイクリング後の体の痛みに襲われながらも、サイクリングの結果に満足していることから、その心地よさを dulce と表現している。日本語では「甘い」と表すよりも、「甘美な」のような語で表現する方が自然に思われるが、スペイン語では味覚形容詞の dulce を、痛みや苦しみと同時に感じられるある種の快感にまで拡張させていることが興味深い。このような拡張には、やはり dulce が持つ「心地よさ」という感覚に基づく身体感覚のメタファーが関わっていると言えるだろう。

3.2.1.6.　まとめ

以上の考察から、dulce の五感以外への意味拡張に関して次のようなことが言えるだろう。第 1 に、dulce が味覚以外の感覚や物事に意味拡張する場合には、常に「心地よさ」が関わっている。第 2 に、たとえネガティブな感覚であっても、「心地よさ」が関わる場合には dulce で表される。

以上の考察を、国語辞典における日本語の「甘い」の定義と対照してまとめると、以下の表のようになる。

		甘い	dulce
味覚	糖分の感覚	○	○
	甘味を表さない	○	○
共感覚	嗅覚	○	○
	聴覚	○	○
	視覚	○	○
	触覚	×	○
人物評価	他者に対して厳しさが欠如している	○	×
	優しさ、穏やかさ	×	○
抽象的な事柄	男女の仲がよく幸せなさま	○	○
	楽しい時間や状況	×	○
	ネガティブな心的感覚	×	○
	評価基準が厳格でない	○	×
	物事の機能の衰えているさま	○	×
	株価の動きが鈍い	○	×

表 7　　dulce と「甘い」の意味拡張

3.2.2.　salado

salado は、salar（塩をする）の過去分詞である。その語源は Corominas によれば、俗ラテン語の sale、印欧語の sal- で、どちらも塩を表していたという。以下に西西辞典における salado についての記述をみてみよう。

3.2.2.1.　辞書の意味記述

A.　現代スペイン語辞典（山田編：1999）

salado（形）（過分）

①［ser＋］塩分を含んだ，塩気のある；塩漬けの；［estar＋］塩けのききすぎた

ciruela *salada*　梅干し.　　Esta sopa está algo *salada*. このスープは少し塩辛い.

②［ser＋］愛嬌のある，気のきいた；［冗談などが］ピリッとした，どぎつい.

③《中南米》不幸な，不運な.

④《南米》［価格が］高い　precios *salados*　高値.

現代スペイン語辞典においては、salado が形容詞として用いられる場合、塩分の味を表す味覚表現としての用法を主な意味として挙げている。さらに、人の性質について「愛嬌のある」ことを表す用法と、冗談などが「ピリッとしている」という用法を挙げている。

B.　西和中辞典（高垣監修：2007）

salado（形）

①塩分を含んだ；塩辛い，しょっぱい.

agua *salada*　海水.　　Esta sopa está un poco *salada*. このスープは少ししょっぱい。

②機知に富んだ，しゃれっけのある.

③〖ラ米〗〈1〉不運な.

〈2〉（チリ）（ラプラタ）高価な.

〈3〉（アルゼンチン）（チリ）〖話〗困難な.

『西和中辞典』においても、現代スペイン語辞典でみた記述と同様に、塩味を表す用法と、人の性質が「しゃれっけのある」ことを挙げている。しかし、「しゃれっけのある」ことを表す用法については、用例が挙げられておらず、具体的にどのような場面で salado が「しゃれっけのある」意味を表すのかを用例により確かめる必要があると思われる。

次に、西西辞典における記述をみてみよう。

C. Diccionario de la lengua española (Real Academia Española: 2001)

salado, da.

(Del part. de salar[1]).

（salado の過去分詞）

1. Dicho de un terreno: Estéril por demasiado salitroso.

（土地の表現：硝石を含みすぎて不毛の。）

2. Dicho de un alimento: Que tiene más sal de la necesaria.

（食物の表現：必要以上に塩分を含むこと。）

3. Gracioso, agudo o chistoso.

（面白い、鋭い、冗談好きの。）

4. Am. Cen., Ant., Ec., Perú y Ven. desafortunado (‖ sin fortuna).

（中米、アンティーリャス、エクアドル、ペルー、ベネズエラにおいて、不幸な（運のない）。）

5. coloq. Arg., Bol., Chile y Ur. caro (‖ de precio elevado).

（俗語。アルゼンチン、ボリビア、チリ、ウルグアイで。高い（値上がりした）。）

6. Ur. Dicho de una persona: insoportable (‖ muy incómoda, molesta).

（ウルグアイにて。人物を表す：我慢のならない（‖ とても不快な、迷惑な）。）

Diccionario de la lengua española では、味覚表現よりも先に土地が「不毛」であることを挙げ、そのあとに塩分が多すぎることを挙げている。しかし、『西和中辞典』や『現代スペイン語辞典』にみられたような、単に「塩分を含む」意味には触れられず、塩分量が必要以上に多いことを表すとしている。また、「面白い」「鋭い」「冗談好きの」といった用法を挙げているが、用例が挙げられていないため、具体的な使用場面が分かりにくく、用例による検証が必要であると思われる。

D. Diccionario de uso del español (Moliner: 2007)

salado, -a

1. Participio adjetivo de SALAR. ⊙Se aplica al agua del mar para diferenciarla de la *dulce*, de río o lago.

（“salar”の過去分詞形。川や湖の水である淡水 (dulce) と区別するために、海水について用いられる。）

2. (*Estar*) Se aplica a lo que tiene demasiada sal.

（<“Estar”と共起して>塩分が多すぎるものに用いられる。）

3. Se dice de la persona o cosa que tiene sal (gracia).

（人や物に塩（面白味）のあること。）

4. Am. C., Antill., Perú, Ven. *Desgraciado.

（(中央アメリカ、アンティーリャス諸島、ペルー、ベネズエラ）不運な。）

5. Arg., Chi., Ur. *Caro o costoso.

（(アルゼンチン、チリ、ウルグアイ）高い、高価な。）

以上は、*Diccionario del uso del español* における salado の形容詞用法の記述である。*Diccionario de la lengua española* では、最初に「不毛の土地」の意味を挙げていたが、*Diccionario del uso del española* では、agua を修飾して、agua dulce（淡水）と区別する際に agua salada（海水）として用いられる場合を挙げている。さらに、estar と共起して「塩分が多すぎる」ことを表すとしているが、*Diccionario de la lengua española* と同様に、具体例が挙げられていない。また、人や物について「塩（面白味）がある」ことを表すとしているが、これも実際にどのような場面でどのような語を表して言うのかについて言及されていないため、実際の用例を調査する必要がある。

これらの辞書の定義を踏まえて、次に salado の基本義について実例を基に考察する。

3.2.2.2. 基本義

salado の基本義は、塩分を含む味である。以下に、salado が塩分を含む味を表している例をみてみよう。

(51) Llegaron a un bar con grabados en las paredes. Además de la Coca-Cola les trajeron patatas, aceitunas y pequeñas galletas *saladas*.

（彼らは壁に彫刻の彫られたバルに着いた。コカコーラの他に、じゃが芋、オリーブと塩味のビスケット（→クラッカー）が運ばれてきた。） (*Lo real*)

(52) Conviene también recordar, que el bacalao *salado*, si se tiene tres días con agua en la nevera, y ésta se ha cambiado dos veces, se puede tomar tranquilamente.

（また覚えておくと良いのは、塩鱈は、水につけて冷蔵庫で 3 日間置き、2 度水を替えながら漬ければ問題なく食べられる。）

(*Colesterol, triglicéridos y su control*)

(53) Hay que tener en cuenta que con la cocción el caldo al evaporar, queda más concentrado y puede resultar una sopa *salada*.

（考慮しなければいけないのは、加熱によってだしは、蒸発することにより煮詰まって、塩辛いスープになってしまうことです。）

(*Procesos de cocina*)

(51)～(53)の例では、クラッカーやスープ、鱈の加工に塩が用いられ、それらを口にしたときに塩気が感じられることを表している。(51)の galletas はビスケットやクッキー、クラッカーなどの総称であるが、galletas *saladas* とすることで甘いクッキー類ではなく塩味のクラッカーを表している。(52)は塩漬けにした鱈のことで、「塩漬け」という言葉からも塩気が感じられることは明白である。(53)の例も(51)、(52)と同じように塩味を感じているが、直前の形容詞 concentrado からスープが蒸発して濃縮され、味が通常のスープよりも濃くなっていることが分かる。従って、ここでは sopa *salada* が単なる塩味のスープではなく、辞書の記述にも見られたように 「塩が多すぎる (tiene demasiada sal)」 ことを表していると考えられる。

以上の考察から、salado が味覚を表す場合、第 1 に塩味が感じられること、第 2 に通常塩分を含むものの塩味が必要以上に強いことを表すことが分かった。次に、salado の共感覚表現をみてみよう。

3.2.2.3. salado の共感覚表現

本節では、salado が共感覚表現で用いられている例を考察する。まず、dulce の場合と同じように、味覚に最も隣接すると考えられる嗅覚への拡張からみてみよう。

以下に示すのは、salado が嗅覚を表す語を修飾している例である。

(54) El olor *salado* del mar se mezcla con el de la suciedad que escupe la marea del Atlántico.

（海のしょっぱい匂いが大西洋の潮汐が吐き出す汚れと混ざる。）

(http://espejonegro.net/)

(55) Con sus aproximados 7 km que bordean la Costa del Sol, se puede disfrutar de unas maravillosas vistas al mar, mientras caminamos rodeados de palmeras y olemos el perfume *salado* de las olas del mar rompiendo suavemente contra sus calas.

（コスタ・デル・ソルを囲む約 7 キロの道のりで、美しい海の景色を楽しむことができ、ヤシの木に囲まれて歩いている間、入り江を優しく打つ波のしょっぱい香りがする。）

(http://www.deviajeporespana.com/playas/10/)

(56) La piedra de sus calles y edificios y el aroma *salado* del mar, así como el verde de sus campos y montes, consiguen convertir a Baiona en un lugar especial para el goce de los más exigentes.

（通りの石や建物、海のしょっぱい香り、野原や山の緑も同様に、バイオナを、最も気難しい人たちの喜びのための特別な場所へと変えている。）

(http://www.baiona.org/web/turismo/sobrebaiona/presentacion;
jsessionid=0C61159D83F24C15F9B928D6D6A18986)

(54)～(56)の例は、salado が嗅覚表現に意味拡張している例である。興味深いことに、salado が嗅覚を表す例はほとんどが海の匂いを「しょっぱい匂い」と表現しているものであった。この意味転用は、海水が塩分を含んでしょっぱいことから、その海水の香りをも「しょっぱい」と表現していると考えられる。従って、salado が嗅覚表現へと意味を拡張するときには、同時性に基づくメトニミーが関わっていると言えるだろう。

salado には、他に共感覚表現がほとんど見当たらなかった。インターネットの検索エンジン Google では、次の(57)の例のような表現もわずかにみられたが、用例が極端に少なく、見つかった例も詩における技法として用いられているにすぎず、一般的な拡張とは言い難い。

(57) Corre en mis venas la melodía *salada* / de mares, océanos, fuerza de la sudestada / que no se distrae con superficiales / y llega a los huesos, a las profundidades.

（私の血管にはしょっぱいメロディーが流れている／海の、大洋の、南東の力が／表面だけでは気が晴れず／骨まで、深い所にまで到達する。）（斜線は筆者）

(http://mulektalhermelo.blogspot.jp/2013/04/asi-lo-siento-en-mis-venas.html)

(57)は、個人のブログに書かれた詩の例である。ここで salado は melodía という聴覚を表す名詞を修飾している。これも、後に続く「海の、大洋の」から海水のしょっぱさに基づく比喩表現であると推測されるが、具体的に「しょっぱいメロディー」がどのようなメロディーを表しているのかは、この詩の読者の想像力に委ねられている。

以上の考察より、salado にいは一般化した共感覚表現はほとんどみられないことが分かった。

3.2.2.4. 人物評価

次に、salado が人物の性質を表す例をみてみよう。

(58) Era, además, un hombre *salado* y sus piezas contienen bastantes "bromas" musicales.

（しかも彼はしゃれっ気のある男性で、彼の楽曲にはかなりの音楽的な「ジョーク」が含まれている。）

(http://es.answers.yahoo.com/question/index?qid=20090422151350AAXPNJT)

(59) ¿Y el otro, el pequeño? El pequeño, que tiene diez años, está en primero. ¿Qué tal es? Muy *salado*, las madres qué vamos a decir. Las madres a todos los hijos los encontramos llenos de cualidades y con muy pocos defectos.

（「それでもう一人、下の子は？」「10 歳の下の子は小学生です。」「どんな子？」「とても愛嬌があるの、私たち母親は何を言いましょう。母親というのは全ての子供たちを長所に満ち溢れていてほとんど不備がないと思うものです。」）

(CREA: ORAL , PAÍS: ESPAÑA)（文中の「 」は筆者による。）

(60) Yo recomendaría a todo el mundo que tuviera bebés en casa. Es una maravilla. Ana es una niña riquísima y muy *salada*.

（私はみんなに赤ちゃんを家で育てることを勧めたい。これは素晴らしいことだ。アナはとてもかわいくて、とても愛嬌のある子だ。）

(*Tiempo*,13/08/1990)

(58)～(60) において salado は人の性格が「しゃれっ気のある」または「愛嬌のある」様子を表している。salado が人物評価を表す場合、どのような比喩が関わるのであろうか。

この意味拡張の動機付けを辿るにあたり、スペイン語の人物評価の体系をみてみると大変興味深いことが分かる。スペイン語では「つまらない人」を指して soso という。この soso という語は、De Silva (2001) や太田 (2012) によると、insulsus というラテン語が語源である。in は否定を表す接頭辞、sulsus は「塩漬けにした」、「塩味をつける」という意味で、insulsus は「無味な」、「まずい」を意味していたという。現代スペイン語においても soso は「料理の味が薄い」、「まずい」ことを意味するが、人物評価の場合には「つまらない」、「愛想のない」ことを表す。一方、salado は語源からも soso の対義語であると考えられ、人物評価に「塩味のない」ことを表す soso が用いられることと並行して、salado が「しゃれっ気のある」「愛嬌のある」という意味で使用されるようになったのではないかと考えられる。

3.2.2.5. 抽象名詞を修飾する場合

次に、salado が抽象名詞を修飾する例をみてみよう。

(61) Hasta la orilla me acerqué para verme en tus húmedos ojos, y de nuevo vi en ellos ternura y *salada* alegría, bellos encuentros y palabras acogedoras…….. (sic)

（君の湿った瞳に映った自分を見るために波打ち際まで近づいて、優しさとしょっぱい喜び、美しい出会いと歓迎の言葉を再びその中に見た……。）

(http://homoerecto06.wordpress.com/2006/05/02/paseando/)

(62) No importaba la sombra del tilo en las tardes de calma, …, ni el olor sagrado de la hierbabuena, ni el *salado* recuerdo del mar, ni siquiera importaba esa aurora que cada mañana seguía encontrando en el fondo de sus ojos a través del espejo,…

（静かな午後の菩提樹の影は重要でなかった、〈略〉ハーブの聖なる香りも、海のしょっぱい思い出も、鏡越しに彼女の目の奥に毎朝見つけ続けていたそのオーロラ

さえも重要ではなかった。）　(*Letanías de lluvia*)

(61)と(62)の例は、salado が alegría（喜び）や recuerdo（思い出）などの抽象名詞を修飾している例である。このような例は用例数も少なく、いずれも詩や文学作品における用例ばかりであった。従って、salado が抽象的な名詞を修飾するような意味拡張は、一般的であるとは言い難い。しかし、(61)と(62)で挙げたように、見つかった用例では salado が抽象名詞を修飾する場合、el mar（海）と関わるものがほとんどであった。この場合、2.3.3.1.節でみたようにしょっぱい海水の匂いを salado が表すことから、抽象的な名詞を修飾する場合には、「潮の香り」からの連想によるメトニミーが関わっていると考えられる。

3.2.2.6.　まとめ

以上の考察から、salado の意味拡張には常に「塩味」が関わっており、いずれの拡張義においても、基本義の「塩気がある」という意味から離れないことが分かった。また、salado には共感覚表現はほとんどみられず、嗅覚への拡張例がわずかにみられたのみであった。

salado の多義構造を日本語の「辛い」と比較してまとめると次のようになる。

		（塩）辛い / しょっぱい	salado
味覚	塩味	○	○
共感覚	嗅覚	○	○
	聴覚	○	×
	視覚	○	×
人物評価	しゃれっ気、愛嬌がある	×	○
	けちな	○	×
抽象名詞		×	×

表８　salado と「塩辛い・しょっぱい」の意味拡張

3.2.3. amargo

amargo は、古スペイン語の amaro が語源であるとされ、さらにその語源は俗ラテン語の amarus であるという説が多くみられるが、amarus の起源に触れられているものは少ない。Corominas によれば、amaro はイタリア語の maraschino から派生した marrasquino が語源である。maraschino は「少し酸っぱいサクランボ」を意味する marasca から派生した語で、ここからさらに派生した amarasca の縮小された形が amara（ラテン語 amaro の女性形）へと変化した。このことから、amaro が果物の酸味や渋みのようなものを表していたと考えられる。また、De Silva (2001) （以下、De Silva）によれば、ラテン語の amarus の語源は不明とされているが、Cejador ではサンスクリット語で agrio を表す am-las が起源であるとされている。さらに、古ドイツ語やアイルランド語では áspero（不快な）、サンスクリット語では「熟していないぶどう」「渋い果物」「未熟な」などを表していたとされることから、amargo の語源は「未熟な果物の味」であると言えるだろう。次に西和辞典における定義を考察する。

3.2.3.1. 辞書の意味記述

A. 現代スペイン語辞典（山田編：1999）

amargo, ga（形）

①にがい〖↔dulce〗

naranja *amarga* にがいオレンジ.

②つらい；［その結果］不快な

experiencia *amarga* にがい経験. *amargas* noticias 痛ましい知らせ.

carácter *amargo* とげとげした性格. quedarse muy *amargo* むっとする

『現代スペイン語辞典』では、①「苦味」を表す用法と、②（経験などが）つらい、或いは不快であるという意味を挙げている。①の「苦味」を表す例として naranjas amargas（苦いオレンジ）が挙げられているが、amargo が味覚を表す場合、日本語の「苦い」を意味するとしているが、日本語の「苦味」を表す形容詞「苦い」がオレンジなどの果実の味に用いられることはあまりないため、amargo が具体的にどのような味について用いられるのかを、用例により調査する必要があると思われる。

また amargo は、経験などがつらい、或いは不快であることを表すとされ、experiencia（経

験）や noticias（知らせ）などの体験的な事柄を表す名詞の他に、carácter（性格）などの人物の性質を表す名詞を修飾して、人物評価にも用いられることが示されている。

B.　西和中辞典（高垣監修：2007）

amargo（形）

①《＋名詞/名詞＋》《ser＋/estar＋》苦い；渋い.

　té ～　渋いお茶.　　almendra *amarga*　ビターアーモンド，苦扁桃（くへんとう）.

②《多くは＋名詞/名詞＋》〖比喩的〗苦い，つらい，悲痛な；（その結果）不快な.

　recuerdo ～　苦い思い出.　　*amargas* experiencias　辛い経験.

③《＋名詞/名詞＋》〈性格・言動などが〉無愛想な，とげとげしい.

④　悲しんでいる，苦しんでいる.

⑤〖ラ米〗〖話〗〈1〉（アルゼンチン）臆病（おくびょう）な，気の弱い.

　　〈2〉（ペルー）怒った，不機嫌な.

『西和中辞典』では、amargo の表す味は日本語の「苦い」や「渋い」で表される味であるとされる。amargo で表される味の用例として té（お茶）が挙げられ、「渋味」が amargo で表されることが分かる。また、recuerdo（思い出）や experiencias（経験）を例として、それらがつらい、悲痛であることを挙げている。現代スペイン語辞典では、経験などのつらさを表す意味に人物を評価する場合も含まれていたが、西和中辞典では別の項目として性格や言動が無愛想であることを挙げている。さらに、「悲しんでいる」、「苦しんでいる」という定義もみられたが、用例が挙げられていないため、具体的な意味を用例により詳しく調査する必要があるだろう。

C.　Diccionario de la lengua española (Real Academia Española: 2001)

amargo, ga.

(De amaro[2], infl. por amargar).

（amaro より、amargar の影響）

1. Que tiene el sabor característico de la hiel, de la quinina y otros alcaloides; cuando es especialmente intenso produce una sensación desagradable y duradera.

（胆汁やキニーネ、その他アルカロイド系統に特徴的な味[4]のすること；特にそれが強い時、不快で長く続く感じをもたらす。）

2. Que causa aflicción o disgusto.

（苦痛や不快さを引き起こすこと。）

3. Que está afligido o disgustado.

（苦しい、或いは不快であること。）

4. Áspero y de genio desabrido.

（気難しく不愛想な気質。）

5. Que implica o demuestra amargura (‖ aflicción).

（苦味を意味したり表したりすること（苦痛）。）

Diccionario de la lengua española では、味覚としての amargo の意味について、「胆汁」や「キニーネ」など、普段口にする食品ではないものを挙げている。また、「苦痛や不快さを引き起こすこと」や、「苦しんだり不快にさせられること」を挙げているか、いずれも用例が挙げられていない。一方で、「気難しく不愛想な気質」として人物評価にも用いられることを示しているが、この場合も具体的な用例は挙げられていない。

D. Diccionario de uso del español (Moliner: 2007)

amargo, -a (de *amaro*[2], con influencia de *amargar*; adv. **amargamente**)

（amaro より、amargar の影響、副詞 amargamente）

1. *(a, de)* De sabor como el del acíbar o el de la quinina: ‘Amargo al paladar. Amargo de sabor’.

（(a, de) アロエの汁液やキニーネのような味：「舌に苦い。味が苦い。」

2. *Aplicado a personas, afectado por un dolor físico muy intenso causado por un golpe o accidente semejante.*

---

[4] 「アルカロイド系統に特徴的な味」というのは、必ずしも一般の人々にとって想像し易い表現とは言い難い。このようなスペイン王立学士院の辞書に関して、次のような興味深い評がみられた。

「スペイン王立言語アカデミー（筆者注：スペイン王立学士院に同じ）の辞書では、ことばは使い古され、まさに死のうとしているときになってやっと登録される。また、その定義は、釘にひっかけられた干物のように融通が利かないものだ。」(G・ガルシア＝マルケス（田澤耕訳）「辞書を書いた女性」『図書』2008 年 3 月号)

スペイン王立学士院の辞書は由緒あるものであり、その記述は確かに正しいと言えるが、実用性とはかけ離れた部分があることを明確に指摘している。

（略式。人に対して、衝撃やそれに類似の事故によって引き起こされた非常に激しい身体的苦痛に侵されていること。）

3. Aplicado a impresiones afectivas, causante de pena o sentimiento: ‘Amarga desilusión. Amargo desengaño. Amarga experiencia’. ⊙También se dice ‘la verdad amarga’. Y ‘amargos lamentos, amargas quejas’, etc. ⊙ *(Dejar, Quedarse) Aplicado a personas, apenado o dolido por un desengaño o prueba de falta de cariño o consideración*: ‘Me dejó muy amargo aquella respuesta’.
（情緒的な印象について、苦悩やその感覚を引き起こすこと：「苦い絶望。苦い幻滅。苦い経験。」⊙また「苦い真実」とも言う。さらに「苦い嘆き。苦い不満。」とも。⊙ (Dejar, Quedarse) 人に対して、絶望、また愛情や理解不足の試練に悩んでいる、或いは苦しんでいること：「あの答えは私を非常に苦しめた」。）

Diccionario de uso del español においても、*Diccionario de la lengua española* と同様、amargo の表す味については具体的な食品ではなく、キニーネなどの物質の味を挙げている。さらに、人物の状態について「非常に激しい身体的苦痛に侵されていること」としているが、用例は挙げられていない。また、経験などがつらいことと区別して、人が「愛情不足や理解不足の試練に悩み苦しむこと」を挙げている。

以上の考察から、amargo の意味について、西和辞典では naranja（オレンジ）や té（お茶）などの食品の味を表すとしているのに対し、西西辞典では quinine（キニーネ）などの生薬の味をあげていることが特徴的である。西和・西西辞典において共通して挙げられているのは almendras amargas（苦扁桃）であるが、実際に口にする時には本来の苦味を感じているとは考えにくいため、almendras dulces（甘扁桃）との対義関係によるものと推測される。

3.2.3.2　基本義

本節では、amargo が基本的な意味で用いられている例をみてみよう。

(63)　De nuevo estábamos juntos los dos, mi padre con un vaso de té con limón y endulzado con un terrón de azúcar, y yo con una taza de café *amargo* y un cigarrillo encendido entre los labios
（再び私たちは二人一緒にいた、父は砂糖の塊が入ったレモンティー、私は苦いコーヒーと火のついた煙草を唇に挟んでいた。）

(*El nombre prestado*)

(64) El sabor de las acelgas es similar al de las espinacas, aunque algo más suave. ……Si son ya viejas, es mejor consumirlas sin los tallos y nervios, ya que aportan un sabor *amargo*.
（フダンソウの味は、もう少しまろやかだが、ほうれん草に似ている。〈略〉もう古くなってしまったら、苦い味になるので、茎と筋を取って食べる方が良い。）
(http://medicinadentrodecasa.blogspot.jp/)

(65) … porque unas alcachofas *amargas* te fastidian todo el plato.
（〈略〉なぜなら苦いアーティーチョークは料理全体を台無しにする。）
(http://www.directoalpaladar.com/recetas-de-arroces/receta-de-risotto-con-alcachofas-y-jamon-de-pato)

(66) "Señora, las naranjas están *amargas*."
"Si, es porque comiste jarabe de maple con los panqueques."
（「おばさん、オレンジが苦い（→酸っぱい）。」「ええ、だってパンケーキをメープルシロップにつけて食べたから。」）
(http://lynettachica.wordpress.com/2012/02/26/en-espanol/)

(63)～(66)の例は、amargo が味覚を表している。そのうち、(63)～(65)の例では、コーヒーや野菜の「苦味」に対して amargo を用いている。この場合の amargo は日本語の「苦い」に相当すると思われる。

一方で、(66)の amargo はオレンジの酸味を表している。果物の酸味が強いことを日本語では「酸っぱい」と表す。しかし、(66)の例のようにスペイン語では amargo も普通に用いられる。このことには、amargo の語源が深く関わっていると考えられる。3.3.で述べたように、amargo の語源は「未熟な果物の味」である。日本語では、柿を「渋い」と表現し、蜜柑や林檎の場合は「酸っぱい」という。amargo の用例をみると、日本語で未熟な果物の味を表す「渋い」と「酸っぱい」の両方の意味を含んでいることが分かる。

また、「渋い」の場合は茶や紅茶の場合にも用いられるが、スペイン語でも té *amargo*（苦い紅茶）のような表現がみられる。

以上の考察から amargo が味覚を表す場合、単に苦味のみを表すのではなく、「渋味」や「酸味」も含まれることが分かった。次に、amargo の共感覚表現についてみてみよう。

3.2.3.3. 共感覚

3.2.3.3.1. 嗅覚

(67) Nubes de orín ascenderían al cielo. Un olor *amargo* que llegaría desde las industrias químicas.

（さびの雲が空に立ち上るだろう。苦い（→不快な）臭いが化学工場からやってくるのだろう。）

(*La historia del silencio)*

(68) El origen de la devastación se encontraba en ciertos vapores de olor *amargo* que surgieron de manera natural.

（荒廃の発端は自然に発生したとある苦い（→不快な）匂いの有毒ガスにあった。）

(*El hombre que calumnió a los monos*)

(67)と(68)は amargo が嗅覚表現に用いられている例である。化学工場からの煙や有毒ガスの匂いは通常口にするものではないことから、dulce や salado でみられたような味との同時性は、amargo の場合は関わりがないようである。むしろ、(67)や(68)の amargo が表すものは、苦いものを食べた時のような「不快な感覚」であり、amargo の嗅覚への意味拡張には、「不快さ」という身体感覚のメタファーが関わると考えられる。

3.2.3.3.2. 聴覚

(69) … —preguntó con la voz *amarga* que yo odiaba—.

（〈略〉—彼は私の大嫌いな苦々しい声で尋ねた—。）

(http://foro.univision.com/t5/Webnovelas/Amor-Prohibido-Justin-amp-Tu-Drama/m-p/468616420)

(70) mi mama me compro una guitarra alhambra modelo c1 y la recibí feliz hasta que la escuche. no se porque pero tiene este sonido *amargo* que resulta bastante desagradable. (sic)

（私のママがアルハンブラの C1 モデルのギターを買ってくれて、私は嬉しくそれを受け取っていたのは、その音を聞くまでだった。なぜかわからないが、かなり不快に感じられる、こんな苦い（→不快な）音がする。）

(http://es.answers.yahoo.com/question/index?qid=20110114123251AAvN2Tw)

(69)と(70)の例では、amargo が声やギターの音の「不快さ」を表している。この場合の amargo の意味は、前節でみた嗅覚の場合と同様、苦いものを口にしたときの不快な感覚を表しており、amargo の聴覚への意味拡張には「不快さ」いう身体感覚に基づくメタファーが関わると考えられる。

3.2.3.3.3. 視覚

(71) Castro esta vez no dijo nada y su rostro *amargo* se volvió hueco.

（カストロは、今度は何も言わず、その苦い表情は得意顔になった。）

(*En la casa del pez que escupe el agua*)

(72) No se iba a disculpar, pero tenía que admitirlo, ver a Eleanor llorando de esa manera era una vista *amarga* que no olvidaría por un buen tiempo.

（謝ろうとはしていなかったが、それを受け入れなければならなかった、そんな風に泣いているエレアノールを見るのはしばらくの間忘れられないであろう苦い光景であった。）

(http://www.fanfiction.net/s/8401984/9/Rescue-Me-Traducci%C3%B3n)

(73) Le divisé, antes de entrar en el café, a través de un ventanal. Y sólo verlo me produjo placer, como si de súbito la luz *amarga* de París se erizara de chispas y una alegría contagiosa.

（カフェに入る前に、大窓越しに、かすかに彼が見えた。そしてただ彼を見ただけで、まるでパリの苦い光が突然火花と伝染性の嬉しさで満たされたかのような喜びが湧いた。）

(Daudet, E.: *La Gioconda llora de madrugada*)

(71)～(73)の例は、amargo が視覚を表す場合、rostro（表情）は、まるで苦いものを口にしたときのような不快さを感じている表情を表していると考えられ、「不快さ」は言語主体ではなく、不快な表情をしている人物が感じているものと思われる。一方で、(72)や(73)の例では、vista（光景）や luz（光）を見ている言語主体が「不快さ」を感じていることを表す。いずれの例においても、感覚を受容する主体は異なるものの、苦いものを口にしたときのような「不快な感覚」が amargo で表されており、amargo の視覚への意味拡張には身体感覚のメタファーが関わると考えられる。

3.2.3.3.4. 触覚

(74) Toda tu retina y pestañas comienzan a empaparse con el *amargo* tacto de lágrimas, no pones empeño ni fuerzas ya gastadas para llorar, simplemente las lágrimas caen solas con la fuerza del dolor.

（君の網膜全体とまつ毛が涙の苦い感触でびしょ濡れになり始め、君は泣くのに努力も使い果たされた力も使わず、ただ涙は痛みの力でひとりでにこぼれ落ちる。）

(http://www.fotolog.com/laritah_100x100/58343886/)

(74)は触覚を表す amargo の例である。amargo が触覚表現に用いられる例はあまり多くない。また、ほとんどの用例が文学作品における例であり、一般化した用法とは考えにくい。(74)の例も小説における一文であるが、涙が頬を伝う感覚を amargo と表している。このような意味拡張では、言語主体が涙を流す要因となった出来事を amargo であると感じており、その出来事の結果としての涙をも amargo であると感じている。従って、この場合の amargo は正確には触覚を表すのではなく、涙の要因となった辛い出来事を表していると考えられる。このような抽象的な事柄を表す amargo の意味拡張については、次節で詳述する。

以上の考察より、amargo は触覚を除く全ての感覚に共感覚的に意味拡張しており、一方向性仮説への反例はみられないことが明らかになった。

3.2.3.4. 抽象的な事柄

(75) Se trata del joven Juan Carlos Rubio, quien vivió la *amarga* experiencia de la extorsión telefónica este pasado fin de semana.

（フアン・カルロス・ルビオという、先週末の電話詐欺の苦い経験をした若者が扱われている。）

(http://www.noticiaspv.com/vivio-la-amarga-experiencia-de-la-extorsion-telefonica/)

(76) Me contaron que hace un tiempo, una empresa "fantasma" engañó la buena fe de muchos vecinos, haciéndoles creer que se realizaría la tan anhelada obra, pero todo resultó una estafa y un *amargo* desengaño.

（私に、「お化け」会社が近所の人たちの善意を裏切り、その待望の工事が実行されると信じ込ませたが、全ては詐欺で苦い失望に終わった、と話してくれた。）

(http://www.nuevodiarioweb.com.ar/notas/2013/6/24/ciudad-460827.asp)

(77) Ayer jueves, el secretario de Estado estadounidense, John Kerry, tuvo la oportunidad de tener un vistazo de primera mano en la terrible guerra en Siria, al visitar un extenso campo de refugiados que alberga a 115,000 sirios que han huido del conflicto, y escuchar sus *amargas* quejas de que el mundo se ha olvidado ellos.

（昨日木曜日、アメリカの国務長官のジョン・ケリーは、紛争から逃げ延びた 115,000 人のシリア人を収容する広大な難民キャンプを訪れ、世界は彼らのことを忘れてしまった、という彼らの苦しい（→苦い）嘆きを聞いて、シリアでの恐ろしい戦争を直接垣間見る機会を得た。）

(http://eleconomista.com.mx/internacional/2013/07/18/kerry-se-reune-refugiados-sirios-jordania)

(75)～(77)の用例は、経験や失望、嘆きなど抽象的な事柄を修飾する amargo の例である。この場合の amargo は、辛い体験をした言語主体がその体験を「不快」に感じている

ことを表している。従って、amargo の抽象名詞への意味拡張には「不快さ」という身体的感覚のメタファーが関わっていると言えるだろう。

また、「心地よさ」を表す dulce が agonía *dulce*（甘い苦悩）のように、ネガティブな感情にも意味拡張していたが、amargo にも次のような例がみられた。

(78) Los hinchas nos fuimos del estadio con una *amarga* alegría por no ganar pero sabiendo que jugando así, vamos a ganar muchos más partidos de los que teníamos pensado.
（勝利はしなかったが、このままプレイし続ければ、考えていたよりもずっと多くの試合に勝てることを知りつつ、我々サポーターは苦い（→悔しい）喜びとともにスタジアムを後にした。）
(http://www.politicaenriver.com/2012/09/river-plate-3-vs-3-newells-partido-al.html)

(79) Aparentemente es un día normal pero hay algo extraño en el ambiente: la despedida se acerca y el relajante sonido de la lluvia junto a un amago de nostalgia que empieza a flotar por la casa de Dakar forman una atmósfera de un nuevo sentimiento, una *amarga* felicidad: todos queremos irnos, pero no queremos.
（一見普通の日だが、何か変な空気が流れている：別れが近づき、ダカールの家中に漂い始めるノスタルジーの苦味とともにゆったりとした雨の音が、みんな帰りたいのに帰りたくない、苦い（→寂しい）幸せという新しい感覚の雰囲気を作っている。）
(http://www.africaandando.com/africaandando/expediciones/africaandando-2010/cronicas-2010/281-cronica-20100721)

(78)、(79)の例では、amargo が alegría（喜び）や felicidad（幸せ）など、ポジティブな感情を修飾している。alegría も felicidad も、通常は不快にはなりえない感情であるが、例えば(78)の場合、試合に負けたことに「不快感」を感じつつも、将来の試合での勝利を確信しているという「喜び」を同時に感じていることを表している。日本語では、(78)の場合なら試合に負けた悔しさ、(79)であれば別れの寂しさを直接表現するのが自然であるように思われるが、スペイン語では amargo で表されることに注目したい。本来ネガティブな意味をもつ名詞を修飾することが多い amargo が alegría や felicidad などのポジティブな

意味をもつ抽象名詞と結びついて、不快感と快感がないまぜになった複雑な感情を表していることは興味深く思われる。

3.2.3.5. 人物の描写

次に、amargo が人物の性質を表す用例をみてみよう。

(80) Esa búsqueda por los defectos no tiene fin. Usted se convierte en una persona *amarga*, odiosa, rencorosa, cuya lengua sólo tiene veneno.
（その欠点探しは終わりがない。あなたは苦い（→不快で）、憎らしい、恨みっぽい、言葉には毒しかないような人間に変わってしまう。）
(http://www.renatocardoso.com/es/2013/08/12/el-mal-que-entra-por-los-ojos/)

(81) Pues bien, hasta entonces, ella era una chica *amarga*, difícil, daba mucho trabajo; después de eso, se transformó, hoy es una estupenda madre, ha tenido otros dos hijos, es batalladora, se casó, trabaja en un banco y da cuenta de todo con alegría.
（さて、その時まで彼女は苦くて（→不快で）、気難しい、とても面倒な女性だった；その後、変化して、今日では彼女は素晴らしい母親で、さらに子供を 2 人もうけ、困難に立ち向かい、結婚して、銀行で働き、全てに喜びを見出している。）
(http://somostodosum.ig.com.br/mob/conteudo.asp?id=7884)

(82) Así que se quedó aquí a cuidar los intereses familiares, lo que lo convirtió en un hombre *amargo* y sombrío.
（だから彼は家族の財産を守るためにここに残ったが、それが彼を苦くて（→気難しい）陰気な男に変えてしまった。）
(Santos López, M.: *Rowena*)

(80)～(82)は amargo が人物の性質を表す例である。いずれの例においても、「憎らしい、「気難しい」や「陰気な」などの形容詞と並列されていることから、この場合の amargo が否定的な意味を持つことは明らかであり、「不快感」を抱かせるような人物の性

質を表していると言えるだろう。このような amargo の人物評価への意味拡張には、「不快感」という身体感覚のメタファーが関わっていると考えられる。

3.2.3.6. まとめ

以上の考察から、スペイン語の amargo は「不快感」という身体感覚に基づいて意味が拡張していることが明らかになった。また、amargo は alegría などのポジティブな感情を表す名詞を修飾して、「不快な」気持ちと「心地よい」気持ちとがないまぜになった感情を表す。さらに、人物の性質を表して「陰気な」、「気難しい」の意味を持つ。一方で、日本語で amargo に対応するとされる味覚形容詞「苦い」が、人物を評価して「苦い人」と表されることは不自然に思われる。日本語では、「苦い」の名詞形「苦味」を用いて「苦味のある男」や「苦味走ったいい男」などと表現する。この場合、スペイン語の amargo で表されるような「陰気な」性質ではなく、「渋さを含んでひきしまった感じ（『デジタル大辞泉』: 2012）を表し、特に男性の表情について用いられることが興味深い。日本語の「苦い」は amargo と同じように、口を刺激するような不快な味を表す形容詞であり、その意味拡張も「不快さ」に基づいていると思われる。しかし、「苦味」はいつも不快なものとは限らない。一般的に動物は、本能的に苦いものを毒物と判断して口から出そうとする。しかし、ヒトは苦味が含まれている食品でも親から子への教育や周囲のヒトの食べている姿を学習することで、接触可能な食物と認識できるようになり、大人になると苦味のあるものを好んで摂取する（柏柳: 2006）。このようなことから、「苦味」に「渋さを含んで引きしまった感じ」という意味が生じ、「苦味のある男」という表現において「苦味」は、苦い味の不快さではなく、大人になって感じられる少しの苦味を好む感覚を表していると考えられる。

		苦い	amargo
味覚	舌を刺激する不快な味	○	○
	果物の酸味	×	○
共感覚	嗅覚	○	○
	聴覚	○	○
	視覚	○	○
	触覚	×	×
抽象的な事柄	辛い、苦しい体験	○	○
	ポジティブな感情	×	○
人物評価	気難しい、陰気な	×	○

表９　amargo と「苦い」の意味拡張

3.2.4.　ácido

酸味を表すスペイン語の形容詞には、ácido と agrio がある。本節ではまず ácido について考察する。酸味を表す ácido は、ラテン語で「とがった」を意味していた acidus が語源であるとされる。Cejador によれば、acidus は「先がとがっている」意味の aceo から派生した語である。dulce や salado, amargo が同じ味覚を表す語に起源を持つのに対し、物のとがっている様子、つまり視覚的表現から意味が拡張した形容詞であることが分かる。以下に、西和辞典における記述をみてみよう。

3.2.4.1.　辞書の意味記述

A.　現代スペイン語辞典（山田編：1999）

ácido, a（形）

①すっぱい〖agrio〗

bebida *ácida*　酸味のある飲み物.

②《化学》酸の，酸性の

lluvia *ácida*　酸性雨

③気難しい；辛辣な

carácter *ácido*　気難しい性格.　respuesta *ácida*　辛辣な答え.　*ácida* comedia　辛口の喜劇

『現代スペイン語辞典』では、ácido の用法について食品が「すっぱい」こと、物質が「酸性」であること、人物の性質が「気難しい」こと、批判などが「辛辣である」ことを挙げている。「すっぱい」についての用例として bebida *ácida*（酸っぱい飲み物）が挙げられているが、具体的にどのような味を ácido と捉えているのかについては明示されていない。

B.　西和中辞典（高垣監修：2007）

ácido, a（形）

①酸っぱい，酸味のある.

fruta *ácida*　酸っぱい果物.

②しんらつな，手厳しい.

en un tono ～　とげのある言い方で.

③気難しい，無愛想な.

carácter ～　気難しい性格.

④〈音楽が〉アシッドハウスの（＝acid）.

⑤〖化〗酸の，酸性の.

⑥〖ラ米〗（チリ）（プエルトリコ）〖話〗うんざりする，無礼な.

『西和中辞典』では、ácido が味覚を表す場合について、fruta ácida（酸っぱい果物）という用例を挙げて、果物が持つ酸味を表すことを示している。さらに、現代スペイン語辞典と同様に、批判が「辛辣である」こと、人物の性質が「気難しい」ことが挙げられている。また、音楽のジャンルである「アシッドハウス」という比較的新しい語も取り入れられていることが特徴的である。

C.　Diccionario de la lengua española (Real Academia Española: 2001)

ácido, da.

(Del lat. acĭdus).

（ラテン語 acĭdus より。）

1. Que tiene sabor como de agraz o de vinagre.

（未熟な葡萄の果汁や酢の味がすること。）

2. Que tiene las características o propiedades de un ácido.

（酸の特徴や属性を持つこと。）

3. Áspero, desabrido.

（形容詞。気難しい、不愛想な。）

4. coloq. jerg. Hond. Dicho de una persona: Experta o que tiene muchos conocimientos sobre algo.

（俗語。スラング。ホンジュラスで。人物についての表現：専門家、或いは何かについて多くの知識を持つこと。）

以上の記述では、ácido が味覚を表す場合、未熟な葡萄の果汁や酢の酸味を表すとされている。また、ácido が持つ意味は、「酸味」、物質が「酸性である」こと、人物が「気難しい」ことであり、西和中辞典でみられたような、「アシッドハウス」についての記述はみられなかった。

D. Diccionario de uso del español (Moliner: 2007)

ácido, -a (del lat. "acĭdus")

（ラテン語の acĭdus より）

1. *Agrio. Se aplica a lo que produce en la lengua o el paladar la sensación que produce, por ejemplo, el vinagre.

（Agrio. 舌や口蓋に、例えば酢がもたらすような感覚を引き起こすもの。）

2. De ácido o que tiene cualidades de ácido.

（酸や酸の特性を持つもの。）

3. Del acid house: ‘Música ácida’.

（形容詞。アシッドハウスのこと：「アシッド音楽」。）

Diccionario de uso del español においては、味覚を表す ácido の定義について、agrio（酸っぱい）という形容詞を挙げている。このことから、ácido と agrio が類似の意味を持っていると考えられる。また、この場合の àcido は酢のような味を表すとされている。

3.2.4.2. 基本義

次に、ácido が基本義を表す用例をみてみよう。

(83) El vinagre es "*ácido*" gracias a su alta concentración de ácido acético, que se forma a través de dos procesos de fermentación:

（お酢は、二度の発酵の過程を経て構成される、高濃度の酢酸のおかげで「酸っぱい」のです。）

(http://raybodymind.blogspot.jp/2011/06/los-mil-usos-del-vinagre.html)

(84) Si la coges muy pronto, la manzana está *ácida*, y si la coges muy tarde está podrida.

（もし林檎を早くとったら、それは酸っぱくて、もしそれをとても遅くとったら、腐っている。）

(http://opticosnaturvision.blogspot.jp/2013/06/cataratas.html)

(85) Aunque sólo se tengan 72 horas para consumirlo después de abierto, es un jugo de limón muy *ácido* que va bien en ensaladas, para limonada y para cualquier preparado que lo requiera

（開封後 72 時間しか消費期限がないけれども、これはとても酸っぱいレモン果汁で、サラダやレモネードなどレモンを必要とする全てのものに合います。）

(http://reflexionesenlamesa.wordpress.com/2012/10/04/jugo-puro-limon-exprimido-citric/)

(83)～(85)の例は、ácido が基本義を表す例である。(83)では「酢」、(84)と(85)では「果物の酸味」を意味しており、味覚を表す場合、日本語の酸味を表す形容詞「酸っぱい」と ácido は、ほぼ同じ意味を持つと考えられる。次に、ácido が味覚以外の意味に拡張している例をみてみよう。

3.2.4.3.　共感覚

3.2.4.3.1.　嗅覚

(86)　La sensación en la boca fue la típica de los chicles de fresa: una aroma *ácida* en seguida que te embriaga la boca y te perfuma la nariz.

（口の中の感覚はよくあるいちご味のガムだった：酸っぱい香りがすぐに口の中を酔わせ、鼻まで匂いで包み込む。）

(http://www.dooyoo.es/panaderia-y-dulces/clix-3d-fresa/1259368/)

(87)　Su cuerpo exhalaba un olor *ácido*. Una mosca verde, enorme, exploraba los repliegues de su cara.

（彼女の身体は酸っぱい匂いを放っていた。緑の大きなハエが彼女の顔のしわを行き来していた。）

(Gasulla, L: *Culminación de Montoya*)

(86)と(87)は、ácido が嗅覚を表す例である。(86)は苺の酸味のある香り、(87)は人間の身体の腐敗臭を表している。いずれも果物の酸味や腐った食物などを口にした時に、同時に感じられる香りが ácido と表現されている。

(88)　Aparte de los cientos de avispas, flota en el aire un hedor *ácido* tan áspero que penetra en tu nariz y va directo hasta el cerebro.

（何百ものスズメバチ以外に、鼻に入り込み直接脳まで届くようなとても不快な酸っぱい悪臭が空気中に漂う。）

(http://www.patatabrava.com/blogs/marco_vannorden/nunca_antes_habia_vomitado-t16987.htm)

(88)における hedor ácido（酸っぱい悪臭）は、「空気中に漂っている」臭いであり、口にしている食品の香りを表しているわけではない。この場合の ácido は、酸味を感じた時のような刺激的な匂いを表しており、類似性によるメタファーに基づく意味拡張であると考えられる。

3.2.4.3.2. 聴覚

(89) En particular, se viene escuchando la voz *ácida* y quejumbrosa de la presidenta de la Comunidad de Madrid, Esperanza Aguirre, que, una vez más, piensa que ha sido relegada y menospreciada en los repartos regionales, … …

（特に、再び、地域分配において追放、蔑まれていたとして再び、マドリード州知事、エスペランサ・アギレの酸っぱく、愚痴っぽい声が聞かれている。）

(http://www.lne.es/opinion/1773/pelea-presupuestaria/561562.html)

(89)は ácido が聴覚を表している例である。この場合の voz ácida（酸っぱい声）は、quejumbrosa（愚痴っぽい）と共起していることから、声の質が刺激的なのではなく、愚痴を言う人の声を聞き苦しいと捉える身体感覚のメタファーに基づく意味拡張であると推測される。

(90) … un track House algo oscuro con tendencia al Techno y con una melodía *ácida* que nos transporta a los tiempos en los que el Acid estaba en pleno auge y que sale editado a través de sello Briquerouge.

（なんだか暗く、テクノの傾向があり、私たちをアシッドが絶頂だったころへと誘ってくれるようなアシッドなメロディーで、ブリークルージュレーベルから発表されるハウスの曲。）

(http://1-beat.com/category/techno/)

(91) Cuando salió a la venta su primer disco en 1971, el público esperaba un sonido *ácido* y psicodélico.

（その最初のレコードが 1971 年に発売された時、聴衆はアシッドでサイケデリックな音を期待していた。）

(http://elataquedelmothman.blogspot.jp/2013/01/captain-beyond-same.html)

一方で、ácido は música ácida が「アシッドハウス」という音楽のジャンルを表すことから、聴覚語を修飾する場合に「アシッドハウスのような音」を意味することが多い。

3.2.4.3.3. 視覚

(92) La madre deja la bandeja sobre la mesa. El padre vuelve a mirar por la ventana, el rostro *ácido* y malhumorado.

（母はトレイをテーブルの上に置く。父は再び窓の方を、酸っぱい（→不愛想な）不機嫌な表情で見た。）

(G. Griselda: *La malasangre*)

(92)は ácido が「表情」という視覚表現を修飾している例である。この場合、ácido は酸味のあるものを食べた時のような歪んだ表情を指しており、「同時性」に基づくメトニミー表現であると考えられる。

(93) El fucsia es otro de los colores que están arrasando en esta temporada Primavera - Verano 2013. Es un color *ácido* y vital. No pasarás inadvertida y darás alegría a tu "look" si apuestas por el rosa más "osado".

（紫紅色はこの 2013 年春・夏シーズンで大流行しているもう一つの色です。これは酸っぱくて活力のある色です。より「大胆な」ピンクに任せておけば、誰にも気づかれないなんてことはないし、あなたのスタイルににぎやかさを与えてくれるでしょう。）

(http://tuestiloadiario.blogspot.jp/2013/05/te-atreves-con-el-fucsia.html)

(94) El naranja es un color vibrante, fresco, un color *ácido*, perfecto para el verano, además admite muchos tipos de combinaciones distintas con otros colores, creando así unas paletas decorativas muy interesantes.

（オレンジは感動的でフレッシュな色、酸っぱい色で、夏にぴったり、さらにこんな風にとても面白くてきらびやかな色合いを作って、他の色とのたくさんの種類の異なる組み合わせができる。）

(http://www.milideas.net/fotos-e-ideas-para-decorar-en-color-naranja)

また、(93)と(94)の例は ácido が色彩語を修飾している例である。この時、naranja（オレンジ色）を表す例は、naranja の酸味からのメトニミー表現であるとも捉えられるが、紫

紅色にも使われて刺激的な蛍光色を表していることから、酸味のような刺激を感じる色というメタファー表現であると考えられる。

3.2.4.3.4　触覚.

また、ácido には触覚を表す例はみられなかった。このことから、ácido には一方向性仮説への反例がみられないと言えるだろう。

3.2.4.4.　人物評価

(95)　- No creo que tenga sentido del humor. Me parece que soy una persona *ácida*, quizá a veces algo ingeniosa. Todo, producto de la mala leche que tengo. No me encuentro ni graciosa ni simpática.

（ユーモアのセンスがあるとは思いません。私は気難しくて、たぶん時々機知に富んだ人間なのだとおもいます。全ては、私の意地の悪さの産物です。私は自分を面白いとも愛想が良いとも思えません。）

(*Tiempo*, 20/08/1990)

(96)　Oh... con esa forma de comportarte serás una solterona... nadie saldría con una chica *ácida* como un basilisco...

（ああ…その態度からして君は独り者なんだろう…だれもバシリカ[5]のような気難しい女の子とは付き合わないだろうよ。）

(http://amor-yaoi.com/fanfic/viewstory.php?skin=colors&sid=23988&textsize=19&chapter=51)

(97)　Torres es un hombre *ácido*, que parece muy riguroso en su proceder; … …

（トーレスは自分の行動に厳格で不愛想な男だ、〈略〉）

(http://m.eltiempo.com/buscador/MAM-5432566/1)

(95)～(97)の例は、ácido が人物の性質を表す例である。この場合 ácido で表される人は

[5] ここでバシリカとは、怪獣の一種である。

「無愛想」であったり「気難しい」人物である。このように、ácido が人物の「無愛想な」性質を表すのは、ácido が「無愛想な表情」を表していた時と同様に、酸味を口にしたときのような不快な感覚を与えることからのメタファー表現ではないかと考えられる。

3.2.4.5. 具象物

(98) En muchas grandes ciudades, uno puede encontrar edificios, carteles y hasta monumentos oxidados y muy deteriorados de una forma muy peculiar y todo esto es el resultado de la lluvia *ácida*.

（多くの大都市では、建物やポスター、建造物でさえもが酸化してとてもおかしな形に損傷してしまっているのが分かり、これら全ては酸性雨の結果なのです。）

(http://www.ojocientifico.com/2011/04/03/como-se-forma-la-lluvia-acida)

(99) La hortensia necesita una tierra *ácida* para crecer y florecer.

（紫陽花は成長して花を咲かせるために酸性の土が必要である。）

(http://www.lavidaencasa.com/TRUCOS/c2h3.htm)

(98)と(99)の例では、雨や土が「酸性」であることを表す例である。このように「酸性」を表す ácido の用法は、ácido が名詞で「酸」を意味するためであると思われる。

3.2.4.6. まとめ

以上の考察から、スペイン語の味覚形容詞 ácido については、第 1 に味覚を表す場合、「果汁や酢の酸味」を表すことが分かった。第 2 に、共感覚や人物評価に ácido が用いられる場合は、酸味のあるものを口にしたときに感じる不快さから、「無愛想な」ことや「気難しい」ことといったネガティブな意味に拡張していると考えられる。

		酸っぱい	ácido
味覚	果汁や酢の酸味	○	○
共感覚	嗅覚	○	○
	聴覚	×	○
	視覚	○	○
	触覚	×	×
人物評価	気難しい	×	○
物質	酸性の	×	○

表１０　ácido と「酸っぱい」の意味拡張

3.2.5.　agrio

agrio は、ラテン語の acrus に由来する agro という形容詞が、agriar（酸っぱくする）という動詞の影響を受けて派生したものである。acrus は同じラテン語の acer から派生しており、acer はかえでの木を指す。諸説あるが、かえでの葉のとがった様子や、木材として使用されたと考えられる木の固さから、acer は 「固い」「鋭い」を意味した。よって、agrio の原義は味覚ではなく、視覚や触覚からの拡張であると考えられる。

3.2.5.1.　辞書の意味記述

A.　現代スペイン語辞典（山田編：1999）

agrio, gria（形）

①すっぱい

Esta uva está muy *agria*.　このブドウはひどくすっぱい.

②そっけない，不機嫌な；気難しい〖～ de carácter〗.

③辛辣（しんらつ）な，厳しい

crítica *agria*　辛辣な批評.

『現代スペイン語辞典』では、agrio の意味について、味覚を表す「すっぱい」、人物の性質が「そっけない」、「気難しいこと」、また批評が「辛辣」であることが挙げられている。agrio は ácido と同じく味覚を表す場合に「すっぱい」を意味するとされるが、agrio の記述では uva（ブドウ）の酸味が用例に挙げられている。

B.　西和中辞典（高垣監修：2007）

agrio, gria（形）

①酸っぱい，　酸味のある．

Esta naranja está *agria*.　このオレンジは酸っぱい．

frutas *agrias*　柑橘（かんきつ）類の果物．volverse ～　酸っぱくなる．

②とげとげしい，不機嫌な．

actitud *agria*　とげとげしい態度．　carácter ～　気難しい性格．

③厳しい，　しんらつな；険しい．

crítica *agria*　しんらつな批評．　camino ～　凸凹道．

④けばけばしい．

⑤〈金属が〉もろい．

『西和中辞典』では agrio が「すっぱい」という味覚を表す場合、naranja（オレンジ）のような酸味を指すとしている。他にも frutas *agrias*（柑橘類の果物）という例が挙げられており、agrio が指す酸味は柑橘類の味を指すと考えられる。また、crítica（批評）を修飾して「辛辣な」という意味を持つ。さらに、「けばけばしい」という記述がみられるが、用例が挙げられておらず、具体的に用例を検証する必要があるだろう。

C.　Diccionario de la lengua española (Real Academia Española: 2001)

agrio, gria.

(Del ant. agro[2], con infl. de agriar).

（古スペイン語 agro より、agriar の影響。）

1. Que actuando sobre el gusto o el olfato produce sensación de acidez.

（味覚や嗅覚に作用して酸味の感覚を引き起こすこと。）

2. Que se ha agriado.

（酸っぱくなったこと。）

3. Difícilmente accesible; pendiente o abrupto.

（接近しがたいこと；傾いている、または険しい。）

4. Acre, áspero, desabrido. Genio agrio. Respuesta agria.

（不愛想な、気難しい、むっつりした。気難しい性格。不愛想な返事。）

5. Dicho de un castigo o de un sufrimiento: Difícilmente tolerable.

（刑罰や苦しみの表現：我慢しがたい。）

6. Dicho de un metal: Frágil, quebradizo, no dúctil ni maleable.

（金属の表現：もろい、壊れやすい、可塑性もなければ展性もない。）

7. Pint. Dicho del colorido: Falto de armonía o consonancia o de la necesaria entonación.

（絵画用語。色彩の表現：調和や協和、必要なトーンの不足。）

Diccionario de la lengua española では、味覚の用法として「酸味の感覚を引き起こす (produce sensación de acidez)」とされている。acidez（酸味）という名詞は ácido（酸っぱい）から派生した名詞であり、ácido に似た意味を指すと思われるが、用例による検証が必要であると思われる。「酸っぱくなったこと (Que se ha agriado)」という記述についても同様で、具体的に何がどのような味になったのかを用例に基づいて明らかにする必要があるであろう。また、西和辞典にはみられなかったが、坂道などが「険しい」ことや、刑罰や苦しみが「我慢しがたい」ことなども agrio の用法として挙げられている。

D. Diccionario de uso del español (Moliner: 2007)

agrio, -a (de *agro*[2], con influencia de *agriar*; adv. **agriamente**)

（agro より、agriar の影響、副詞 agriamente）

1. (*a*: ‘al paladar’; *de*: ‘de sabor’) adj. De sabor como el del limón o el vinagre. ≃ *Ácido. ⊙ Se aplica también a la fruta que, por no estar madura, tiene ese sabor.

（形容詞。レモンや酢のような味。≃ Ácido. ⊙熟していないためにそのような味を持つ果物にも用いられる。）

2. Aplicado a tono, humor, crítica, discusión y expresiones semejantes, violento y agresivo. ≃ *Acre. Aplicado a personas o a su carácter, *adusto o *malhumorado: ‘Agrio de carácter’.

（音程や冗談、批判、議論やそれに類似する表現について、暴力的で攻撃的である。≃ Acre. 人物やその性質について、冷淡な、機嫌の悪い：「気難しい性格」。）

3. *Abrupto: de difícil acceso o tránsito.

（険しい：接近や通行が難しい。）

4. Aplicado a castigos o sufrimientos, cruel o duro.

（刑や罰、苦しみについて、残酷な、あるいは厳しい。）

5. Aplicado a los metales, frágil.

（金属について、壊れやすい。）

6 Pint. Se aplica al colorido falto de entonación o armonía.

（絵画用語。色彩についてトーンや調和が不足していること。）

Diccionario de uso del español では、agrio が表す味覚を「レモンや酢のような味」とし、ácido との類似性を指摘している。また、熟していない果実の味についても agrio を用いると定義している。さらに議論や批評が辛辣であることを、「暴力的で攻撃的 (violento y agresivo)」と表現している点は、これまでにみたいずれの辞書にもみられなかった表現である。さらに、人物の性質が「気難しい」ことを「辛辣な」ことと同じ項目で扱っていることが特徴的であると言えるだろう。

3.2.5.2. 基本義

(100) nuestro vino es *agrio* pero es nuestro vino.

（私たちのワインは酸っぱいが、これは私たちのワインなのです。）

(*El Nacional*, 01/09/1997)

(101) Este yogur es agradablemente lavanda y contiene pequeños trozos de puré de arándano. Su sabor es más *agrio* que el yogur de vainilla o fresa.

（このヨーグルトは心地よくラベンダーが香り、ブルーベリーのピューレの一片が入っている。その味はバニラやイチゴのヨーグルトよりは酸っぱい。）

(http://www.ehowenespanol.com/sabores-del-yogur-activia-info_248430/)

(102) Le he reservado naranjas porque no hay más que esas, y las peras están agrias.

（あなたにオレンジを用意しておきましたよ、それ以外もうオレンジはありませんし、洋梨は酸っぱいですから。）

(De Burgos, C : *La rampa*)

(100)は、ワインの味を、(101)はヨーグルトの味を、(102)は洋梨の味を agrio であると表現している。agrio と ácido の違いについては、辞書に明確な定義はみられなかったが、

用例を考察する限りでは、agrio の方がえぐみを含んだ「渋い」に近い意味を持っているのではないかと思われる。このように、ácido と agrio が混同されることについては、5.4 節で詳しく考察する。

3.2.5.3. 共感覚

3.2.5.3.1. 嗅覚

(103) La misma señora de por la mañana le abrió la puerta y otra vez el olor a inodoro la intimidó; también había un olor *agrio*, como de cerveza.
（朝と同じ女性が扉を開け、再び何かが彼女を威嚇した：またビールのような苦い香りもした。）

(*Páginas de vuelta*)

(104) He analizado exhaustivamente el maíz y las calabazas mutantes y aún no tengo resultados definitivos. Sin embargo, su hedor *agrio* me recordó que quizás estas transformaciones tengan algo que ver con la tierra de las granjas.
（私は突然変異のトウモロコシとカボチャを徹底的に分析し、未だ決定的な結果を得られていない。しかし、その酸っぱい（→つんとした）匂いで、きっとこれらの変異は農場の土と関係があるであろうことに気付かされた。）

(http://es.runesdatabase.com/quest/420191)

(105) Normalmente no nos sentamos al lado del borrachito, no porque tengamos miedo (normalmente duerme) sino por su fragancia *agria*, si esa que empaña los cristales del transporte publico...
（普段は酔っ払いの隣には座らない、怖いわけではなく（ふつうは寝ているのだから）その酸っぱい（→つんとした）匂い、そう、交通機関の窓を曇らせるあの匂いのせいだ。）

(http://63larga.blogspot.jp/)

(103)～(105)は agrio が嗅覚を表している例である。(103)の例は「ビールのような (como de cerveza)」という表現から、ビールの香りからのメタファー表現であると言えるだろう。

(104)と(105)の例は、「突然変異のトウモロコシやカボチャ」と、「酔っ払い」の匂いを agrio で表しているが、いずれも口にできるものではないことから、酸味のある食品が持つ匂いとのメタファー表現であると考えられる。

3.2.5.3.2.　聴覚

(106)　La voz *agria* y breve se abrió camino en la oscuridad y el frío.

（酸っぱい（→とげとげしい）、短い声が暗闇と寒さの中で道を開けた。）

(*Largo noviembre de Madrid*)

(107)　El oboe, …… Al unísono del clarinete produce un sonido *agrio*, pero que puede ser de efecto en algunos casos.

（オーボエは〈略〉クラリネットとのユニゾンでは酸っぱい（→とげとげしい）音を出すが、場合によっては効果的なこともある。）

(http://www.banrepcultural.org/node/78513)

(108)　Se oyó, de las casas de enfrente, una canción *agria* y salvaje que partiría de algún borracho. Era una canción llena de resentimiento y agresividad.

（向かいの家々から、どこかの酔っ払いが歌っているのであろう、酸っぱくて（→とげとげしく）粗野な歌が聞こえてきた。それは恨みや攻撃性に満ちた歌であった。）(*Los días terrenales*)

(106)～(108)の例は agrio が聴覚を表す例であるが、いずれの例も「暗闇と寒さ」、「場合によっては効果的」「粗野な」、などの文脈から、否定的な意味をもつと考えられる。特に(108)の例では、「恨みや攻撃性に満ちた歌」という表現から、agrio がとげとげしい様子を表すことが分かる。

3.2.5.3.3.　視覚

(109)　Hay un proverbio japonés que dice:«Quien sonríe es más fuerte que quien anda con un rostro *agrio*, enfadado, tenso.»

（こんな日本の格言がある：微笑む人は、酸っぱい（→不機嫌な）、怒った、固まった表情をしている人よりもずっと強い。） (*Palabras para la alegría*)

(110) Rosy Guerrero aconseja no recibir el año vestidos de color negro ni verde limón, “porque es un color *agrio*”. Recomienda, en cambio, el amarillo porque es el color de la fortuna.
（ローシー・ゲレーロは黒やレモングリーンなど「酸っぱい（→調和のない）色」のワンピースで新年を迎えないよう勧めている。代わりに幸運の色である黄色を勧めている。）
(http://www.eluniverso.com/2002/12/31/0001/257/6FA8B74A4F3D4934A73D6292436AF401.html)

(109)と(110)は agrio が視覚表現へと意味拡張している例である。(109)の場合は、人物の表情が「不機嫌」であることを指している。また、(110)は服の色の表現であるが、agrio で表される色の例として negro（黒）や verde limón（レモングリーン）をあげ、新年を迎えるという状況にふさわしくない色であると述べている。このことから、agrio が色彩を表す場合は否定的な意味を含むと推測される。

3.2.5.3.4. 触覚

agrio にも触覚への拡張例はほとんどみられなかった。このことは、一方向性仮説に

ácido と同様に、触覚に関する用法はほとんどみられなかった。ácido との違いがあまりみられないようにも思われるが、(103)の嗅覚に関しては、“como de cerveza（ビールのような）”とあることから、酸味というよりも、苦味や渋みのようなものを含んだ香りと考えられる。

3.2.5.4. 抽象的な事物

3.2.5.4.1. 辛辣さ

(111) La novela de William Burroughs es una exploración al subconsciente y una crítica *agria* a la sociedad estadunidense.

（ウィリアム・バロウズの小説は潜在意識の爆発であり、アメリカ社会への辛辣な批判でもある。）

(http://www.gaceta.udg.mx/G_nota1.php?id=13760)

(111)は agrio が crítica（批判）を修飾している例である。ácido も批判などが「厳しい」或いは「辛辣」であるという意味を持っているが、いずれも酸味を表す語であり、酸味が「舌を刺激するような味」であることから、同じような意味拡張の過程を辿ったものと推測される。

3.2.5.4.2. 険しさ

(112) La cuesta es *agria*. Para escalarla ha de resecarse un poco el motor del coche.

（その坂道は険しい。それを上るためには、車のモーターを少し乾かさなければならない。）

(Bello, L. *Viaje por las escuelas de Andalucía*)

agrio は道や坂などが「険しい」、「接近しがたい」ことも表す。このような agrio の用法は、agrio の基本義である酸味からはかけ離れているように思われるが、agrio が持つ批評などが「厳しい」ことや「辛辣」であるという意味からのメタファーに基づくものであると考えられる。

3.2.5.4.3. つらさ

(113) La educación católica que recibió en su infancia le supone un *agrio* sufrimiento difícil de ignorar, una penitencia por su condición de maldita.

（彼女が子供時代に受けたカトリック教育は、彼女につらく、無視できない苦しみ、自分が悪人であると思いこんで生きていく苦行を意味している。）

(http://silentburgh.activoforo.com/t51-vampiro)

(113)の例において、agrio は sufrimiennto（苦しみ）という名詞を修飾し、「つらい」という意味を表している。経験や苦しみが厳しく辛いという意味は、2.4.節で考察した amargo にもみられることである。amargo の「厳しさ」や「辛さ」への意味拡張には、amargo で表される味を持つ食品の不快な味に基づくメタファーであるとしたが、agrio にも amargo に

類似した意味が含まれるものと推測される。

3.2.5.5. 人物評価

(114) Definitivamente, la persona *agria* posee dificultad para expresar sus emociones y se manifiesta con un temperamento fuerte, usa palabras cortas y tajantes, pues son su mecanismo de defensa.

（絶対に、気難しい人は自分の感情を表現するのが難しく、強い表現で主張したり、短くて鋭い言葉を使ったり、つまりこれらは自己防衛のメカニズムなのです。）

(http://www.vanguardia.com/vida-y-estilo/galeria/143508-demasiado-empalagosa)

(115) El mendigo lisiado en su cotidiano, es un hombre *agrio* y con mal carácter, no respeta las leyes, es un gruñón y siempre anda riñendo a los niños.

（日常につかれた物乞いは、気難しい男で性格も悪く、法律は守らないし、小言屋でいつも子供たちに小言を言っている。）

(http://marvision.blogspot.jp/2006/09/cuestin-de-actitud.html)

(114)と(115)の例において agrio は人物を評価して「気難しい」ことを表している。このように agrio が人物の性質をあらわす場合も、ácido が人物の気難しい性質を表していることと類似する。これは、agrio の基本義が酸味であることから、ácido と同様に、刺激のある味に対する不快な感覚によるメタファー表現であると推測される。

これまでの考察から、agrio の意味拡張には、amargo や ácido と類似するパターンがみられることが明らかになった。ácido との類似性については、語源が agrio も ácido も同じ視覚表現で「鋭さ」を表していたことや、基本義がいずれも酸味であることから、同じような意味拡張のプロセスを辿ったものと考えられる。一方で、agrio は単に酸味だけでなく、ワインの渋味なども表す。日本語では「苦い」と「渋い」の類似性が指摘されているが（武藤: 2001）、スペイン語においても「苦味」を表す語と「渋味」を表す語との間には類似関係があると思われる。

以上の考察の結果を表にまとめると、次のように表される。

		酸っぱい	agrio
味覚	未熟の果実の渋み	×	○
	果実や酢の酸味	○	○
共感覚	嗅覚	○	○
	聴覚	×	○
	視覚	○	○
	触覚	×	×
抽象的な事物	辛辣さ	×	○
	険しさ	×	○
	つらさ	×	○
人物評価	気難しい	×	○

表１１　agrio と「酸っぱい」の意味拡張

3.2.6.　本章のまとめ

以上の考察から、スペイン語の味覚形容詞の意味拡張について次のことが明らかになった。

甘味を表す dulce は、味覚以外の感覚や事柄に意味拡張する場合、常に「心地よさ」が関わることが分かった。また、dulce が agonía（苦悩）や sufrimiento（苦しみ）などのネガティブな感覚を表す名詞とも共起して、それらの感覚が「心地よさ」を伴うことを表す。

次に、鹹味を表す salado の意味拡張は、塩が料理に味をつけるのに用いられることからのメタファー表現として、人物の性質に「面白味がある」ことを表す。一方で、dulce にみられたような共感覚表現は、嗅覚以外への拡張がみられなかった。

苦味を表す amargo は、触覚以外の全ての感覚について共感覚的比喩表現がみられ、いずれも「不快な」感覚を表すことが分かった。また amargo は、人物の性質が「不快な」ことや、「失望」や「嘆き」などの抽象名詞を修飾して「不快さ」や「苦しさ」を表す。一方で、alegría（喜び）や felicidad（幸せ）などのポジティブな感情を表す名詞と共起し、不快感と快感がないまぜになった複雑な感情を表す。

酸味を表すスペイン語の形容詞には ácido と agrio がある。ácido も agrio も果実や酢の酸味を表すが、agrio は葡萄やワインの「渋い」味が感じられることも表す。また、ácido も

agrio も触覚以外の感覚表現に共感覚的に意味拡張している。さらに、人物を評価する場合には、ácido も agrio も「気難しい」或いは「無愛想」な性質であることを指す。その他にも、ácido と agrio はいずれも批評が辛辣であるという意味を持っている。このように、両語が共通の拡張義を持つことは、ácido と agrio の語源がいずれも「鋭い」または「とがった」という視覚表現からの派生であることに起因するとみられる。両語が酸味を表すようになったのは、舌を刺激する酸の味を、鋭いものによる刺激に重ねた表現であると考えられる。

さらに、5 つの味覚形容詞全てにおいて共感覚表現への意味拡張がみられたが、「一方向性仮説」への反例が見られたのは dulce のみであった。また、dulce と amargo の意味拡張にはそれぞれ「心地よさ」と「不快さ」という身体感覚が関わっている一方で、salado や ácido、agrio の意味拡張は感覚の同時性や類似性に基づくものであると推測される。このことから、スペイン語における味覚形容詞の体系において、dulce と amargo は最も基本的な味覚であり、「快」「不快」の対立に基づいて広く意味拡張しているものと考えられる。

第４章

スペイン語味覚形容詞の

統語的特徴と意味の関係

第３章で述べたように、スペイン語の味覚形容詞には、次の例のように形容詞が名詞に前置される例と後置される例が見られる。

(116)　La piña fresca debe tener un olor *dulce* y no ser blanda ni hundirse al acto.

（新鮮なパイナップルは、甘い香りがし、触っても柔らかかったりへこんだりするものではない。）

(＝(16)再掲)

(117)　Pues no, no está enferma – respondo en alta voz recreándome en el cuerpo de Darío. Y mi mano sigue peinando su bello, *dulce* pelaje-.

（いや、彼女は病気じゃない―私はダリオの体を撫でながら大きな声で答える。そして私の手は、その美しく甘い（→柔らかい）毛並みを梳かし続ける。）

(＝(39)再掲)

(118)　… porque unas alcachofas *amargas* te fastidian todo el plato.

（… なぜなら苦いアーティーチョークは料理全体を台無しにする。）

(＝(65)再掲)

(119)　Se trata del joven Juan Carlos Rubio, quien vivió la *amarga* experiencia de la extorsión telefónica este pasado fin de semana.

（フアン・カルロス・ルビオという、先週末の電話詐欺の苦い経験をした若者が扱われている。）　(＝(75)再掲)

本章では、スペイン語味覚形容詞の限定用法と叙述用法における統語的特徴と意味の関係について考察する。第 1 章で述べたように、スペイン語の形容詞の限定用法における位置の規則性については、これまで様々な定義がなされてきた (Salvá: 1830, Bello: 1847, Hanssen: 1913, Lenz: 1925, Alarcos: 1994, DeMonte: 1999, Real Academia Española: 2011) 。しかし、名詞に前置される場合と後置される場合の形容詞の意味を明確に区分しているものは、管見の限り見当たらない。

次節では、これまでに指摘されてきた形容詞の位置の規則性に関する研究を概観し、スペイン語の味覚形容詞の統語的特徴と意味の関係について用例をもとに考察する。

4.1. スペイン語形容詞の限定用法における語順

スペイン語形容詞の限定用法における語順については、名詞に後置されるのが無標の形であるとされているが、実際には前置される場合もある。しかし、前置される場合の規則性については、明確な定義がなされていない。

Salvá (1830) は、形容詞の基本的な位置について、1) 対象に特有の或いは不可欠な性質を意味する場合には前置され、本質的でない状況を指示する場合には後置される (Suele preceder el adjetivo, cuando significa una calidad propia ó esencial del objeto, … Por el contrario se posterga comunmente el adjetivo, si denota alguna circunstancia accidental ó que no es de la esencia de la cosa…) (Salvá 1830: 124) 、2) 形容詞を本来の意味から引き離して本来の意味とは異なる或いは比喩的な意味で用いる時、形容詞は前置される (Va por lo regular delante el adjetivo, si lo arrancamos de su significacion recta, y lo usamos en una impropia ó figurada. (sic)) (Salvá 1830: 124) と定義している。

Bello (1847) では、los animales *mansos*（おとなしい動物）は動物の個別の種を指しているのに対し、las *mansas* ovejas（おとなしい羊）は羊一般を指して、羊に生来の特性として「おとなしい」とみなされると述べている。このことから、los animales *mansos* の場合、形容詞は名詞を「特殊化、具体化 (particulariza y especifica)」し、las *mansas* ovejas の場合には形容詞が名詞の意味を「明確化して説明する (desenvuelve y explica) 」とした。さらに、これらの例から形容詞の位置の規則性について、次のように説明している。

Lo más común en castellano es anteponer al sustantivo los epítetos cortos y posponerle los adjetivos especificantes, como se ve en mansas ovejas y animales mansos; pero este orden se invierte a menudo, principalmente en verso.

（カスティーリャ語で最も一般的なのは、mansas ovejas（おとなしい羊）と animales mansos（おとなしい動物）にみられるように、短い特徴形容詞 (epítetos) は名詞に前置され、特殊化形容詞は後置される；しかしこの語順は、特に詩句において、しばしば入れ替わる。）

(Bello 1847: 180)

Hanssen (1913) は、un hombre *grande*（大きい人）と un *gran* emperador（偉大な皇帝）を例にとり、el adjetivo pospuesto tiene carácter objetivo y el adjetivo antepuesto tiene carácter subjetivo（後置形容詞は客観的性質を、前置されるものは主観的性質をもつ）と説明した。またこのことから、国名から派生した形容詞のように客観的な性質を表す形容詞は一般に後置され、bueno（良い）や malo（悪い）のように主観的な評価を含むものはしばしば前置されると述べている (Hanssen 1913: 181)。

Alarcos (1994)では、前置形容詞は「名詞によって示された事実の説明的、描写的意図 (revela una intención explicativa, descriptiva, de la realidad sugerida por el sustantivo)」を表し、後置形容詞は「名詞の指示内容を制限するような特定化 (señala una especificación que restringe la referencia propia del sustantivo) を示す」と述べている。例えば、‘la *blanca* nieve（白い雪）’のように形容詞が名詞に前置される場合は、単に雪がどのようなものであるかを描写しているに過ぎないが、‘la pared *blanca*（白い壁）’のように名詞に後置される場合、言及している「壁」の種類を具体的に特定していると説明している (Alarcos 1994: 82)。しかし一方で、形容詞の前置と後置の意味は、ほとんどの場合が客観的基準よりも話者の意図によるとして、規則性が確固としたものでないことを示している。

Demonte (1999) は、常に後置される形容詞として、分類形容詞 (adjetivos relacionales) 、形容詞的過去分詞 (participios adjetivales) を挙げている。さらに、先行研究が前置と後置を「制限的」と「非制限的」、「説明」と「特殊化」、「主観」と「客観」などの区別を行っていることに対して、後置される形容詞は「新たな普通名詞を構成するために普通名詞

を結びつける表現 (caracterizamos los adjetivos posnominales como expresiones que se unen a extensiones (nombres comunes) para configurar nuevas extensiones (nuevos nombres comunes)) とし、一方で前置される形容詞は、修飾されている語の外延に影響しないで、指示対象或いは内包に作用する役割を持つ (los adjetivos prenominales en cambio son funciones que actúan sobre la referencia o intensión sin que su aplicación afecte a la extensión del término modificado) という特徴があることを指摘している (Demonte 1999: 192)。

さらに、それまでの研究にみられたような「後置形容詞は制限的で分類的」であり、「前置形容詞は非制限的」であるというような対立は、限定的な表現においてのみ成立し、非限定的な表現においては前置も後置も特性の対立の要因となると説明している。

また、*Gramática descriptiva de la lengua española* (1999) に続いて発行された Real Academia Española による文法書 *Nueva gramática de la lengua española* (Real Academia Española: 2011) では、「後置形が無標である。…品質形容詞、分類形容詞、叙述形容詞など制限的な形容詞は後置され、特徴形容詞 (adjetivo epíteto)や副詞的な形容詞など非制限的なものは後置される。(el español se caracteriza por elegir la situación posnominal del adjetivo como POSICIÓN NO MARCADA. … suelen ocupar la posición pospuesta los adjetivos RESTRICTIVOS y la antepuesta, los NO RESTRICTIVOS.)」(Real Academia Española 2011: 990) と説明されている。

以上の先行研究では、形容詞の位置についての一般的な規則性を示すことを試みているが、本研究で扱っている味覚形容詞の位置が前置と後置でどのような意味の違いを生じるのかについては扱われていない。したがって、用例を分析することによって前置と後置による意味の差を考察する必要があると思われる。

4.2. スペイン語味覚形容詞の限定用法

以上の先行研究を踏まえて、本節ではスペイン語の味覚形容詞について、限定用法における名詞との位置関係と意味について考察する。

4.2.1.　dulce の位置と意味の関係

第３章において、甘味を表す味覚形容詞 dulce は他の味覚形容詞と比べて意味拡張が特に進んでいることを指摘した。そこで、dulce の位置が意味にどのような影響を与えているのかを調査した。

3.1.2.節における考察で、dulce の意味拡張には「心地よさ」という身体感覚が関わっており、それは本来心地よいと感じられないはずのネガティブな感覚や感情を表す場合にまでみられることが分かった。

		甘い	dulce
味覚	糖分の感覚	○	○
	甘味を表さない	○	○
共感覚	嗅覚	○	○
	聴覚	○	○
	視覚	○	○
	触覚	○	○
人物評価	他者に対して厳しさが欠如している	○	×
	優しさ、穏やかさ	×	○
抽象的な物事	男女の仲がよく幸せなさま	○	○
	楽しい時間や状況	×	○
	ネガティブな心的感覚	×	○
	評価基準が厳格でない	○	×
	物事の機能の衰えているさま	○	×
	株価の動きが鈍い	○	×

表１２　スペイン語の味覚形容詞 dulce と日本語の「甘い」の拡張義（＝表６再掲）

次に、dulce が名詞に前置される場合と後置される場合とで、どのような意味の相違を生じるのかをみてみよう。

(120)　*dulce* paseo ‘sweet walk’　(心地よい散歩)

(121)　*dulce* viaje ‘sweet journey’　(懐かしい旅行)

(120)や(121)は dulce が前置される例であるが、dulce には既に味覚の「甘さ」という意味はなく、「甘さ」を感じたときの心地よい感覚を、散歩や旅行をした時、或いはそれらを後に回想した時に感じている場合に dulce を使用していると考えられる。

ここで興味深いことは、このような場合 dulce は名詞に前置される例が多いということである。例えば、(121)の場合、前置と後置を入れ替えて例を検索してみると、後置の例は明らかに前置よりも少なく、また後置される場合の dulce の意味には「懐かしい」といった主観的な意味ではなく、「(チョコレート工場を見学した) 甘い旅行」のように、味覚の「甘さ」をも含む客観的な要素が含まれる。このことからも、名詞で表される行為や事物、感覚・感情を主観的に解釈している場合に、形容詞は名詞に前置されると考えられる。

以上の考察結果を確認するため、スペイン・マドリード出身の男性 (50 代) に、「*dulce* melón と melón *dulce* には意味の違いがあるのか」「違うとすればどのように違うのか」を尋ねたところ、次のような例を示してその違いを説明してくれた。

(122) Quiero un melón *dulce*. 'I want a <u>sweet</u> melon.'
(私は<u>甘い</u>メロンが欲しい。)

(123) Prueba el *dulce* melón. 'Try the <u>sweet</u> melon.'
(その<u>甘い</u>メロンを食べてごらん。)

インフォーマントによれば、(122)と(123)の違いは、そのメロンを実際に食べたことがあるかどうかに起因するという。(122)の場合は、「メロンには色々あるが、その中で『甘い』ものが欲しい」ということを表し、(123)の場合は、「そのメロンが『甘い』ことを、既に食べて知っている」ことを意味するという。ここで注目したいことは、インフォーマントが、(122)の dulce はメロンがどのようなメロンであるのかを分類しているのに対し、(122)のように dulce が名詞に前置される場合は、実際の体験に基づく感覚を表すという違いを自ら認識しているということである。

以上の回答からも、発話主体がメロンに対して主観的に dulce という味覚を把握する場合に、dulce が名詞に前置されていると考えられる。

このような用法に加えて dulce には、alegría (喜び) のような感情を表す名詞と共起して、プラスの評価を表す例がみられる。さらに、その名詞が agonía (苦しみ) や dolor (痛

み）などのネガティブな感覚・感情を表す場合でも、dulce が共起して、プラスの評価を表す例がみられる。日本語で「甘い苦悩」「甘い痛み」といえば、ほとんどが恋愛感情を表すが、スペイン語の場合は、次の例にみられるように、恋愛感情に限られるわけではないようである。

(124) Si en cambio les interesa conocer los motivos personales por los cuales comencé a escribir este blog, las razones por las cuales continué escribiendo y los obstáculos que están llevando a este mismo blog hacia una *dulce* agonía, entonces los invito a quedarse.
（反対に、私がこのブログを書き始めた理由や書き続けてきた理由、そしてこのブログを甘い苦悩へと変えつつある障害について、もし関心がおありなら、この場に残って頂ければと思います。）
(http://www.ciencialimada.com.ar/2011/06/la-dulce-agonia-de-un-blog-de-ciencia.html)

(124)の例は、科学に関する記事が載せられているブログから採用したものである。ここでは、書き手はブログを書くのをやめると宣言しており、その理由を、このブログが自分にとって “*dulce* agonía”になりつつあるからだと説明している。なぜ *dulce* agonía になりつつあるのかは、その後の文章に記されているのだが、ここで彼が agonía に挙げているのは、ブログを書く時間がないこと、これが出版物や論文でなく単なるブログに過ぎないことなどであり、これらがブログを書くことを苦痛にしているのだという。しかし一方で、それらの苦しみを dulce と捉えているのは、そのブログの作成者が「書く」ということを目的にブログを書き始め、書く度に記事のテーマについて調べ物をし、そのことによって科学の知識を増やすことができたからであるという。ここでも dulce の他の意味拡張の場合にみたように、「心地よさ」が関係していると言えるだろう。

さらにこの場合、dulce は名詞に前置される場合が圧倒的に多い。ここでは、書き手が事態を主観的に把握し、agonía が感情を、dulce が心的感覚を表している。 (125)の例の場合、時間を割いてブログを作成しても、それがブログという媒体であり、読者の反応が分かりにくいことに対する感情、また、書くことを楽しみ、新しい知識を得ることを喜びと捉えることは、作成者自身の感覚であり、一般化できるものではない。したがって、このように話し手（或いは書き手）が臨場的・体験的に感覚・感情を把握する場合

には、味覚形容詞が名詞に前置されると言えるだろう。

このことは、次のように dulce が他の形容詞と並置される場合にも同様であると考えられる。

(125) amarga y *dulce* agonía (苦く甘い苦悩)

(126) tierno y *dulce* dolor (柔らかく甘い痛み)

以上の考察を基に、前置も後置も可能なスペイン語の味覚形容詞の語順選択の基準として新たに次の仮説を提示したい。

(127) スペイン語の味覚形容詞は、話者が臨場的・体験的に事態把握をする場合には、名詞に前置される。

以上の考察から、dulce が限定用法で用いられる場合、その語順が意味に大きく関わることが分かった。このような統語的特徴は、味覚形容詞の叙述用法にもみられる。次に、dulce が叙述用法で用いられる例をみてみよう。

4.3. スペイン語の味覚形容詞 dulce の叙述用法

スペイン語の味覚形容詞 dulce の叙述用法には、次のようなものがある。

(128) El azúcar es *dulce*. ‘The sugar is sweet.’

(129) Esta manzana es *dulce* para mí. ‘This apple is sweet for me.’

(130) María es *dulce* conmigo. ‘Maria is sweet to me.’

(131) Me es *dulce* la agonía. ‘The suffering is sweet to me.’

(128)、(129)では、*dulce* は基本義である味覚を表している。一方、(130)では人物の性質、(131)では人の心的感覚を意味している。(128)～(131)に対応する日本語は次のようになる。

(128’) 砂糖は甘い。

(129’) この林檎は私には甘い。

(130’) マリアは私に（対して）甘い。

(131’) 私にとって苦悩は ?甘い／甘美だ。

(128’)と(129’)の「甘い」は、主語が事物で、スペイン語と同様、基本義の味覚を表している。(130’)の「甘い」は、(130)の *dulce* が表す「優しい」の意味とは異なり、「厳しさに欠ける」という意味が生じる。また、(131)は「甘い」ではなく、「甘美な」とする方が自然に感じられる。以上のことから、スペイン語の味覚形容詞の意味拡張には構文が大きく関与していると考えられる。

4.3.1. 構文と主観性

八木 (2011) は、英語の叙述形容詞が用いられる統語形式について、形容詞が持つ意味（の一部）が英語の中で用意されている統語構造と結びついているとの立場から、ある一定の意味がある特定の統語形式に対応すると述べている。また、形容詞の多義性より、語義によって取り得る統語構造が異なると指摘している。以上のことから、統語構造が意味特徴の反映として目に見えると考えると、統語構造の可能性はそれぞれの語義の違いの表れであると主張する。

八木によれば、英語の叙述形容詞は基本的には次の 7 つの統語形式で用いられるという。

(132) a. it is Adj. that (It is apparent that John likes Mary.)

b. NP is Adj. that (I am sure you are sick.)

c. it is Adj. to do (It is dangerous to swim across the river.)

d. NP is Adj. to do (John is sure to come.)

e. NP is Adj. (Mary is beautiful.)

f. NP is Adj. prep. (The castle is open to the public.)

g. NP is Adj. *wh*-clause (I’m uncertain when I can finish the job.)

（八木 2011: 152）

八木は(133)の各統語形式それぞれを「パターン」と呼び、ひとつひとつの形容詞は、それぞれの意味特徴によって 7 つのパターンのいずれをとるかが決定されるとし、個々の形容詞が(133)のパターンのうちのいずれをとるかによって、形容詞の意味特徴を次のように分類した。

(133) a. 心的態度 (attitude)
b. 判断 (judgment)
c. 記述 (description)
d. 感情 (emotion) （八木 2011: 153）

さらに八木は、(133)のように分類された形容詞は、それぞれの意味的特徴と統語的特徴の対応によってさらに下位区分されるとして、次のような同じ心的態度の形容詞の例を挙げて説明している。

(134) a. It is apparent that John likes Mary.
b. *I am apparent that John likes Mary.
(135) a. *It is afraid it will rain.
b. I'm afraid it will rain.

八木によれば、apparent が it を、afraid が人を主語にとるのは、心的態度の形容詞である apparent と afraid の意味特徴の相違によるものであるという。apparent が「だれにでも共通する心的態度」を表して公的 (public) であるのに対して、afraid の意味は「個人的な心的態度」を表す私的 (private) なものであるとし、apparent のとる public なパターンを「客観性を帯びたパターン」、afraid のとる private なパターンを「主観性を帯びたパターン」と呼んでいる。

さらに、心的態度の形容詞と判断の形容詞については、主観的パターンと客観的パターンの両方が構造として保障されているのに対し、叙述形容詞と感情形容詞には、客観・主観の区別を行う構造的な区別が存在しないことを指摘した。

一方日本語では、仁田(2010) が「ケムタイ」や「重イ」、「ウルサイ」「ウットウシイ」などの形容詞が、外界の物理的な状態を意味する場合と、主観的な心的状態や内的感覚

を意味する場合との多義性を有すると述べている。そして、それらの意味の違いが前者の場合には一項述語として機能し、後者では二項述語として働くことに現れていると指摘している。

(136)　部屋ハケムタイ。

(137)　私ハ父ガケムタイ。

（仁田 2010:94）

(136)では、形容詞「ケムタイ」は「部屋ハ」のみをとる一項述語として機能し、部屋の中の煙が多いという外界の物理的な状態のあり方を意味している。一方で(137)では、「ケムタイ」は「私ハ」と「父ガ」の二つをとる二項述語として働き、父に対して近づきにくいという心的状態を意味するようになっている。このことは、話者の心的状態や内的感覚を表す場合には、日本語でも異なる構文が用いられることを示している。

以上の英語と日本語における指摘からも明らかなように、形容詞の意味拡張のプロセスを考える際には、構文と意味との関係を考慮することが重要であると思われる。

4.3.2.　スペイン語の味覚形容詞の叙述用法

以上の先行研究に基づいて、主観性という観点から、スペイン語の味覚形容詞の叙述用法について考察してみたい。

(138)　El pastel es *dulce*.

（その菓子は甘い。）＜味覚＞

(139)　Para mí este pastel es *dulce*.

（私にとってこの菓子は甘い。）＜話し手の評価＞

(140)　María es *dulce* conmigo.（＝(130)再掲）

（マリアは私に対して甘い（→優しい）。）＜対象との関係＞

(141) a. Me es *dulce* el sufrimiento.

（その苦しみは私にとって甘い（→甘美だ）。）＜心的感覚＞

b. Me es *dulce* la agonía.

（その苦悩は私にとって甘い（→甘美だ）。）＜心的感覚＞

c. Me es *dulce* el dolor.

（その痛みは私にとって甘い（→甘美だ）。）

(138)～(141)は、dulce が ser 動詞と共起する構文を示したものである。(138)は dulce の味覚としての本来の用法を表す無標の構文である。 (139)では、話者の関与を表す前置詞句 para mí が付くことで、話し手の este pastel に対する評価を表している。(140)は、主語との関係を表す前置詞 con を伴うことで、主語と前置詞格人称代名詞で表された対象との関係を述べている。ここで注目したいことは、(141a)～(141c)では主語が抽象名詞であり、経験者である話し手が間接目的格をとる主語後置構文となっており、 (138)～(140)と比べて構文に著しい違いがみられることである。この時、dulce は「甘い」というよりも「甘美な」といった意味になり、心的感覚を表す。このような主語が dulce と共起する時、主語後置構文になり、para mí ではなく、間接目的格 me をとるのはなぜであろうか。

この点について、マドリード出身のスペイン人男性に “para mí es dulce” と “me es dulce” の意味の違いを尋ねたところ、“para mí es dulce” は、話し手の opinión（意見） であり、 “me es dulce” は話し手の sentimiento（感覚） を表すとの回答であった。また、para mí es 構文に el sufrimiento や la agonía などの抽象名詞の主語を当てはめると、言えなくはないものの “suena raro（おかしく聞こえる）” いう。一方で、me es 構文の主語においては、抽象名詞を置いても問題がないとの回答であった。これに対し、me es dulce 構文の主語に人物や食べ物の名前など具象物を表す名詞を置くと、主語が食べ物の場合は “no se dice（言わない）” で、人物の場合は “suena demasiado poético（あまりに詩的に聞こえる）” ということである。

この事実から、(141a)～(141c)のような me es dulce 構文は、主語に対する話し手の心的感覚を表す構文であるといえるだろう。また、第 4.2.1 節で指摘したように、dulce が限定用法の場合、la agonía や el sufrimiento などの心的状態や内的感覚を表す抽象名詞に前置されるという統語的特徴を示す。さらに、叙述用法においても、(141a)～(141c)のような有標の構文をとることが明らかになった。

これまでの考察から、心的感覚を表す名詞においては、限定用法の場合も叙述用法の場合も、有標の形式をとるといえるだろう。この場合、dulce の意味は味覚からはかけ離れた、詩的ともいえる意味を生じることになる。

最後に、その他の基本味を表す形容詞の叙述用法についても触れておきたい。スペイン語の基本四味を表す形容詞は、dulce の他に salado, amargo, agrio, ácido がある。これらの味覚形容詞を、me es 構文の述語に当てはめ、スペイン語のコーパス Corpus del Español で用例を検索し、どのような名詞が主語として現れるのかを、主語を 3 人称に限って調査した。

その結果、この構文に味覚形容詞が現れた例は、全部で 51 例[10]であった。最も多くみられたのは dulce の例で、次いで amargo が多かった[11]。それ以外の形容詞については、agrio が 1 例のみみられたが、ácido, salado の例はみられなかった。

(142) Voy a morir; y **me es dulce** morir, vida mía, por tu satisfacción y tu paz.
（私は死ぬ; そして私にとって、愛しい人よ、君の満足と平和のために死ぬことは甘美である。）
(Castelar, Emilio. *El suspiro del moro: Leyendas tradiciones, historias referentes a la conquista de Granada*)

(143) La vida **me es amarga**, y el aliento, que el corazón respira, sólo demuestra mi ira, mi furia, mi dolor y mi tormento.
（人生は私にとって苦い、そして呼吸は、心は呼吸し、ただ私の激しい怒り、激しい感情の高ぶりや私の痛み、私の苦しみを表すだけなのだ。）
(Nava Álvarez, Gaspar María de, Noroña, Conde de. *Poesías*)

これら 51 例の中で最も多くみられたのは、(142)のような muerte (death) や morir (to die) などの「死」が主語となる例であった。ちなみに、これらの「死」が主語になる例は全て dulce で表されており、本来ネガティブな意味を持つはずの muerte や morir が dulce によってポジティブなものとして捉えられている。

---

[10] それぞれの具体例については、章末の Anexo において例を挙げる。
[11] 見つかった例はいずれも 1500 年代から 1800 年代のものであった。CREA による検索では、間接目的格人称代名詞を 1 人称単数 me、ser 動詞を直説法現在 3 人称単数形 es に限定して検索したところ、見つかった例は 1 件のみであった。それゆえ現在では me es dulce / amargo のような味覚形容詞の構文は使用が少なくなっているのではないかと思われたが、Google で同じ構文を検索した結果、260 件以上の例がみられた。このことから、構文自体の使用頻度の問題ではなく、詩の形式などが関わるかと思われるが、詳しい考察は今後の課題としたい。

以上の他に、vida (life) や memoria (memory) などの抽象名詞が主語となる例はみられたが、具体的な食品や人物が主語となる例は 1 例もみられなかった。

ここまでの考察では、スペイン語の基本味を表す味覚形容詞の意味拡張について、それぞれの形容詞の叙述用法における用例をコーパスに基づいて調査し、dulce と amargo が最も意味拡張が進んでいることを明らかにした。さらに、主体が間接目的語で表される me es 構文における味覚形容詞とその主語となる名詞を分析したところ、sufrimiento, agonía, dolor などの主体の感覚を表す抽象名詞がこの構文をとることが明らかになった。以上の考察の結果、主体が間接目的語 me で表される me es 構文は para mí es 構文よりも、主観性を帯びた構文であると考えられる。

4.4. 本章のまとめ

本章では、スペイン語の味覚形容詞の限定用法における位置と意味の関係と、叙述用法における構文と意味の関係について考察した。その結果、第 1 に限定用法においては、前置も後置も可能なスペイン語の味覚形容詞の語順選択の基準として、話者が臨場的・体験的に事態把握をする場合には、名詞に前置されるという仮説を提示した。第 2 に、叙述用法においては内的感覚を表す抽象名詞と共起する場合には、主語後置構文という有標の形式をとることが明らかになった。このことから、me es 構文は para mí es 構文よりも主体が事態の当事者として体験的に事態把握する、主観性を帯びた構文であると考えられる。したがって、agonía, sufrimiento などの心的感覚を表す名詞がこれらの構文と共起するのは必然的であると言えるだろう。

Anexo

A. dulce が me es 構文に現れる例

1	Ruego á Dios que me reduzca á tanta mortificacion que **me sea así dulce** y sabroso el pensar en padecer por Cristo lo que conozco que Cristo padeció por mí, …
2	… cuanto **me es dulce** y sabrosa la consideracion de lo que Cristo ha padecido por mí, conociendo que de su padecer resulta mi gozar en la presente vida en parte y en la vida eterna entera y cumplidamente.
3	Voy a morir; y **me es dulce** morir, vida mía, por tu satisfacción y tu paz.
4	La tristeza **me es dulce**, y aquí busco, en mustia soledad, mi bien supremo.
5	Grandemente me deleita el deseo grande de ti, y **no menos me es dulce** tu memoria.
6	Como la tomé por vía de conversación con V. md. y esta **me es tan dulce**, me engolosiné demasiado.
7	Muestra el oculto bien do está mi daño, que **dulce me es** morir en tal engaño.
8	¡Oh cuerdo ecceso! **Dulce me es** ser travieso, cobrado un tal amigo; dulce perder el seso.
9	De cuyas hazañas y maravillas en este mismo lugar, cantó un día mi querido Sireno, en el tiempo que **fue para mí tan dulce**, …
10	¡ Cristianos, **muy dulce me es** el fuego!
11	O quán **dulce me es** oýrte; de gozo me deshago.
12	Calle su paternidad y déjeme, que con esto evacuo un pésimo humor que **me es amargo** y molesto.
13	¡Oh sobre todas venturosa el hora que os di mi libertad, dichoso el cuándo me llamé vuestro, pues **tan dulce y cara me fue** y será vuestra hermosa cara!
14	Por grande que sea nuestra desgracia, vuestra compañía, amado Eusebio, la hará perder todo el horror; con vos **me será dulce** el soportarla.
15	**Mas dulce vida me será** la muerte que ver (¡ ay, cruda estrella!) con mis ojos la tierna mano de Lucira azida al marital dominio, …
16	Nunca la podré aborrecer tanto que desee verla fea: tan **dulce me será** siempre la memoria de su hermosura.
17	… las fuentes de mis ojos se han agotado ya; no tengo que llorar, como no llore mi

	sangre; y esto **me sería mucho más dulce** que verme apartada del que me ha prodigado sus amores.
18	… no encuentro en el corazón más que lágrimas... lágrimas que ahogan hasta las bendiciones que **me sería dulce** repetiros.
19	y en caso que morir uviesse desta causa, la muerte **me sería dulce** y muy blanda.
20	Que mucho más **me sería dulce** ser esclava y prisionera en su palacio que reina en la gran Citia ni emperatriz en Tartaria.
21	Calla, calla por Dios; **dulce me fuera**, Más que vivir así, la muerte misma;
22	¡Ay, **dulce me fuera** la muerte entonces!
23	Que más **dulce me fuera** y más loable morir a manos del contrario airado, que no con retirada miserable venir a tan soez y bajo estado, …
24	… **dulce me ha sido** el verte, el oírte y tocarte, y que gustado hayas sido del alma en coyuntura que derribas y acabas mi locura
25	sus palabras **me eran dulces** como una lejana música, más ardientes que un volcán y más que una lanza agudas, …
26	¿ Nuestra desgraciada voz **te es a ti dulce**?
27	los actos de unión **te son fáciles, dulces** y satisfactorios, …
28	**Dulce te fue** la partida al tu josep reuellada porque seria conseruada a sancto ninyo la vida delectable la venida
29	… y darte otro corazón con el cual **te fuese dulce** lo que antes era amargo, y te amargase lo que antes era dulce, para que así pudieses perseverar en el bien.
30	**dulce le es** la ponçoña, deleitable y sabrosa su amargura mortífera;
31	… no temo de la sangre que dél vierte Angélica, que **le es dulce** y amable, pues lo que se desea y que se espera, por fuerza ha de ser bello aunque no quiera.
32	… ni otra cosa otro tiempo dulce y cara **le es dulce** o cara, sino el llanto solo.
33	Mandóle en esto Apolo que a Diana, dejando el canto de Mavorte airado, cantase al son que Píndaro ha cantado: tanto **le es dulce** el nombre de su hermana.
34	Amor ya no le dexa atormentar su amada con silencio: que **le es amargo** asencio ver el mal de su esposa, …
35	All omne fornaguero todo pan **le es dulce**. non canssara passando fasta en la fin.

36	… y el adivinarse amada en el secreto de un corazón puro - que la rehabilitaba a sus propios ojos con aquel culto silencioso e ideal -, **le era incomparablemente más dulce**, más halagüeño, que el oír las protestas elocuentes de aquel mismo amor confesado y correspondido abiertamente.
37	Por ésta se fueron los santos a los desiertos, por ésta dejan los religiosos el mundo, por ésta **le era más dulce** al papa Gregorio la pobrecilla celda del monasterio que la silla del sumo pontificado.
38	Él mismo ordenó, como saboreándose en ellos, cuán **dulce le fue** el padecer, …

B. amargo が me es 構文に現れる例

1	La vida me es amarga, y el aliento, que el corazón respira, 85 sólo demuestra mi ira, mi furia, mi dolor y mi tormento.
2	… como **me es ahora amarga** su memoria.
3	Ca todo otro amor **me es amargo**.
4	Amigo y querido mío: Ya nada tengo que añadir de avisado, sino asegurar a usted ... cuya muerte **me ha sido muy amarga**, porque no le dejé hasta que dio la última respiración, …
5	O desesperada yo quanto la mengua delas tales cosas **me son amargas** de pensar.
6	… y para que **te sea tanto más amarga** la muerte, cuanto era más dulce la vida?
7	Hermosa Filis, siempre yo **te sea amargo** al gusto más que la retama, y de ti despojado yo me vea, cual queda el tronco de su verde rama, …
8	… y de poner su vista y su atención en lo que dicen y en lo que responder se les debe, que **le es amarga** molestia.
9	Esa reconvención **le era más amarga** todavía que las anteriores palabras de Florencia.
10	… y que ansí le convenía a ella perder la esperança de jamás verlo; lo qual **le era más amargo** que la mesma muerte.
11	Y porque David, aunque en algún tiempo pecó, otro lloró, y **le fue muy más amargo** el lloro que sabroso el pecado, y tuvo interior hambre de la virtud y gracia del Señor, …

12	… o, si decimos, la tienda y el mercado, o (será mejor decir) el tesoro abierto y liberal de todo lo que **nos es necesario, útil y dulce**, así en lo próspero como en lo adverso, así en la vida como en la muerte también, …

C. agrio が me es 構文に現れる例

1	Yo haré como **te sean agrios** y que sientas mi acedía con su dentera y resabios.

第５章

基本味の日西対照

―プロトタイプ的観点から―

近年では、味覚の生理学的研究において、これまで「甘味」「鹹味」「苦味」「酸味」の４つであるとされてきた基本味の分類に、新たに「旨味」が独立した味として存在することが生理学的な研究から証明された（柏柳: 2006）。「旨味」は、日本語では古くから他の基本四味とは独立した味として存在していたが、欧米では「旨味」は基本四味から構成される複合的な味であると考えられてきた。従って、欧米には「旨味」を個別に表す表現がなく、新たに証明された「旨味」はアルファベットで “umami” と表記される。現在では、前述の四味に「旨味」を加えた五味が基本味であるとされている（柏柳: 2006, 山野: 2009）。

本章では、スペイン人がどのような食べ物を基本味と捉えているのかをプロトタイプ的観点から考察し、スペイン人と日本人の五味の捉え方にどのような類似点と共通点が見られるのかを考察する。

そのため、まず 2012 年 3 月に、スペイン、マドリード州、アルカラ・デ・エナーレス市にあるアルカラ大学シスネロスカレッジの学生 23 人を対象に、スペイン語の基本味を表す味覚形容詞について、以下の目的でアンケート調査[15]を行った。

① スペイン語の味覚形容詞がそれぞれどのような食品を指して使われているのかを調べる。

② 日本語で基本味を表す形容詞が用いられる場面で、スペイン人がどのような味覚表現を用いるのかを調べ、日本語と比較する。

次に、アンケートの結果を基に、スペイン人と日本人の基本味を表す食品のプロトタ

[15] アンケートについては、章末の Anexo を参照されたい。

イプを比較対照する。

5.1.　甘味

最初に、スペイン人がどのようなものを dulce（甘い）と感じているのかを調べるため、dulce から連想される食品を挙げてもらった（複数回答可）ところ、次の表　.のような回答が得られた。

回答でもっと多かったのは、pasteles（お菓子）と chocolate（チョコレート）であった。いずれも糖分を含む加工品であり、お菓子やチョコレートの甘味の元となっている azúcar（砂糖）と回答したのは 23 人中 4 人だけであったことは興味深い。その他に回答が多かったのは、gominolas / chucherías（グミ）、helados（アイスクリーム）、piña（パイナップル）であったが、piña 以外は加工品であった。また、caramelos（キャンディー）、postres（デザート類）、bollos（菓子パン）、donuts（ドーナツ）も糖分を含む加工食品であり、全回答のうち 8 割近くが菓子類を挙げていることになる。

また少数ではあったが、vino（ワイン）や Licor43（リコール 43：リキュールの商標）といった酒類の回答もあった。Licor43 は糖度の高いリキュールであるが、vino は必ずしも糖度の高いものとは限らない。おそらく、vino dulce（スウィートワイン：葡萄を干してから絞るため糖分が凝縮されている）を連想したものと推測される。

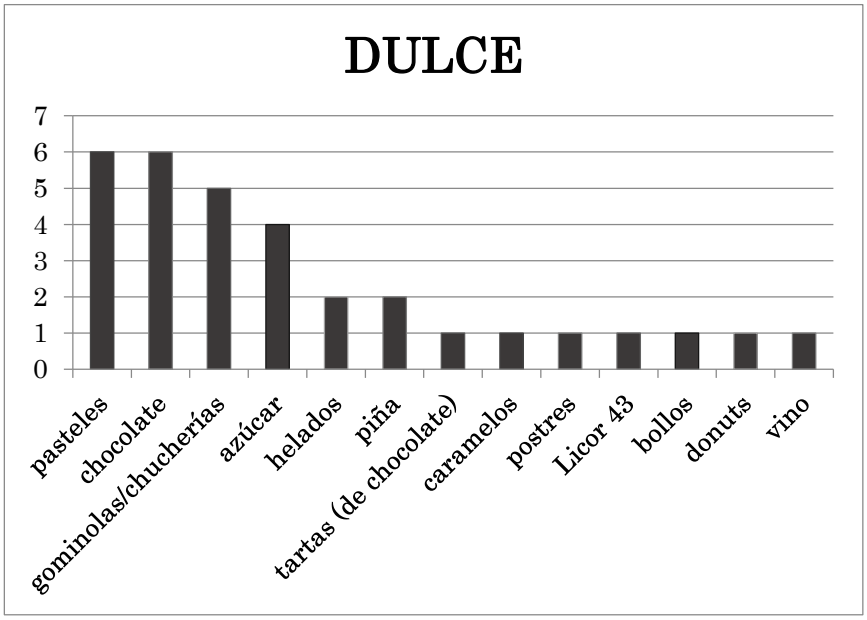


表１３　dulce から連想される食品

以上の回答から、スペイン人にとって「菓子類」が dulce から連想される最も身近な食べ物であると考えられる。従って、スペイン人にとって dulce と感じられる食品のプロトタイプは日本人と同様、「菓子類」であるといえるだろう。

一方、日本人は「菓子類」の他に、熟した果物や野菜を食べた時にも味覚形容詞「甘い」を使用する。

(143)　平地のみかん畑、自分で選んだもぎたての甘いみかんをパクリ。

(http://www.barifuri.com/tourcenter/hassy_report/iseshima/09_naize.html)

(144)　キャベツが甘い！！

(http://www.suntory.co.jp/wine/recipe/detail/popup182.html)

このような場合、スペイン人はどのような形容詞を使うのかを調べるため、以下のような状況を設定した。

① 熟した果物を食べた時に、 ¡Qué + adjetivo（形容詞）！（なんて～んだろう！）という感嘆文の形容詞の部分を空欄にし、当てはまると思う形容詞を選択肢の中から選んでもらう。

② 新鮮な野菜を食べた時に、¡ Qué + adjetivo（形容詞）！（なんて～んだろう！）という感嘆文の形容詞の部分を空欄にし、当てはまると思う形容詞を選択肢の中から選んでもらう。

また、それぞれの設問において、rico（おいしい）、dulce（甘い）、bueno（良い / おいしい）、cualquiera de las tres（3 つのうちいずれもあてはまる）、más de una（1 つ以上あてはまるものがある）、ninguna（1 つもない）の 6 つの選択肢を用意し、それぞれ選択した理由を書いてもらった。まずは①の「熟した果物を食べた時に使用する形容詞」についての回答をみてみよう。

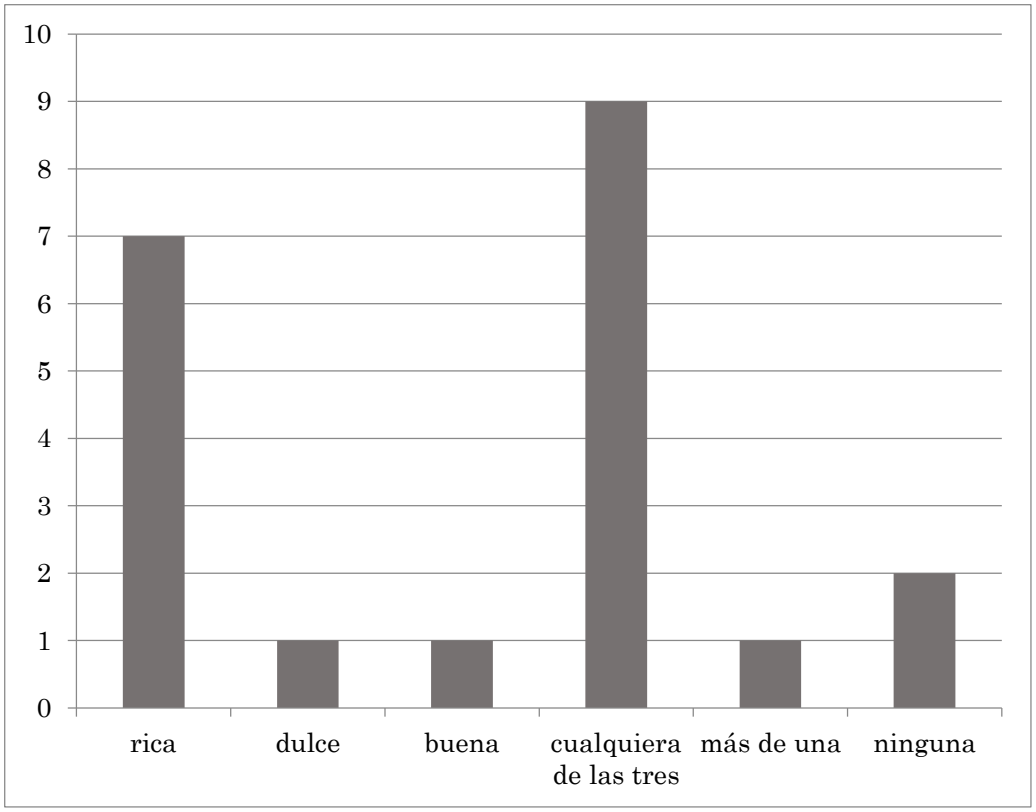


表１４　熟した果実の味を表す形容詞

表１４において明らかなように、最も多かった形容詞は rica（おいしい）であった。その理由としては、Porque es la expresión más utilizada.（最もよく使われる表現だから。）や Porque es lo más común, lo que se suele decir.（最も一般的でよく言われることであるから。）のような回答がほとんどであった。また、Porque indica que está sabrosa.（（果実が）おいしいことを示すから。）という回答も 1 件みられ、熟した果実の味を「おいしい」と表現していることが分かる。

次に、buena（良い / おいしい）と dulce（甘い）という回答も 1 つずつみられた。buena を選んだ理由については、Porque indica que está en buenas condiciones. （良い状態にあるということを示すから。）、Es una forma de expresar más adecuada.（より適した表現方法である。）という意見が挙げられていた。これは、果物は熟した具合や鮮度などその状態も味に大きな影響を及ぼすことが関わるためではないかと考えられる。一方で、dulce を選んだ理由については回答が得られなかった。

また、6 つの選択肢の中で最も多かった回答は、cualquiera de las tres（3 つのうちのいずれも当てはまる）であった。さらにこの選択肢を選んだ場合、buena, rica, dulce の 3 つ

のうちで最も適切だと思われる表現を尋ねたところ、最も適切と思われるものとして最も多く挙げられたのは buena であった。その理由としては、Porque puede contener las otras dos.（他の 2 つを含みうるから。）が挙げられたが、理由を挙げたのはこの 1 件のみであった。また、dulce が最も適切という回答も 1 件みられたが、その理由を La fruta madura es dulce para todos. Rico y bueno es una opinión.（熟した果物は誰にとっても甘い。rico や bueno は意見だから。）と説明しており、この場合の dulce がより客観的な果物の性質を表すのに対し、rico や bueno はあくまで主観的な意見であり個人差があるため、最も適切な表現であるとは判断できないとしたと考えられる。

また、適切なものが 1 つ以上あるという回答の場合、rica と buena の 2 つが適切で、その理由を、Porque es lo que más habitualmente se usa.（習慣的にもっともよく使われるから。）としている。以上のアンケート結果から、熟した果実を食べた時に、日本人は「甘い」を、スペイン人は rico または bueno という形容詞を使うのがプロトタイプであると考えられる。

一方、日本人は新鮮な野菜にも(145)に挙げた例のように、「甘い」という形容詞を用いる。次表は、スペイン人に新鮮な野菜を食べたときにどのような形容詞を使用するかを聞いたアンケート結果である。

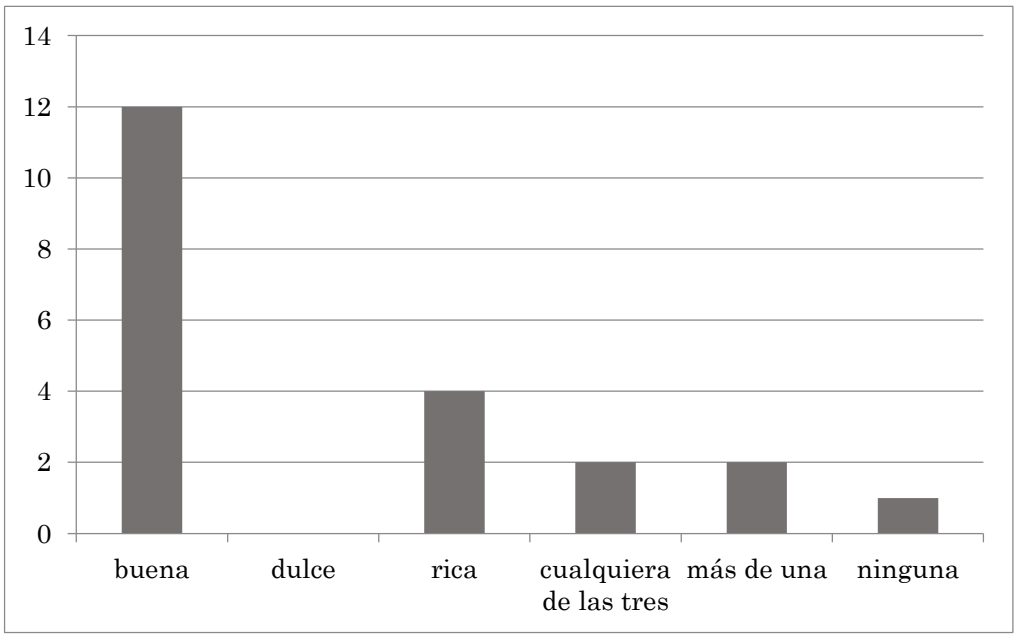


表１５　野菜の味を表す形容詞

表１５にみられるように、新鮮な野菜の味を表す形容詞として最も適切とされたのは buena（良い）であった。その理由としては、Es la forma de expresar más adecuada.（最も適切な表現方法である。）や Porque es la que más se usa.（最も使われているから。）、Porque indica que la verdura está en buen estado y es lo que digo.（野菜が良い状態であることを表しており、私が使う言葉だから。）など、buena がより一般的な表現であることを挙げたものが多かった。また、La verdura fresca es buena para nosotros.（新鮮な野菜は私たちにとって良いものであるから。）という回答もあった。このような回答が得られたのは、野菜は体に良い (buena) ことが、味の良い (buena) ことへとメトニミー的に転移しているという可能性が考えられるだろう。

また、3 つのうちいずれも適切であると回答した人は、中でも特に buena が最適であると回答した。その理由を Las dos son opiniones adecuadas y son adjetivos sinónimos pero uso más buena.（dulce も rica も適切な意見で類義の形容詞であるが、私は buena をよく使う。）としている。また、1 つ以上当てはまるものがあると回答した人は 2 名いたが、2 名とも rica と buena を適切な形容詞とした。しかし、どちらがより適当かという設問に対しては、1 名は rica と答えたのに対し、もう 1 名は buena と答えた。従って、野菜の味を表す場合、rica と buena がいずれもよく使われる語であると考えられる。

さらに、選択肢の中で最も不適切な形容詞を選んでもらったところ、回答のあった人は全員が dulce（甘い）を挙げていた。その理由としては、Porque normalmente la verdura fresca no es dulce.（普通新鮮な野菜は甘くないから。）や Porque no corresponde con un sabor.（（野菜の）味と一致しないから。）が挙げられていたことから、日本人が新鮮な野菜に甘味を感じ、それを「甘い」と表現するのに対し、スペイン人は野菜には甘味を感じていないということが言えるだろう。

以上の考察の結果、スペイン人が甘いと感じる食品のプロトタイプとしてはチョコレートやグミなどの菓子類であるということが明らかになった。また、日本人が「熟した果実」や「野菜」を食べた時にも「甘い」と表現するのに対し、スペイン人は食べたものがおいしいかどうかを表すのが一般的で、基本味を表す形容詞はほとんど使われないことが分かった。

5.2.　鹹味

次に、salado からどのような食品を連想されるのかを聞いてみたところ、表　のような結果が得られた。

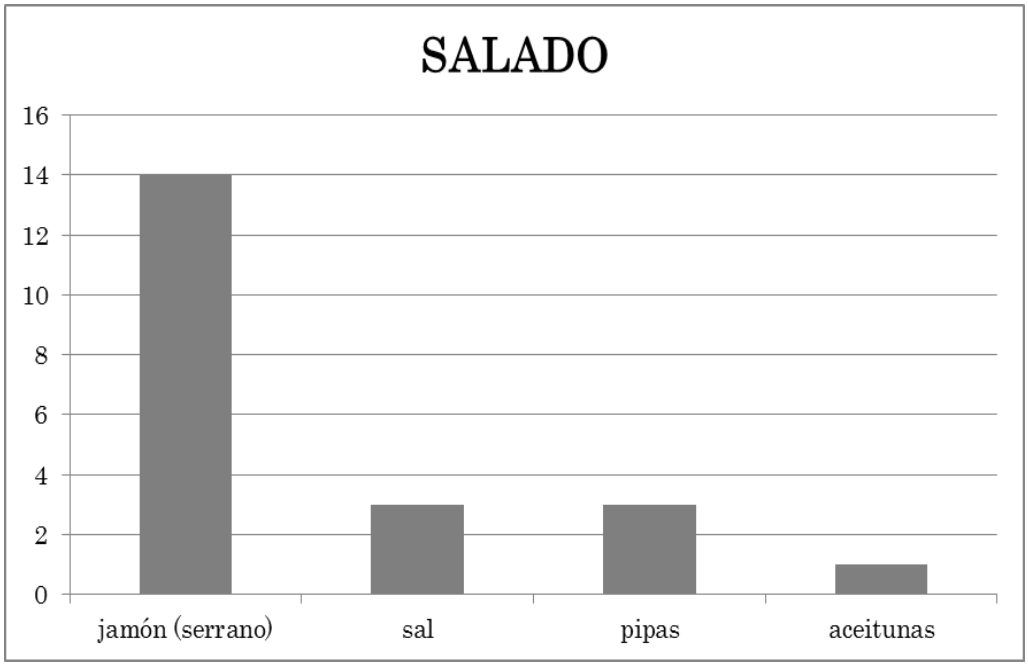


表１６　salado から連想される食べ物（単位：人）

表１６より、スペイン人が salado（塩辛い）から連想する食品は、圧倒的に jamón (serrano)（ハモン・セラーノと呼ばれる生ハム）であることが分かる。生ハムは製造の過程で多量の塩を使用するため、塩分を含んで塩辛い。一方で、塩味の元となる sal（塩）を salado とした回答は 3 件と少なかった。また、塩と同じく pipas（ヒマワリの種）も salado な食品として複数の回答があった。スペインでは酒のつまみやスナックとしてヒマワリの種を食べる。殻の周りに塩がついていて、食べる時には中の種だけを取り出して食べるが、周りの塩が必ず口に入るので塩辛く感じる。また、aceitunas（オリーブ）も前菜やつまみとして頻繁に食卓に上る。オリーブの実は漬物のようになっていることが多く、これも塩分を多く含むスペインの主要な食品の一つである。

一方、salado に相当する日本語は、「塩辛い」や「しょっぱい」である。日本人が一般に「塩辛い」や「しょっぱい」と言われて連想する食品には、梅干し、塩辛、漬物、塩鮭、佃煮など、古くから日本で食されてきた伝統食品が挙げられるだろう。現在の日本

では、伝統的な和食以外にも様々な国の食品が食されるようになった。しかし、日本人が「塩辛い」ものとして連想する食品のプロトタイプは、祖先から現代日本人に脈々と受け継がれてきた伝統的な和食であると考えられる。一方、アンケート調査から、スペイン人も salado からは、jamón serrano や pipas などスペイン伝統の食べ物を連想することが分かった。従って、日本人にとってもスペイン人にとっても、塩味の食べ物のプロトタイプは祖先から受け継がれてきた伝統的な食品であると考えられる。

5.3.　苦味

次に、苦味を表す形容詞 amargo から連想される食品のアンケート結果をみる。

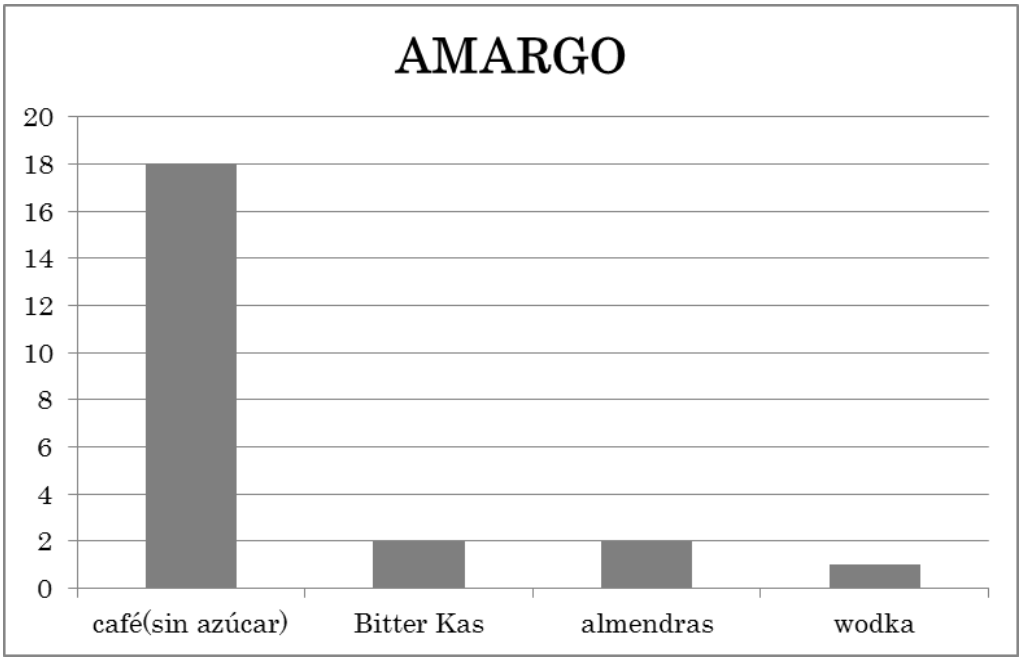


表１７　amargo から連想される食品（単位：人）

アンケートの結果、amargo から連想される食品は、café (sin azúcar)（砂糖の入っていないコーヒー）であると回答した人が最も多かった。このことは、コーヒーがスペイン人の食文化においていかに身近な食品であるかを表していると言えるだろう。２人から回答のあった Bitter Kas は少し苦味のある炭酸飲料で、スペインではポピュラーな飲み物である。さらに、Bitter Kas と同数で almendras（アーモンド）という回答が得られた。日本ではアーモンドと言えば、甘扁桃を食べることがほとんどであるが、スペインでは

苦扁桃を菓子やリキュールにして食することがある。しかし、実際には加工される際に多量の砂糖を使用するため、食品にアーモンドの苦味を感じているとは考えにくい。従って、ここに almendras amargas が挙げられたのは、almendras dulces との対比によるものであると考えられる。

一方、日本語で「苦い」ものを考えてみると、コーヒー、ビール、お茶、ゴーヤ（苦瓜）などが挙げられる。NTT ドコモが 2012 年に「苦味がたまらない食べ物・飲み物は？」というアンケート調査を行った[16]結果によると、1 位にゴーヤ、2 位にビール、3 位にはコーヒーが挙げられた。

1 位	ゴーヤ	5429 票
2 位	ビール	3930 票
3 位	コーヒー	3216 票
4 位	たらの芽など山菜	2353 票
5 位	どれも苦手かな	1871 票
6 位	ブラックチョコレート	1499 票
7 位	どれもたまらなく好き！	1359 票
8 位	ピーマン	1186 票
9 位	春菊	727 票
10 位	魚介のわた	711 票
11 位	セロリ	689 票
12 位	レバー肉	370 票
13 位	青汁	294 票
14 位	パセリ	275 票
15 位	その他	287 票

表１８　goo ランキング「苦味がたまらない食べ物・飲み物は？」

(http://ranking.goo.ne.jp/ranking/004/domestic_-BUJz7B6uSJ__all/p1/)

以上の調査は苦味のある食品の中でも特に「好ましい」と感じられる食品を挙げたものであるが、野菜であるゴーヤが最も多く回答されていることは興味深い。苦い野菜を

[16] このアンケートは NTT ドコモ「みんなの声」にて 2012/6/13～6/27 に投票が実施され、総投票数は 24196 票であった。

好ましい味とする回答が多いことには、日本の食文化において、「苦味」を持つ食品が積極的に食卓に取り入れられ、好ましい味として一般に広く受け入れられているということが考えられるだろう。

また、日本語では「苦い」と「渋い」が類似の味を指すことがあると指摘されている。西尾 (1972) では、「苦い」と「渋い」が同じ食品の味を指している例を次のように挙げている。

(145) こないだ食べたのは、ほんとは食べられないんですって、だけど毒にはならないんですって、などといっていて、野辺の香りどころの話ではないが、こっちは何を食わされてもみんなビールの肴にしてしまうから、イヤにツンツン匂うやつでも苦いやつでも気にかからない。

（西尾 1972: 100）

(146) あらゆる草を、どんなに渋く固かろうと、虫の喰った跡によって毒草でないと知られる限り、採って食べた。

（西尾 1972: 102）

(147) 鶴来が、「よう、よう…」と甘ったれたような声を出して、「おれに渋いのをくれよ。うんと渋いの。うんと濃くして、苦いやつ…」としつこく茶をせびる。

（西尾 1972: 101）

(145)と(146)では、それぞれ同じ「野草」を「苦い」と「渋い」で表している。また、(147)では「渋い」と「苦い」が共起して同じ茶の味を表している。このような類似性がみられることから、武藤 (2000) は、「苦い」と「渋い」の意味分析を行っている。武藤によれば、味覚を表す場合、「苦い」も「渋い」も同じく「不快な味」を表すが、「苦い」は「（熊の胆や魚の腸などの）苦味に対する不快な味」であり、「渋い」は「（熟さない柿などの）渋みに対する、（舌の表面を乾燥させるような）不快な味」を表すとし、それぞれ次のような例を挙げている。

(148) スーパーで、ニガウリを売っていた。（中略）味見してみる。うげげ。とても苦

い。食えたものではない。仕方ないので、塩味を濃くしてごまかしてみようと考える。再度、味噌を投入。

（武藤 2000: 260）

(149) バンコマイシン：目的は、内因性感染症治療。口腔内や消化管によって引き起こされる感染を対象とする。現存する抗生物質の最終兵器的存在といえる。渋くてまずい。

（武藤 2000: 249）

(148)は「苦い」が、(149)は「渋い」が味覚を表す例である。これらの例から、「苦い」も「渋い」も「不快な味」を表していることが分かるが、武藤 (2000) においても両語が表す味覚の具体的な相違点については明確にされていない。しかし、(148)のニガウリの味は「渋い」では表せないし、武藤が「渋い」の定義で挙げている未熟な柿の味も、「渋い」でしか表現しえないであろう。従って、両語が表す味には何らかの違いがあると推測される。しかし、「苦味」も「渋み」も不快な味であることから、「苦い」と「渋い」は意味範囲の境界が曖昧になっているように思われる。同じように意味範囲の境界がはっきり定まっていない語が、スペイン語の味覚形容詞にも存在するが、このような味覚形容詞の混用については次節において詳述する。次に、スペイン人が酸味を表す ácido と agrio をどのように捉えているのか、その食品のプロトタイプをみてみよう。

5.4. 酸味

agrio と ácido はいずれも酸味を表す形容詞である。これらの形容詞が表す味について、辞書では次のように定義されている。

ácido, da.

Que tiene sabor como de agraz o de vinagre.

（未熟な葡萄の果汁や酢の味がすること。）

agrio, gria

Que actuando sobre el gusto o el olfato produce sensación de acidez.

（味覚や嗅覚に作用して酸味の感覚を引き起こすこと。）

(Real Academia Española: 2001)

ácido, -a

*Agrio. Se aplica a lo que produce en la lengua o el paladar la sensación que produce, por ejemplo, el vinagre.

（Agrio. 舌や口蓋に、例えば酢がもたらすような感覚を引き起こすもの。）

agrio, -a

De sabor como el del limón o el vinagre. ≃ *Ácido. ◉ Se aplica también a la fruta que, por no estar madura, tiene ese sabor.

（レモンや酢のような味。≃ Ácido. ◉また熟していないためにそのような味を持つ果物にも用いられる。）

(Moliner: 2007)

以上の記述では、ácido の例として vinagre（酢）が挙げられ、agrio の例としては limón（レモン）が挙げられている。実際の用例においても、同じ食品の味を ácido と表したり、agrio と表したりする例がみられる。

(150) Todos sabemos que el limón es *agrio* y el árbol de donde hay que tomarlo es espinoso.

（レモンは酸っぱくて、収穫される木には棘があるということはみんな知っている。）

(http://www.devocionaldiario.com/reflexion/las-propiedades-del-limon-brendaliz-aviles/)

(151) El limón es *ácido* en sabor pero tiene un efecto alcalino en tu organismo.

（レモンの味は酸っぱいが人体にはアルカリ性の影響を与える。）

(http://placeresorganicos.com/mis-pasiones/agua-con-limon/)

そこで、スペイン人へのアンケート調査において、ácido と agrio という形容詞から連想される食品を自由に挙げてもらった。

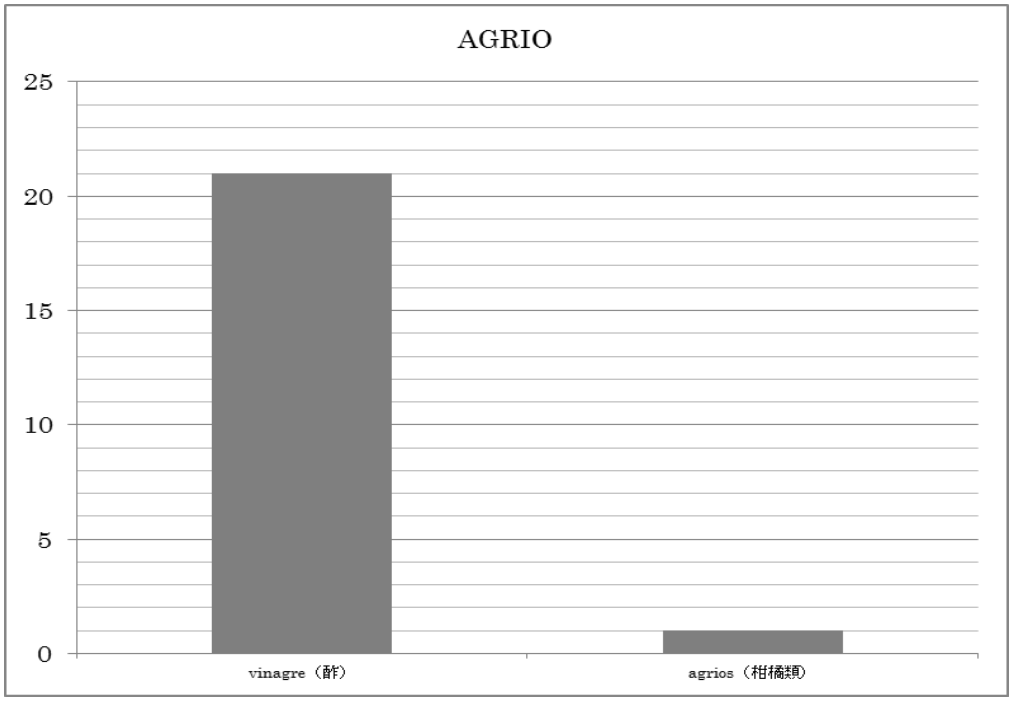


表１９　agrio から連想される食品

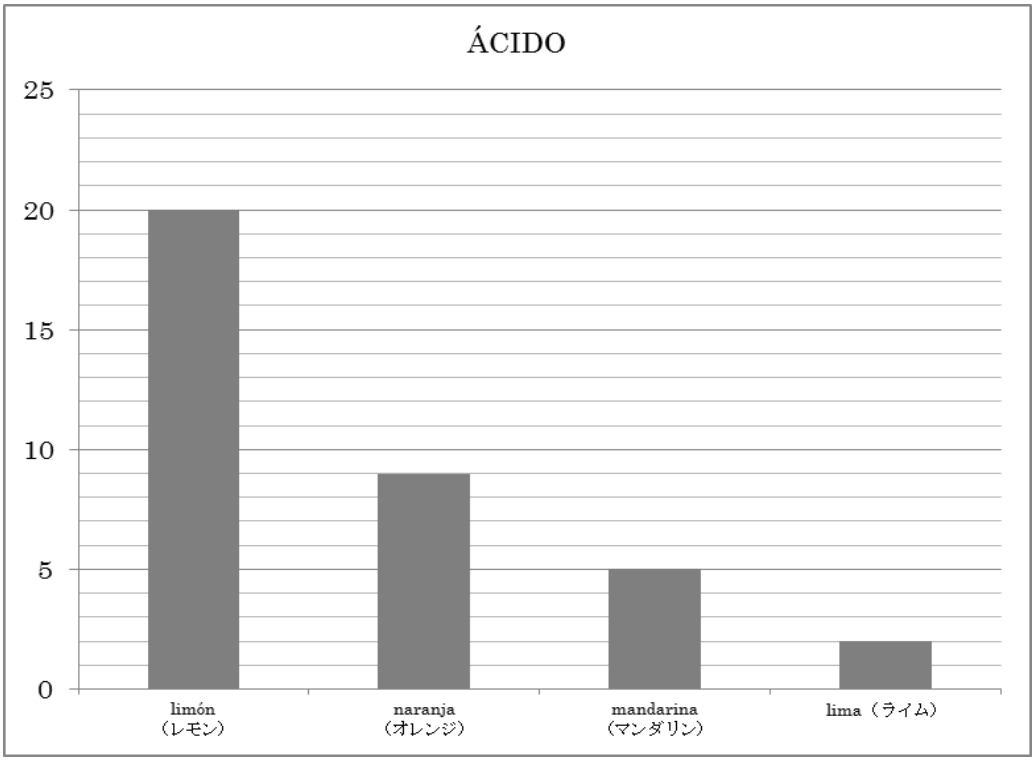


表２０　ácido から連想される食品

表１９と表２０から明らかなように、agrio からは vinagre（酢）が、また ácido からはレモンやオレンジなどの柑橘類のみが回答されており、辞書の定義と相対する結果となった。

さらに、実際にレモンの味をどのように表現するのかを調査するため、レモンの味として適切な味覚形容詞[17]を選んでもらったところ、次のような結果になった。

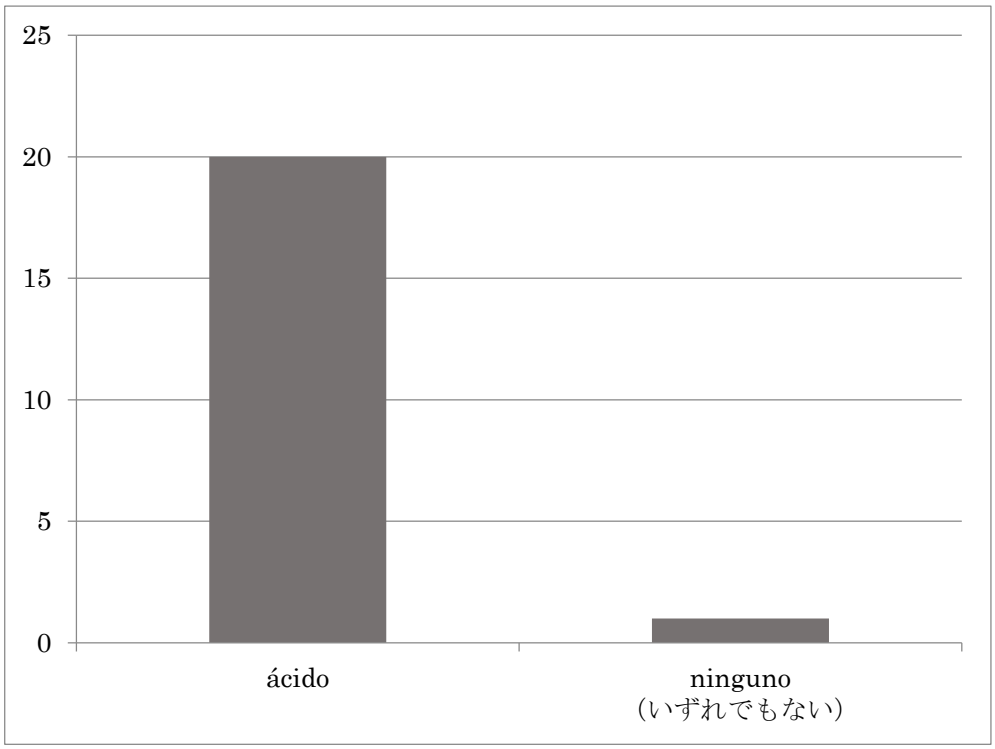


表２１　レモンの味として適当な味覚形容詞

表２１から分かる通り、最も適切な形容詞は ácido であるとの回答が圧倒的に多かった。その理由としては、ほとんどが Porque el limón es ácido.（レモンは ácido であるから。）と答えている。従って、スペイン人はレモンの味を ácido であると捉えていると言えるだ

[17] ここでは ácido と agrio に加えて amargo を選択肢に加えた。これは、O'Mahony & Manzano (1980) において、特にカリフォルニア在住のメキシコ系移民（スペイン語と英語の 2 言語話者）とメキシコ人（スペイン語母語話者）のスペイン語における ácido/amargo の混同が指摘されているためである。O'Mahony & Manzano によれば、キニーネなどの苦味成分を amargo、柑橘の酸味を ácido と認識している場合でも、オレンジの皮の味を尋ねると、実際にはオレンジの皮に含まれているのは苦味成分であり、酸味は感じられていないにも拘らず、オレンジという柑橘のイメージからその味を agrio ではなく ácido と表す場合があるという。このことから、柑橘の一種であるレモンの味についても、amargo との混同がみられる可能性があると推測される。

ろう。このことは、辞書の定義において ácido が酢の味とされ、agrio がレモンの味と記述されていたことに相反する結果である。

さらに、以上の結果を検証するために、ácido, agrio, amargo のうちでレモンの味を表す形容詞として不適切なものを選んでもらった。

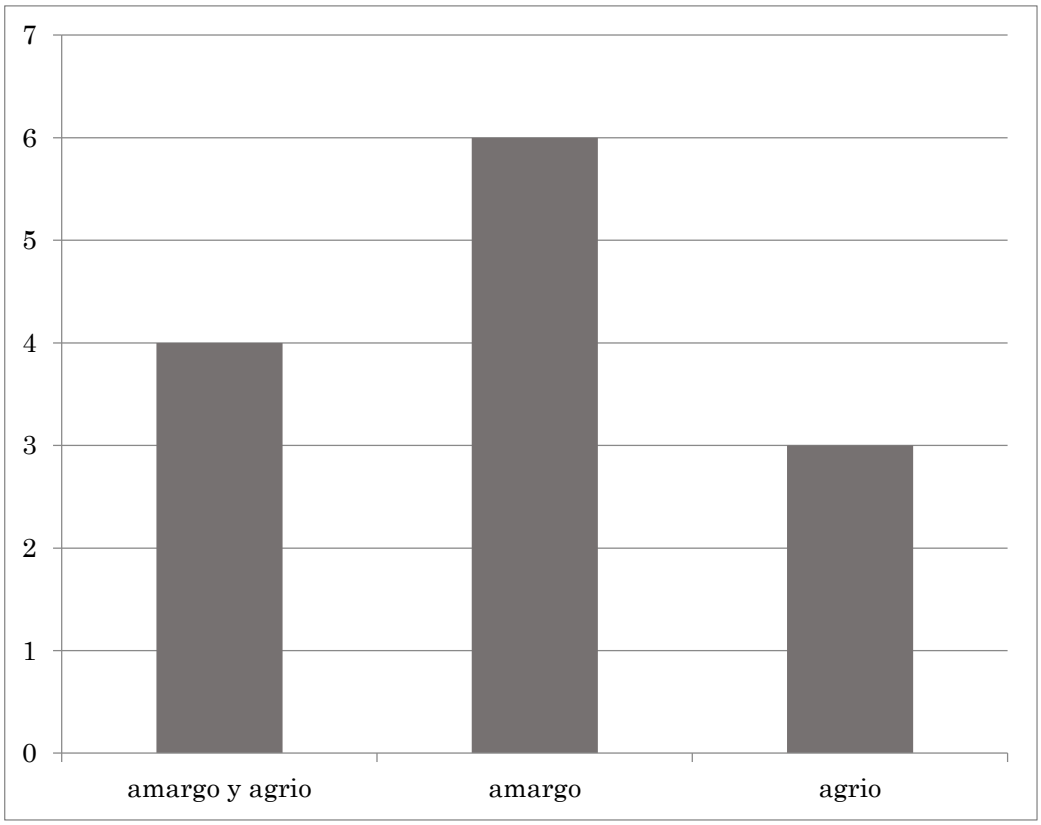


表２２　レモンの味の表現として不適切と思われる形容詞

表２２からも明らかなように、レモンの味として不適切な形容詞には agrio と amargo が挙げられ、ácido を不適切とする回答は１つもなかった。また、agrio と amargo を挙げた理由として agrio は Porque no corresponde con el sabor del limón.（レモンの味と一致しないから。）、amargo は Porque limón es ácido.（レモンは ácido だから。）が挙げられた。O'Mahony & Manzano (1980) の調査によれば、ほとんどの被験者が辞書の記述に同じく、柑橘類の味を agrio で表すと述べているが、本アンケートでは全く逆の結果がみられたことは興味深い。しかし、O'Mahony & Manzano では、agrio の意味は明らかにされておらず、今回のスペイン人に対するアンケートにおいても、辞書の記述や O'Mahony & Manzano の調査結果と正反対の結果が出たことに対する根拠は得られなかった。しかし、

ácido と agrio のそれぞれの語源を検証すると、いずれも「鋭い」という視覚からの派生であるにも拘らず、agrio の場合は「果実やワインが時間がたって酸っぱくなる」という意味の動詞 agriar（酸っぱくする）が意味拡張に影響している。従って、スペイン人は柑橘類の酸味のように食品が元々持っている酸味を ácido、酢やワインなど食品の加工や生産段階において発酵などの過程を経ることで得られた酸味を agrio と表している可能性が考えられる。

5.5. 旨味

我々が日常的に使う「旨味」とは、辞書の記述によれば「食物のうまい味。また、うまい度合。おいしさ」(『デジタル大辞泉』: 2012）であるという。本章の最初に述べたように、日本語の「旨味」に相当する語はスペイン語にはない。従って、日本語とスペイン語の「旨味」の表現を比較することは難しい。本節では、旨味を含むとされる食品についての表現をスペイン語と日本語で比較し、スペイン語話者が旨味をどのように表現しているのかを考えてみたい。また、スペイン語と日本語の「おいしい」という表現についても考察する。

5.5.1. ワインと日本酒

日本では日本酒や茶に「旨味」が感じられるということが知られているが、スペインにおいてはワインが「旨味」を有する食品として挙げられるだろう。ワインはその産地、熟成度、原料となる葡萄の育った気候など、様々な要因によって味が異なり、それらが厳密に区別される。また、料理との相性によって異なるワインを楽しむなど人々のワインに対するこだわりは非常に強い。さらに、スペイン語の慣用句には “Donde no hay vino y sobra el agua, la salud falta.（酒は百薬の長）” や “al pan, pan y al vino, vino（包み隠さずに、歯に衣着せぬ）” など、ワインが使われているものが相当数存在することから、スペインの食文化において重要な存在であることは疑う余地がない。従って、本節ではスペインにおいてワインがどのように評価されているのかを考察することで、スペイン人が「旨味」をどのように表すのかを考えてみたい。次表は、ワインの味を表す 25 の形容詞を挙げたスペインのウェブページより引用したものである。

ワインの味を表す形容詞	説明（筆者訳）
abocado/embocado	Vino que sin llegar a ser dulce ofrece sensaciones azucaradas. （やや甘口で口当たりの良い。）
acerado	Matiz en la coloración de los vinos blancos jóvenes y pálidos que recuerda el brillo del acero. （若くて淡い色の白ワインの、鉄の輝きを思わせるような色合い。）
afrutado (frutal)	Expresión incorrecta muy usada para describir un vino delicado que evoca diferentes aromas vegetales, como el olor propio de la uva usada en su elaboración o el de otra fruta. El término correcto es **frutal**. （afrutado は一般に使われるが正しくは frutal。醸造に使われた葡萄やその他の果実など、様々な香りを連想させること。）
agresivo	Vino con aroma y sabor penetrantes y desagradables. Suele ser ácido y astringente. （鋭く不快な味や香りがするワイン。酸っぱい、あるいは渋い。）
astringente	Se dice de los vinos que, debido a los taninos, producen una sensación de estrechamiento que se aprecia en los tejidos de la boca. （タンニンによって口内の組織に収縮するような感覚が引き起こされるワイン。）
alegre	Vino ligero, fresco, fácil de tomar y con buen paso de boca. Ausencia total de complejidades aromáticas. （軽くて爽やかで、飲みやすい（口通りの良い）ワイン。複雑な香りは全くない。）
áspero	Vino astringente en exceso, debido a la abundancia de taninos o de componentes herbáceos procedentes del raspón, las pepitas o los hollejos del prensado.

	（タンニン或いは皮や種から生じた草本の成分が多量に含まれているために過度に渋いワイン。）
balsámico	Se aplica a vinos de gran crianza y es una sensación que forma parte de su bouquet. Se trata de aromas penetrantes que dan sensación de frescura y matices mentolados. Brillante. Vino que al trasluz se ve completamente transparente y sin impureza （熟成された芳香のあるワイン。鋭く爽やかでハッカのような感覚をもたらす香り。光を通してみると完全に透明で濁りがない。）
carnoso	Se dice del vino con cuerpo y bien conjuntado que produce un rica impresión física a su paso por la boca. （コクがあって口の中を通っていく時に豊かな感覚を生じるワイン。）
crudo/tierno	Vino joven y sin terminar. （若くて未熟なワイン。）
débil/corto	Se aplica al caldo con caracteres pocos pronunciados. （あまり際立った特徴のないワイン。）
decrépito	Vino desequilibrado por completo debido al exceso de edad. （熟成が進みすぎて完全にバランスがとれていないワイン。）
elegante	Vino equilibrado que produce sensaciones sugerentes en nariz y boca. （バランスがとれていて鼻や口にほのかな感覚をもたらすワイン。）
espeso	Vino con mucho cuerpo y densidad.（とてもコクがあり、濃いワイン。）
fresco	Vino con una acidez adecuada para su tipo. Se aplica a los jóvenes de calidad. （適度な酸味があるワイン。上質の若いワイン。）
hueco	Se dice de los caldos que decepcionan en todo el recorrido de la

	boca, debido a sus muchas carencias. （味がなく口の中に入れても失望させられるワイン。）
lleno	Vino de amplios sabores que colma el paladar. （口の中を満たす広い味のワイン。）
morapio	Vino tinto de color intenso y tonos apagados por su poca acidez. （赤ワインの中でも酸味が少ないために深い暗い色のワイン。）
pastoso	Hace referencia a vinos blancos y cavas demasiado densos en la boca y ricos en azúcar. （白ワインやカバが糖分を多量に含んで口の中で必要以上に濃い味であること。）
perfumado	Vino con intensos aromas.（深い香りのワイン。）
picado	Vino con síntomas de avinagramiento.（酸っぱくなっているワイン。）
terpénico	Vino con aromas densos e intensos originados por los aceites esenciales que contiene. （ワインに含まれる精油によって深い香りを持つワイン。）
untuoso	Caldo oleoso que se adhiere en la copa y que en la boca se muestra suave. （グラスに付着したり、口中でまろやかな味を示す、油性のワイン。）
vigoroso	Es un vino que provoca sensaciones potentes en la boca. Resulta sabroso, con cuerpo y con una acidez y nivel de taninos y alcohol bien conjuntados. （口の中に力強い感覚をもたらすワイン。コクがあり、酸味やタンニン、アルコールとうまく調和しておいしい。）

表２３　ワインの味を表現する 25 の形容詞

(http://www.muyinteresante.es/salud/articulo/los-25-adjetivos-del-vino)

表２３に挙げられた形容詞のうち、特にワインの味をポジティブに評価している表現

に注目したい。

まず、abocado/embocado（やや甘口で口当たりの良い）は boca（口）という名詞から派生した語で、口という感覚器官で感じ取られた感覚をメトニミー的に表している。afrutado/frutal, fresco, perfumado, terpénico, untuoso は、いずれもワインの原料やワイン自体の性質を具体的に表している。例えば、afrutado は fruta（果実）という名詞から派生した語であるが、ワインの原料となる葡萄やその他の果実などの香りが感じられることを表す。fresco は、食品の新鮮さや若々しさを表す形容詞であり、fresco がワインの味を表す場合、上質の若いワインの持つ酸味を表す。従って、ワインの若さを fresco と表していると言える。terpénico は元々テルペンという精油の主成分が含まれるという意味を持つ。ワインを terpénico で表す場合は、ワインの持つ精油による香りを意味するため、ワインの持つ性質を具体的に示している表現だと言えるだろう。untuoso は油分が多いことを表す形容詞で、ワインについて用いられる場合も、ワインの油分が多いことを直接的に表している表現である。

一方で、balsámico（心安らぐ）, carnoso（豊満な）, lleno（～に満ちた）といった形容詞はこれらのワインを口にした際の話者の身体感覚を表している。balsámico と表されるワインは、薄荷（はっか）のような爽やかな香りを持っている。従って、爽やかな香りによって心安らぐようなワインの味を表していると思われる。carnoso は carne（肉）から派生した形容詞である。carnoso と言われるワインは、「コクがあって口の中を通っていくときに豊かな感覚を生じるワイン」とされており、葡萄の豊満な果肉の味を感じている表現であると考えられる。また、ワインの味が lleno と表現される場合、口の中にワインの味が広がっていくような感覚を表していると思われる。これらの表現は、話者の体感に基づくメタファー表現であると考えられる。

さらに、alegre（陽気な）、 elegante（優雅な）、 vigoroso（力強い）のように、人の性質を表す形容詞でワインの味を表している場合もある。ワインが alegre であるという場合、「軽くて爽やかで、飲みやすいワイン」を意味する。この飲みやすさから、晴れ晴れした陽気な雰囲気を連想したものと思われる。また、elegante はバランスがとれていて、ほのかな味や香りを感じるワインの表現である。味や香りが主張し過ぎないことが、elegante の持つ「優雅」で「慎みのある」イメージと重なったものと思われる。vigoroso は、コク、酸味、タンニンの渋味、アルコールなど様々な味がうまく調和した味のワインを表す。elegante のようにほのかな味ではなく、様々な要素が調和したしっかりした味

を vigoroso（力強い）と捉えていると考えられる。このような表現は、既にワインやその原料の味からは大きくかけ離れたメタファー表現である。

以上の考察から、スペイン人のワインの味に対する表現は、原料やワインの持つ性質を直接的に表したものから、話者の体感に基づいて味覚とは全くかけ離れた表現にまで及んでいることが分かった。

一方、日本には伝統的なアルコール飲料として日本酒がある。以下に、日本酒の味の表現をみてみよう。

端麗（淡麗）	キレイで滑らかな感じ。
濃醇	味が濃いこと（↔端麗）。
芳醇（豊醇）	香りが高く味が良いこと。
ビン	後味が引き締まった感じ。
キレがある	すっきりしていること。
荒い	口に含んだ時に口中が刺激される状態。
ふくらみがある/ゴク味がある	バランスが取れたしっかりしたコクがある状態。
コシが強い	しっかりした後味を残す。
コシが弱い	後味がぼやけた感じ。
どっしり/じっかり	コシがあり、安定した香りもある状態。

表２４　日本酒の味の表現

(http://www.2ndtrader.net/syurui/nihonsyu/hyougen.html)

表２４をみると、日本酒の味や香りを直接表現しているのは、「濃醇」と「芳醇」のみである。「醇」は「まじりけのない濃厚な酒」を表しており、味が濃い酒を「濃醇」、香り高い酒を「芳醇」と表現している。

一方「端麗」は「キレイで滑らかな」味であるとされる。「端麗」の元々の意味は「姿・形が整っていて、美しいこと」（『デジタル大辞泉』: 2012）という視覚表現であるが、味が整っていておいしいことをメタファー的に表現したものと思われる。また、「ふくらみがある」という表現も、日本酒の持つコクを味の「ふくらみ」と捉えた視覚表現へのメタファーであると言えるだろう。

「キレがある」という表現は、事物の様態を表している。日本酒の味に「キレがある」というのは、飲んだ後口に味が残らないことを、物が切れて繋がっているところから離れる様子に例えたメタファー表現であると考えられる。

さらに、「どっしり」や「じっかり」など、スペイン語のワインの表現にはみられなかった擬態語が用いられることが特徴的である。「どっしり」や「じっかり」は、落ち着きがあって重々しいさまを表す擬態語である。日本酒の持つコシや安定した香りを、人物の落ち着いたさまに重ねたメタファー表現であると考えられる。

以上の考察から、日本酒の味を表現する場合には、味の濃淡や香りを直接表現するだけではなく、事物の様態や人物の性質の表現、さらには日本語に特徴的な擬態語も用いられていることが分かった。

5.5.2. スペイン人のおいしさを表す表現

前節では、スペインと日本の伝統的な食品であるワインと日本酒の味の表現について考察した。一方で、日常の食事においてスペイン人は「おいしい」ものをどのように表現しているのであろうか。そこで、スペイン人に、「おいしい」ものをどのように表現するのかについてアンケート調査[18]を行った。最初に、筆者はインフォーマントに対して「旨味」をどのように感じているのかを調べるため、「単に好きな食べ物ではなく、一般的に「おいしい」とされる食品は何か」と尋ねた。その際に「おいしさ」を表すため“exquisitez（おいしさ）”という語を用いたところ、jamón de pata negra（黒豚の生ハム）、pescado de roca（オコゼ）、percebes（エボシガイ）、angulas（うなぎの稚魚）、caviar（キャビア）など、珍味とされるような食品が挙げられた。また、“Platos que normalmente combinen una complicada o larga preparación y hechos con productos no tan fáciles de encontrar.（一般に調理が複雑で時間がかかっていて、希少な食材で作られた料理。）”といった回答もあった。従って、exquisitez とは「希少価値が高く」、「品質の良い」食品を指すと言えるだろう。

また、exquisitez より派生した形容詞 exquisito（おいしい）であるとされるものについて、“... cuando a una comida se la califica de exquisita es que no puede ser mejorada, ...（…ある食べ物が exquisito であると評価されるとき、それはこれ以上改善しようがない味であ

[18] 本アンケートは、2013 年 11 月に筆者と 20 代～40 代のスペイン人 6 名との対話形式で行った。

る…）” という回答もあり、exquisito が最上の味を表す形容詞であることが推測される。

その他にもスペイン語には rico や sabroso などの「おいしさ」を表す形容詞があり、アンケートにおいて exquisito, rico, sabroso がどのように使い分けられているのかを尋ねてみた。

sabroso と exquisito については、“Sabroso sabe bien. Exquisito es inmejorable.（sabroso は味が良いこと。exquisito は申し分のないことである。）” や “Exqusito es aun más que sabroso.（exquisito は sabroso よりいっそう<味が良い>ことだ。）”という回答があり、exquisito と sabroso はともに「おいしさ」を表す形容詞であるが、スペイン人はこの２つの形容詞をおいしさの段階を表すために使い分けているのではないかと思われる。また、rico と exquisito の関係についても、 “ La fabada de mi abuela está riquísima pero no aparece en la guía Michelin, pero de Ferrán Adria, cocinero famoso la hace... seguro que dicen que es exquisita.（私の祖母のファバーダ（白インゲンと肉の煮込み料理）はとてもおいしいけれど、ミシュランガイドには掲載されていない、でも有名な料理人のフェラン・アドリアがそれを作ったら…きっと exquisito だというでしょうね。）” と回答し、exquisito が「おいしさ」の最上表現であることが推測される。

また、sabroso と rico については、意味の境界がはっきりと分かるような回答は得られなかったが、sabroso の説明で “Sabroso es algo rico, mmmuuuuy rico.（sabroso は rico、と一っても rico なものだ。）” との回答があり、sabroso は rico とほぼ同じ、或いは rico よりも「おいしさ」の度合いがやや高い表現であると考えられる。このように、exquisito, sabroso, rico はそれぞれおいしさの段階を表していると考えられる。

一方で、日本語の「おいしさ」を表す形容詞はあまり多くないように思われる。瀬戸(2003)においても、「おいしさ」を表す表現は、味覚自体の表現よりも触覚や聴覚など他の感覚からの表現を用いる傾向があることが指摘されている。特に日本語に特徴的な表現であるオノマトペが味の表現に多用される。大橋 (2010) では、アンケート調査を行い、食感を表す言葉のうち「おいしさ」を感じるものが何なのかを調べたところ、次のような結果になった。

順位	全体 (n=1350)	(%)
1	ジューシー	50.1
2	もちもち	48.3
3	もっちり	45.0
4	とろける	43.7
5	サクサク	42.0
6	ホクホク	39.9
7	とろーり	39.9
8	シャキシャキ	37.9
9	コシのある	37.4
10	口溶けのよい	37.3
11	サクッと	36.1
12	ふっくら	33.8
13	ふわふわ	32.3
14	ふんわり	31.6
15	カリッと	31.3
16	なめらかな	30.8
17	トロトロ	30.0
18	じゅわー	29.4
19	あつあつ	29.3
20	プリプリ	29.3
21	ふわっと	29.3
22	パリッと	27.7
23	さっくり	27.5
24	ホカホカ	27.3
25	とろっと	26.9
26	シャキッと	26.7
27	しっとり	26.4
28	舌ざわりのよい	26.3
29	カリカリ	25.6
30	カラッと	24.8

表２５　おいしいを感じる言葉　食感系ランキング（大橋 2010:29）

表２５から明らかなように、「おいしさ」の食感を表す食感のことばとして、オノマトペが多く挙げられている。武藤(2010)は、味覚の言葉が少ない理由として、共感覚比喩表現の「一方向性仮説」の影響を挙げ、多くの触覚を表すオノマトペが味を表現できてしまうために、味覚の言葉の必要性が低くなり、味覚の言葉があまり発達しなかった可能性を指摘している。さらに、このようにオノマトペが多用される理由について、オノマトペが簡潔な表現の中に具体的な表現力を有しており、五感に複合的に訴える力があることから、若者や時代に受け入れられやすいためではないかと述べている。

5.6. 本章のまとめ

以上の考察から、スペイン人と日本人の基本味を表す形容詞について、次のことが明らかになった。

① 甘味を表す dulce から連想される食べ物は、菓子類や糖類である。一方、日本人は菓子類や砂糖以外にも、新鮮な野菜を食べた時にも「甘い」と表現することがある。

② 鹹味を表す salado からは、jamón serrano などのスペイン人が慣れ親しんできた伝統的な食べ物が挙げられる。これは日本人が梅干し、塩辛など祖先から受け継いできた伝統的な食品を「塩辛い」と表現するのと同様である。

③ 苦味を表す形容詞 amargo が修飾する名詞としては、コーヒーをはじめとする飲み物が多く挙げられたが、食べ物については almendras amargas のみであった。一方、日本人はゴーヤなど苦味のある食品を好んで食べる傾向がある。

④ スペイン語の酸味を表す形容詞には ácido と agrio がある。アンケートの結果から、ácido は柑橘類、agrio は酢を主に形容することが明らかになった。一方日本語にはそのような区別はみられず、柑橘類にも酢にも「酸っぱい」という形容詞が使用される。

⑤ スペイン語には rico, bueno, exquisito ような「おいしさ」を表す形容詞が存在し、それらはおいしさの度合いによって段階的に使われていると考えられる。

一方日本語では、おいしさを表す形容詞は主に「おいしい」「うまい」などがみられるが、味覚の語彙はあまり多くない。このことには、日本語に特徴的なオノマトペの存在が関わるとされる。簡潔な表現で五感に訴えることのできるオノマ

トペは、その利便性から広く時代に受け入れられ、「おいしさ」を表す表現としても発達したものと考えられる。

Anexo

Edad: Sexo: masculino / femenino

1. ¿Cuáles son las comidas o bebidas dulces / amargas / ácidas / saladas / agrias?

dulces:_____

amargas:_____

ácidas:_____

saladas:_____

agrias:_____

2. En las siguientes situaciones, ¿cuál es la expresión más adecuada, y cuál es inadecuada?

① **Comiendo una fruta bien madura,**

1) rica
2) dulce
3) buena
4) Cualquiera de las tres
5) Más de una
6) Ninguna

- Si ha elegido 1)-3), ¿cuál es la más adecuada? _____

- ¿Por qué? _____

- Y ¿cuál es la más extraña?_____

- ¿Por qué?_____

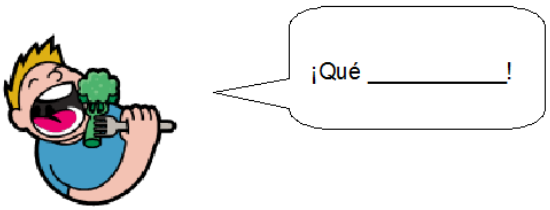
- Si ha elegido el 4), ¿cuál se usa más generalmente? _____

- Si ha elegido el 5), ¿cuáles son las adecuadas? _____

_____

- Si ha elegido el 6), ¿cuál es el adjetivo más adecuado en esta situación? _____

② **Comiendo una verdura fresca,**



1) buena
2) dulce
3) rica
4) Cualquiera de las tres
5) Más de una
6) Ninguna

- Si ha elegido 1)-3), ¿cuál es la más adecuada? _____

- ¿Por qué? _____

- Y ¿cuál es la más extraña?_____

- ¿Por qué?_____

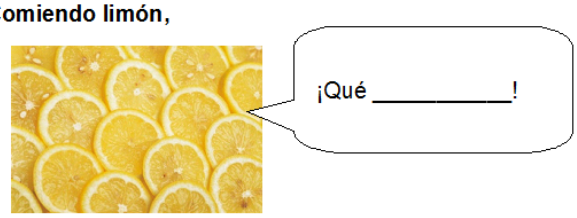
- Si ha elegido el 4), ¿cuál se usa más generalmente? _____

- Si ha elegido el 5), ¿cuáles son las adecuadas? _____

_____

- Si ha elegido el 6), ¿cuál es el adjetivo más adecuado en esta situación? _____

③ **Comiendo limón,**



1) amargo
2) ácido
3) agrio
4) Cualquiera de las tres
5) Más de una
6) Ninguna

- Si ha elegido 1)-3), ¿cuál es la más adecuada? _____

- ¿Por qué? _____

- Y ¿cuál es la más inadecuada? _____

- ¿Por qué? _____

- Si ha elegido la 4), ¿cuál se usa más generalmente? _____

-Si ha elegido la 5), ¿cuáles son las adecuadas y por qué?

_____

_____

- Si ha elegido la 6), ¿cuál es el adjetivo más adecuado en esta situación?

_____

④ **Tomando medicina,**

¡Qué _____!

1) agria
2) amarga
3) mal sabe
4) Cualquiera de las tres
5) Más de una
6) Ninguna

· Si ha elegido 1)-3), ¿cuál es la más adecuada? _____

· ¿Por qué? _____

· Y ¿cuál es la más inadecuada? _____

· ¿Por qué? _____

· Si ha elegido 4), ¿cuál se usa más generalmente? _____

· Si ha elegido 5), ¿cuáles son las adecuadas y por qué?

_____

_____

·Si ha elegido 6), ¿cuál es el adjetivo más adecuado en esta situación? _____

Si puede colaborar en las futuras encuestas, deje su nombre y correo electrónico, por favor.

Nombre _____

E-mail _____

Muchas gracias.

第６章

結論と今後の展望

本研究では、スペイン語の味覚形容詞の用法と意味拡張の範囲を明らかにし、その意味拡張がどのような比喩に基づいているのかを、日本語との比較を通して明らかにしようと試みた。また、スペイン人と日本人の味覚に関する表現の相違点と類似点を考察した。

第１章では、本研究の目的と方法を述べた。

第２章では、味覚形容詞についての先行研究を概観した。また、認知言語学の分野における味覚形容詞や形容詞の意味拡張に関する研究と本研究における課題を提示した。

次に、第３章ではスペイン語の基本味を表す味覚形容詞 dulce, salado, amargo, ácido, agrio について考察した。味覚形容詞の意味拡張については、これまで共感覚表現を取り上げた研究が多くなされてきた。また、共感覚比喩表現については、低次の感覚から高次の感覚に意味拡張が起きるとする「一方向性仮説」が提示されている （Ullmann: 1959, Williams: 1976, 山梨: 1988）。しかし、スペイン語の味覚形容詞の中には、特に味覚より低次の触覚への意味拡張において “*dulce* pelaje” （甘い毛並み）のように、明らかにその説に反すると思われる例がみられる。本章では、それぞれの形容詞について用例を考察し、基本義の同定と、意味拡張の範囲の確認を行い、スペイン語の基本味を表す各味覚形容詞について以下の点を明らかにした。

① 甘味を表す形容詞 dulce は、五感全てに共感覚表現がみられる。また、agonía（苦悩）や sufrimiento（苦しみ）などのネガティブな感覚を表す名詞とも共起する。これらのいずれの意味拡張においても、「心地よさ」という身体感覚が関わっている。

② 鹹味を表す salado の意味拡張は、味覚以外の全てにおいて意味拡張していた dulce とは異なり、嗅覚以外への拡張がみられなかった。一方、人物の性質に意味拡張する場合には「面白味がある」というポジティブな性質を表すことが分かった。

③ 苦味を表す形容詞 amargo は、触覚以外の全ての感覚について共感覚表現がみられ

る。いずれも desengaño（失望）や quejas（嘆き）などのネガティブな感情を表す抽象名詞や alegría や felicidad などのポジティブな感情を表す名詞とも共起する。いずれの意味拡張においても「不快さ」という身体感覚が関わっている。

④　酸味を表す形容詞には ácido と agrio があり、この２つの形容詞の使い分けは曖昧であるが、両語とも触覚以外の感覚に共感覚的に意味拡張している。さらに、人物を評価する場合には、どちらも「気難しい」或いは「無愛想」であることを表す。このように、両語が共通の拡張義を持つことは、ácido と agrio の語源がいずれも「鋭い」または「とがった」という視覚表現からの派生であることに起因するとみられる。両語が酸味を表すようになったのは、舌を刺激する酸の味を、鋭いものによる刺激に重ねた表現であると考えられる。

⑤　５つの味覚形容詞全てにおいて共感覚表現への意味拡張がみられたが、「一方向性仮説」への反例が見られたのは dulce のみであった。また、dulce と amargo の意味拡張にはそれぞれ「心地よさ」と「不快さ」という身体感覚が関わっている一方で、salado や ácido、agrio の意味拡張は感覚の同時性や類似性に基づくものであり、身体感覚からは離れた拡張であると推測される。このことから、スペイン語における味覚形容詞の体系において、dulce と amargo は最も基本的な味覚であり、「快」「不快」の対立に基づいて広く意味拡張しているものと考えられる。

第４章では、スペイン語味覚形容詞の統語的特徴と意味の関係について考察した。本研究では、スペイン語の味覚形容詞が、名詞に前置される場合と後置される場合とで、どのような意味の相違を生じるのかを調べるため、特に意味拡張の範囲が広いとみられる dulce が限定用法で用いられている例を調査した。その結果、味覚形容詞が名詞に前置される場合は、発話主体が名詞で表される行為や事物、感覚、感情に対して *dulce* viaje（甘い（→懐かしい）旅行）のように dulce という感覚を主体的に把握しているということが分かった。従って、限定用法においては、前置も後置も可能なスペイン語の味覚形容詞の語順選択の基準として、話者が臨場的・体験的に事態把握をする場合には、名詞に前置されるという仮説を提示した。

次に、dulce の形容詞の統語構造と意味の関係について、「主観性」という観点から考察した。その結果、叙述用法においては内的感覚を表す抽象名詞と共起する場合には、主語後置構文という有標の形式をとることが明らかになった。

第５章では、スペイン語話者と日本語話者の味覚に対する捉え方の違いを、アンケートの結果に基づいて、プロトタイプ的観点から考察した。その結果以下の点が明らかになった。

第１に、甘味を表す dulce から日本人とスペイン人が連想する食べ物は、菓子類や糖類である。これに対し日本人は、菓子類や砂糖以外に新鮮な野菜をも食べた時にも「甘い」と表現することがある。第２に、鹹味を表す salado からは、jamón serrano などのスペイン人が慣れ親しんできた伝統的な食べ物が挙げられる。これは日本人が梅干し、塩辛など祖先から受け継いできた伝統的な食品を「塩辛い」と表現するのと同様である。第３に、苦味を表す形容詞 amargo が修飾する名詞としては、コーヒーをはじめとする飲み物が多く挙げられたが、食べ物については almendras amargas のみであった。一方、日本人はゴーヤなど苦味のある食品を好んで食べる傾向がある。第４に、スペイン語の酸味を表す形容詞には ácido と agrio がある。アンケートの結果から、ácido は柑橘類、agrio は酢を主に形容することが明らかになった。一方、日本語では柑橘類にも酢にも「酸っぱい」という形容詞が使用される。

さらに、スペイン語では「おいしさ」がどのように表現されているのかを明らかにするため、スペイン人へのアンケート調査を行った。その結果、スペイン語には rico, bueno, exquisito などの「おいしさ」を表す形容詞が存在し、それらはおいしさの度合いによって段階的に使われていることが分かった。一方、日本語ではおいしさを表す形容詞は「おいしい」「うまい」などに限られるが、簡潔な表現で五感に訴えることのできるオノマトペが多用されていることが明らかになった。

本研究における考察の結果、スペイン語の味覚形容詞の体系において、dulce と amargo は最も基本的な味覚であり、「快」「不快」の対立に基づいて広く意味拡張していることが明らかになった。同じラテン語から派生したロマンス諸語においてもこの結果が適応できるのかを検証することは今後の課題である。本研究が、味覚形容詞の認知言語学的研究において、個別言語の立場から寄与することを願うものである。

用例出典

コーパス

Corpus del Español (http://corpusdelespanol.org/)

Burgos, C de. (1917) *La rampa*

Castelar, Emilio (1885) *El suspiro del moro: Leyendas tradiciones, historias referentes a la conquista de Granada*

Nava A. G. M de. (1799) *Poesías*

Corpus de Referencia del Español Actual (**http://corpus.rae.es/creanet.html)**

―新聞・雑誌―

ABC

El Nacional

El Mundo

El País

Telva

Tiempo

―書籍―

Abadía, M. (2009) *El canario desnudo*

Aguilera, N. (1983) *La caricia rota*

Alimbau Argila J. M. (1999) *Palabras para la alegría*

Ameztoy, B. (2001) *Escuela de mujeres*

Argomayor, Luis (1987) *España en fiestas*

Argüelles, F. (1997) *Letanías de lluvia*

Armendáriz Sanz, J. L. (2004) *Procesos de cocina*

Bello, L. (2007) *Viaje por las escuelas de Andalucía*

Domingo, X. (1992) *El sabor de España*

Gamboa, S. (2003) *Páginas de vuelta*

Gasulla, L (1999) *Culminación de Montoya*

Gertopán, S. (2000) *El nombre prestado*

Griselda, G. (1994) *La malasangre*

Herrera Luque, F. J. (2002) *En la casa del pez que escupe el agua*

Lajusticia Bergasa, A. M. (2002) *Colesterol, triglicéridos y su control*

Marsé, J. (1993) *El embrujo de Shangai*

Martín Gaite, C. (1987) *Usos amorosos de la posguerra española*

Romero E. Miguel (1979) *El vodevil de la pálida, pálida, pálida, pálida rosa*

Sabadell, M. A. (2003) *El hombre que calumnió a los monos*

Suñer, S. (2000) *La botica natural del padre Santiago*

Zarraluki, P. (2000) *La historia del silencio*

Zúñiga, J.E. (1992) *Largo noviembre de Madrid*

ウェブページ

Google España

http://amor-yaoi.com/fanfic/viewstory.php?skin=colors&sid=23988&textsize=19&chapter=51

http://annieandmatteatspain.wordpress.com/

http://elataquedelmothman.blogspot.jp/2013/01/captain-beyond-same.html

http://eleconomista.com.mx/internacional/2013/07/18/kerry-se-reune-refugiados-sirios-jordania

http://es.answers.yahoo.com/question/index?qid=20090422151350AAXPNJT

http://es.answers.yahoo.com/question/index?qid=20110114123251AAvN2Tw

http://espejonegro.net/http://paraellas.net/index.php/amistad-amor-amigos-enamorados/

http://es.runesdatabase.com/quest/420191

http://foro.univision.com/t5/Webnovelas/Amor-Prohibido-Justin-amp-Tu-Drama/m-p/468616420

http://homoerecto06.wordpress.com/2006/05/02/paseando/

http://lynettachica.wordpress.com/2012/02/26/en-espanol/

http://marvision.blogspot.jp/2006/09/cuestin-de-actitud.html

http://medicinadentrodecasa.blogspot.jp/

http://m.eltiempo.com/buscador/MAM-5432566/1

http://mulektalhermelo.blogspot.jp/2013/04/asi-lo-siento-en-mis-venas.html

http://opticosnaturvision.blogspot.jp/2013/06/cataratas.html

http://raybodymind.blogspot.jp/2011/06/los-mil-usos-del-vinagre.html

http://reflexionesenlamesa.wordpress.com/2012/10/04/jugo-puro-limon-exprimido-citric/

http://silentburgh.activoforo.com/t51-vampiro

http://somostodosum.ig.com.br/mob/conteudo.asp?id=7884

http://tuestiloadiario.blogspot.jp/2013/05/te-atreves-con-el-fucsia.html

http://webalia.com/chistes/de-frente-manteca/gmx-niv61-con12559.htm

http://wwf.panda.org/es/nuestro_trabajo/agua_dulce/

http://www.africaandando.com/africaandando/expediciones/africaandando-2010/cronicas-2010/281-cronica-20100721

http://www.baiona.org/web/turismo/sobrebaiona/presentacion;jsessionid=0C61159D83F24C15F9B928D6D6A18986

http://www.banrepcultural.org/node/78513

http://www.camaratui.com/index.php?option=com_content&view=article&id=58&Itemid=60&lang=es

http://www.camaratui.com/index.php?option=com_content&view=article&id=58&Itemid=60&lang=en

http://www.ciao.es/Opiniones/Dia_conos_de_nata_y_chocolate__423060

http://www.ciao.es/Flan_de_Huevo_Danet__Opinion_1795200

http://www.ciencialimada.com.ar/2011/06/la-dulce-agonia-de-un-blog-de-ciencia.html

http://www.deviajeporespana.com/playas/10/

http://www.directoalpaladar.com/recetas-de-arroces/receta-de-risotto-con-alcachofas-y-jamon-de-pato

http://www.dooyoo.es/panaderia-y-dulces/clix-3d-fresa/1259368/

http://www.ehowenespanol.com/sabores-del-yogur-activia-info_248430/

http://www.elmeurebostonline.cat/index.php?idioma=2&arxiu=fitxa_producte&id_familia=3

107&id_subfamilia=8173&id=141958

http://www.eluniverso.com/2002/12/31/0001/257/6FA8B74A4F3D4934A73D6292436AF401.html

http://www.fanfiction.net/s/8401984/9/Rescue-Me-Traducci%C3%B3n

http://www.foodsubs.com/MeatcureHams.html

http://www.fotolog.com/laritah_100x100/58343886/

http://www.gaceta.udg.mx/G_nota1.php?id=13760

https://www.google.co.jp/

https://www.google.es/

http://www.lavidaencasa.com/TRUCOS/c2h3.htm

http://www.lne.es/opinion/1773/pelea-presupuestaria/561562.html

http://www.milideas.net/fotos-e-ideas-para-decorar-en-color-naranja

http://www.moda-barcelona.com/es/pasarela_edicionsanteriors_07_garcia07_tendencia.asp

http://www.noticiaspv.com/vivio-la-amarga-experiencia-de-la-extorsion-telefonica/

http://www.nuevodiarioweb.com.ar/notas/2013/6/24/ciudad-460827.asp

http://www.ojocientifico.com/2011/04/03/como-se-forma-la-lluvia-acida

http://www.patatabrava.com/blogs/marco_vannorden/nunca_antes_habia_vomitado-t16987.htm

http://www.politicaenriver.com/2012/09/river-plate-3-vs-3-newells-partido-al.html

http://www.renatocardoso.com/es/2013/08/12/el-mal-que-entra-por-los-ojos/

http://www.trendenciasbelleza.com/respuestas/que-colonia-o-perfume-es-el-que-utilizas-cuando-quieres-impresionar-a-alguien

http://www.saboresdeteruel.es/component/virtuemart/ofertas/melocoton-embolsado-bajo-aragon-1392012-06-10-15-39-59-detail

http://www.solostocks.com/venta-productos/fragancias-desodorantes/perfumes/armand-basi-in-red-edp-vapo-30-ml-7729256

http://www.vanguardia.com/vida-y-estilo/galeria/143508-demasiado-empalagosa

http://www.yves-rocher.es/control/perfumes/perfumes-afrutados/edt-de-toilette-de-nuez-de-coco-de-malasia-100-ml/

http://1-beat.com/category/techno/

http://39x28altimetrias.com/rugeelleon.html

http://63larga.blogspot.jp/

Google Libros

Daudet, E.: *La Gioconda llora de madrugada*

Gimenez Bartlett, A. (2002) *La deuda de Eva. Del pecado de ser feas y el deber de ser hermosas*

Santos López, M (2010) *Rowena*

Revueltas, J. (1996) *Los días terrenales*, Segunda edición, Ediciones Era: México.

参考文献

青谷法子 (2001) 「多義語の語彙ネットワークに関する研究（１）—形容詞「甘い」について—」, 東海学園大学研究紀要, 第 6 巻, pp.149-159.

安部清哉. (2007) 「日本語の基礎形容詞語彙の類型的構造および方言分布成立「五味」とスイ・スッパイ・スッカイの語源（中国語「酢」）の再検討」, 『人文』９, 学習院大学人文科学研究所, pp.7-34.
Digital version available in: http://hdl.handle.net/10959/2740

Alarcos Llorach, E. (1994) *Gramática de la lengua española*, Espasa: Madrid.

Backhouse, A. E. (1978) *Japanese Taste Terms: A Study of a Lexical Field*. Ph.D. Thesis. University of Edinburgh: U.K.

Backhouse, A. E. (1994) *The Lexical Field of Taste: A Semantic Study of Japanese Taste Terms*, Cambridge University Press: U.K.

Barcelona, A. (2001) "On the systematic contrastive analysis of conceptual metaphors: case studies and proposed methodology". In M. Pütz, S. Niemeier and R. Dirven (eds.) *Applied Cognitive Linguistics II: Language Pedagogy*, Mouton de Gruyter: Berlin, pp.117-146.

Bello, A. (1847) *Gramática de la lengua castellana*, (En línea) 14 de Junio del 2006. Disponible en www.enj.org [Fecha de consulta: 27 de Septiembre del 2011].

Chamberlain, A. F. (1903) "Primitive Taste-Words" The American Journal of Psychology, Vol.14, No.3/4, pp.146-153, University of Illinois Press: U.S.
Stable URL: http://www.jstor.org/stable/1412312

Cejador y Franca, J. (1941) *Diccionario etimológico – analítico latino castellano*, segunda edición, La Moderna: Murcia.

張鳳玲 (2010) 『日中味覚語彙の多義構造—「甘い」"甜" 及び「辛い」"辣" を中心に—』, 銘傳大學應用日語學系碩士班論文.

Corominas, J. (2011) *Breve diccionario etimológico de la lengua castellana Prólogo de José Antonio Pascual*, Tercera edición muy revisada y mejorada, Gredos: Madrid.

Corominas, J. & Pascual, J. A. (1992) *Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico*, Volumen II, 2ª reimpresión, Gredos: Madrid.

De Mello, G. (1974) *Español contemporáneo*, Harper and Row: New York.

Demonte, V. (1999) "El adjetivo: Clases y usos. La posición del adjetivo en el sintagma nominal" En: Bosque, I. & Demonte, V. (eds), *Gramática descriptiva de la lengua española*, Real Academia Española, Espasa: Madrid.

De Silva, G. G. (2001) Breve diccionario etimológico de la lengua española, segunda edición, segunda reimpresión, Fondo de Cultura Económica: México.

De Valois, R. (1960) “Color Vision Mechanisms in the Monkey”, Journal of General Physiology, Vol.43 (6), pp.115-128, Routledge: U.K.
PDF version available in: http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC2195063/

Dirven, R. (1985) “Metaphor for Extending the Lexicon”, In Paprotté, W. & Dirven, R. (eds.) *The Ubiquity of Metaphor: Metaphor in Language and Thought*, John Benjamns Publishing Company: Amsterdam / Philadelphia.

Glees, P., Le Gros Clark, W. E. (1941) “The termination of optic fibres in the lateral geniculate body of the monkey”, Journal of Anatomy, Vol.75 (3), pp.295-308, Blackwell Publishing: U.K.
PDF version available in: http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC1252642/

Hanssen, F. (1913) *Gramática histórica de la lengua castellana*, Halle: Niemeyer.

橋本芳郎 (1972) 「水産物の味」, 調理科学 Vol.5 (1), pp.2-7, 一般社団法人日本調理科学会.

飛騨良文・浅田秀子 (1991)「現代形容詞用法辞典」, 東京堂出版.

堀田英夫 (2011)「スペイン語辞書の歴史―日本語との二言語辞書をめぐって―」愛知県立大学外国語学部紀要言語・文学編, 第 43 号, pp.171-196.

Ibarretxe Antuñano, I. (2011) “Metáforas de la percepción: una aproximación desde la lingüística cognitiva”, En C. Santibáñez y J. Osorio (eds.) *Recorridos de la metáfora: mente, espacio y diálogo*, EUDEC: Chile.

池上嘉彦 (1999[8])『意味論』, 大修館書店.

池上嘉彦 (2011) 「日本語と主観性・主体性」『ひつじ意味論講座　主観性と主体性』, 第５巻, pp.49-67.

伊藤幸一 (1987) 「現代日本語における基礎味覚語彙の認識的体系序説 ―言語人類学的視点を求める―」, 法政大学教養部紀要 第 62 号, pp.1-24, 法政大学教養部.

Jantra, Jantima (1999)「日本語形容詞「あまい」の意味拡張と広告における多義的使用の分析：英語<sweet>及びタイ語<wǎan>と対照しながら」, Dynamis:ことばと文化, 3, pp.142-193.

姜 紅 (2012) 「コーパスに基づく多義語「甘い」の意味再分類及び語義分布調査」, 第 1 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集, pp.59-68.

柏柳誠. (2006) 「味覚の生理学」, 口腔・咽頭科, Vol. 18, No.2, pp.207-215.
URL: http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/modules/xoonips/download.php/2006148634.pdf?file_id=4094

国広哲弥 (1989) 「五感をあらわす語彙―共感覚比喩的体系」, 月刊言語, 215 号, pp.28-31.

国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』, 大修館書店.

Lakoff, G. (1987) Woman, Fire, and Dangerous Things, The University of Chicago Press: Chicago.（レイコフ・G, （池上嘉彦　河上誓作他訳）(1993) 『認知意味論』紀伊國屋書店.）

Lehrer, A. (1978) “Structures of the Lexicon and Transfer of Meaning”, Lingua, 45, pp.95-123, North-Holland Publishing Company: Netherland.

Lenz, R. (1925) “La oración y sus partes: estudios de gramática general y castellana”, *Revista de Filología Española*, Publicaciones de la Revista de Filología Española.

Luque Durán, J. D. (2004) “Aspectos universales y particulares del léxico de las lenguas del mundo”, Versión digital disponible en: http://elies.rediris.es/elies21/

Magee, H. (2009) Talking About Taste: How the Description of Food Means and Does. Linguistics Thesis: Swarthmore College, Digital version available in: http://www.swarthmore.edu/SocSci/Linguistics/Theses09/Magee.pdf

皆島博 (2005)「日英語の味覚形容詞：「アマイ」と”sweet”」福井大学教育地域科学部紀要　第 I 部,　人文科学　外国語・外国文学編 61, pp.11-29.

最上英明 (2002) 「味覚形容詞によるメタファー表現―sauer の事例分析を中心に―」香川大学経済論叢, 第 75 巻, 第 2 号, pp.161-172.

Moiseeva, N. (1999) “From Tongue to Feelings” In Jürgen Schlaeger, Gesa Stedman (eds.), *Representations of Emotions*, Tübingen: Narr, pp.173-183.

Moliner, M. (2007) Diccionario de uso del español, 3ª edición, Gredos: Madrid.

籾山洋介 (2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」, 認知言語学論考, No.1, pp.29-58.

武藤彩加 (2000a) 「味覚形容詞『渋い』と『苦い』の意味分析―類似性と相違性の指摘」, 韓日語文論集, 第 4 輯, 韓日日語日文学会, pp.249-267.

武藤彩加 (2000b) 「『感覚間の意味転用』を支える『メタファー』と『メトニミー』:『共感覚比喩』とは何か」, ことばの科学第 13 号, pp.97-116.

武藤彩加 (2001a) 「味覚形容詞『甘い』と『辛い』の多義構造」, 日本語教育, 第 110 号, 日本語教育学会, pp. 42-51.

武藤彩加 (2001b)「『共感覚比喩（表現）』の『特殊性』について―『共感覚（色聴）』現象との関連性、および『身体性に基づく制約』をめぐる考察―」,名古屋明徳短期大学紀要, 第 16 号, pp.179-200.

武藤彩加 (2002) 「味覚形容詞『酸っぱい』の意味」, 名古屋明徳短期大学紀要, 第 17 号, 名古屋明徳短期大学, pp.73-89.

武藤彩加 (2004) 「共感覚的比喩（表現）」の動機付けに関する整理と分類」, 日本認知言語学会論文集 pp.99-109.

武藤彩加 (2010) 「オノマトペと共感覚」, 大橋正房+シズル研究会編著『「おいしい」感覚と言葉―食感の世代―』pp.66-69, 株式会社 BMFT 出版部.

Myers, C. S. (1904) “The Taste-names of Primitive Peoples” British Journal of Psychology, Vol.1 (2), pp.117–126.

西尾寅弥 (1983) 「食の感覚を表わす形容詞」, 柴田武・石毛直道編『食のことば』pp.99-111, ドメス出版.

仁田義雄 (2010) 『語彙論的統語論の観点から』, ひつじ書房.

小田希望 (2003) 「甘くてスウィート」, 瀬戸賢一編著『ことばは味を超える—美味しい表現の探求—』海鳴社.

大橋正房 (2010) 『「おいしい」感覚と言葉—食感の世代—』, 株式会社 BMFT 出版部.

O’ Mahony, M. & Manzano Alba, C. (1980) “Taste descriptions in Spanish and English” Chemical Senses 5 (1): pp.47-62.

太田強正 (2012) 『スペイン語語源辞典』, 春風社.

Real Academia Española (2001) *Diccionario de la lengua española*, Vigésima segunda edición, Espasa: Madrid. Versión digital disponible en: http://rae.es/rae.html

Real Academia Española & Asociación de academias americanas (2010) *Nueva gramática de la lengua española*, Espasa: Madrid.

崔明愛 / 馬場俊臣 (2010)「日本語と中国語の味覚表現の比較—「甘い」「辛い」を中心に—」, 北海道教育大学紀要人文科学・社会科学編, 60(2) pp.65-78.

Salvá, V. (1830) *Gramática de la lengua castellana, según se habla ahora*, Estudio y edición de Margarita Lliteras I (1988), Bibliotheca Philologica, Arco/Libros: Madrid,

瀬戸賢一 (2003) 「五感で味わう」, 瀬戸賢一編著『ことばは味を超える—美味しい表現の探求—』海鳴社.

Solé, Y. R. and Solé, C. A. (1977) *Modern Spanish Syntax, Lexington*, MA: D.C. Heath, p.231.

高垣敏博監修 (2007) 『西和中辞典』, 小学館.

Terker, A. (1985) “On Spanish Adjective Position” Hispania, Vol.68, No.3, pp.502-509.

辻幸夫編 (2002) 『認知言語学キーワード辞典』, 研究社.

上田博人 (2008)『スペイン語ガイドブックー形容詞の位置』 *lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp/~cueda/gakusyu/guia/kei-huku/keiyoichi.pdf*

Ullmann, S. (1959) *The Principles of Semantics*, Second Edition (with additional material), Basil Blackwell: London. （ウルマン, S. （山口秀夫訳）(1964) 『意味論』紀伊国屋書店.）

Williams, J. M. (1976) “Syneasthetic Adjectives: A Possible Law of Semantic Change” Language, 52, pp.461-478.

八木克正 (2011) 「英語形容詞の主観性」, 澤田治美編『ひつじ意味論講座５　主観性と主体性』, ひつじ書房, pp.149-164.

山田進 (1972) 「現代宮古方言味覚語彙考—東京方言との比較を中心に—」, 沖縄文化, 39 号, pp.30-37.

山田善郎監修 (1999) 『現代スペイン語辞典』改訂版, 白水社.
山梨正明 (1988) 『比喩と理解』（認知科学選書 17）, 東京大学出版会.
山野善正 (2009) 『ポケット図解 おいしさの科学がよ～くわかる本』, 秀和システム.
森田康夫・岡田修明・板倉俊・大江和弘編 (2012) 『デジタル大辞泉』, 小学館.